

# GLAFS

博士課程教育リーディングプログラム  
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」

Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

**2017 活動報告書**

# 目次

# CONTENTS

はじめに……002

第1章 プログラムについて……003

- 1 プログラムの概要……004
- 2 カリキュラムと修了要件……005
- 3 プログラム担当教員……008
- 4 履修生に対する経済的支援……011
- 5 応募状況と合格者……012

第2章 2017年度教育活動……013

- 1 講義群……014
- 2 演習……020
- 3 合宿……040
- 4 国際・産学活動……044
- 5 シンポジウム……048
- 6 研究会・セミナー……050

第3章 若手研究者による研究成果……053

- 1 論文等……054
- 2 受賞歴……074
- 3 コース生による研究成果……075
- 4 コース生受賞歴……091

第4章 広報活動……093

[添付資料] 2017年度学生募集要項……098

## はじめに

この報告書は GLAFS の平成 29 年度（2017 年度）の活動報告です。

「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」（GLAFS）には、平成 29 年度末現在、72 人のコース生が在籍しています。

活力ある超高齢社会を実現するためには、分野横断的専門家のチームと地域住民、行政、企業等による協働的活動を主導し、様々な現場の様々な課題を解決する力を備えた多様な人材が必要になります。

GLAFS では、いわゆる座学としての高齢社会問題に関する俯瞰的講義や先端的テーマについてのセミナーの他、様々な専門の学生や教員がチームを組んで、地域住民や行政等と現実的な課題解決に取り組むフィールド演習（グループ共同演習）や、様々な現場の第一線で活躍されている実践家をお招きして深い議論をしていただくコアセミナーなどを通して、自らの専門分野に関する研究能力だけでなく、俯瞰力・実践力を身に着けたリーダーの養成に注力してきました。2017 年度末までに修了生 12 名を送り出すなど、その成果が表れ始めてきたところです。

また、2016 年度に受けた中間評価では A の評価をいただきました。本プロジェクトの終了する 2019 年度末に向けて、また、その次の段階における本プログラムの飛躍的な展開を視野に入れつつ、2018 年度も着実にプログラムを推進する所存です。

平成 30 年 4 月

プログラムコーディネーター

東京大学高齢社会総合研究機構・機構長

工学系研究科教授

大方潤一郎

# 1. プログラムについて

# 1. プログラムの概要

## 本プログラムの目的

日本は、2030年には人口の1/3が高齢者、1/5が後期高齢者という超高齢社会になることが予想されている。また、韓国やシンガポールも2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国も2060年には高齢者人口が1/3に達することが予測される。こうした超高齢社会は世界の歴史に先例のない未知の領域である。高齢化最先進国としての日本には、世界に先駆け、活力ある超高齢社会の姿を構想し実現する責務がある。本プログラムは、高齢者が活力を持って地域社会の中で生活できる期間をより長く、要介護期間や施設収容期間を最小化することを通じて、高齢者自身の生活の質を高め、家族と社会の負担を軽減し、社会全体の活力を維持向上するため、東京大学の高齢社会総合研究機構（IOG）を中核に9研究科30専攻の総力を結集し、修士博士一貫の大学院教育により、活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダーを養成しようとするものである。

活力ある超高齢化社会を実現するためには、都市や地域での市民生活を支える生活環境基盤の3領域、すなわち、

1. 【い（医）】ケア・サポート・システム：医療・看護・介護・みまもり・保育・子育て・福祉等の統合的システム
2. 【しょく（食・職）】社会的サポート・システム：社会的包摂・社会参加・ムコミュニティ活動等の促進体制
3. 【じゅう（住）】物的空間的生活環境システム：居住環境・歩行環境・交通環境・街並環境・商業環境・コミュニティ交流施設・オープンスペースや生活支援システム

をリデザインし組み替えていく必要がある。こうした新しい超高齢社会のための社会システムを構想し実現する取り組みを世界各地の現場で主導する、高度な人材を養成することが本プログラムの目的である。



本プログラムの組織  
※ IOG：高齢社会総合研究機構

## 本プログラムの特色

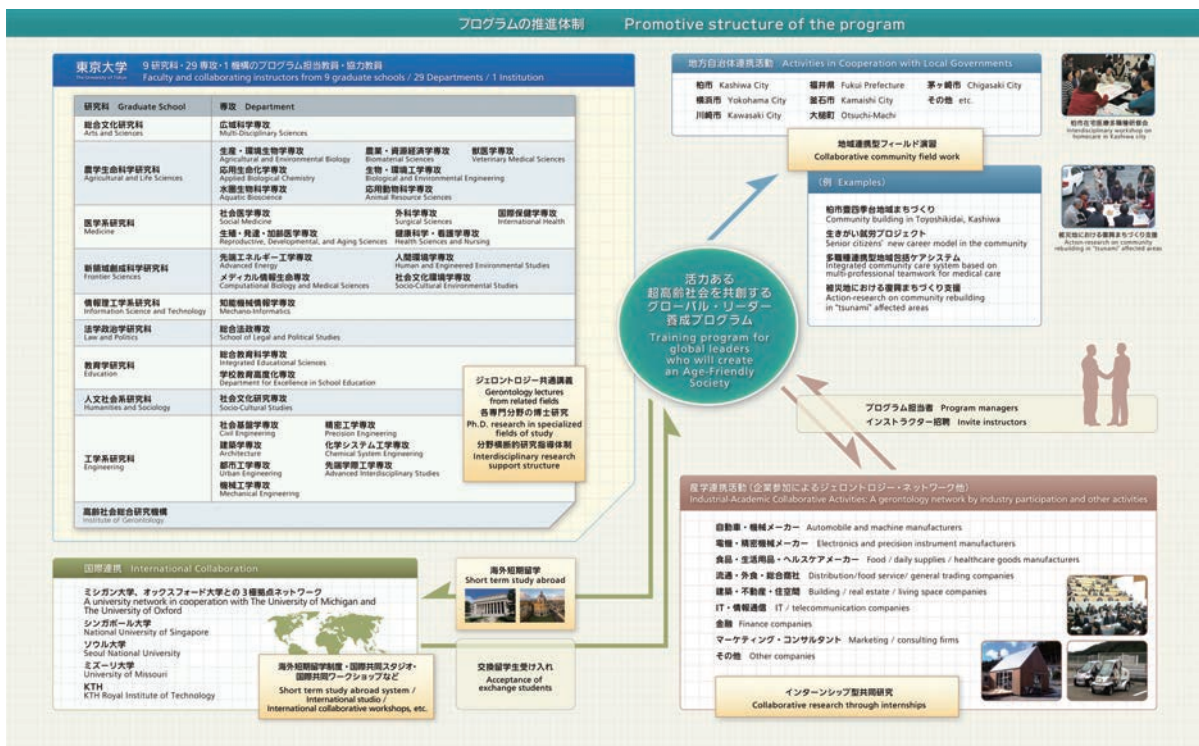
本プログラムでは、本学の1機構9研究科30専攻の教員や連携企業・自治体および海外の大学等のサポートの下で、選り抜かれた大学院生が、

1. 高齢社会問題に関する講義を通じ、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的な知識を獲得し
2. 多様な分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組むフィールド・アクション・スタディ演習や、国際的チームワーク力を育成するグローバル演習によって、現実社会における課題解決能力を養い
3. 高齢社会の実態や真のニーズを反映した独創的で質の高い博士研究を成し遂げることを通じ、活力ある超高齢社会を共創するための能力

すなわち、

1. 自身の専門分野に関する専門的学術研究能力
2. 高齢社会問題に関する幅広い俯瞰力
3. 多分野の専門家チームを主導して問題解決に取り組む実践的課題解決能力

の3つの能力を兼ね備えた、グローバルなリーダーシップを発揮できる人材を養成する。



プログラムの特色

## 2. カリキュラムと修了要件

### カリキュラム

本プログラムでは次のような「講義」と「演習」による独自のカリキュラムを組んで、超高齢社

会を共創していくリーダーを育成する。

### 【俯瞰力を養う高齢社会総合研究学・講義群】

9 研究科・30 専攻・1 機構の教員が連携し、様々な角度から超高齢社会の課題を講義。

#### ■ 高齢社会総合研究学概論 I および II

#### ■ 高齢社会総合研究学特論

高齢社会の社会制度

高齢社会の住まい・まちづくり

高齢社会のケア・サポート・システム

高齢者法

高齢社会の人文学・社会科学

高齢者の食と健康

ジェロンテクノロジー

### 【分野横断的にアプローチする演習】

#### ■ 実践的課題解決能力を養うフィールド演習

演習指導には企業・行政等の現場の実務家をインストラクターとして招請。

F 演習 1：分野横断的チームを組んで地域社会の現実の課題に取り組むコミュニティ・アクション型（地域連携）

F 演習 2：多様な高齢者や市民に寄り添い心を通わせるケア・システム実習型（対人ケア実習）

F 演習 3：企業・行政等の現場で先端的課題に取り組むインターンシップ型（産学連携）

#### ■ グローバルなリーダーシップを養うグローバル演習

高齢社会総合研究に関する世界トップの教育拠点であるミシガン大学とオックスフォード大学、そして東京大学が連携。

G 演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

G 演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

G 演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー（希望者のみ）

#### ■ 分野横断的研究指導を行うコアセミナー

他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を通じて学際的な研究指導の体制を確保。

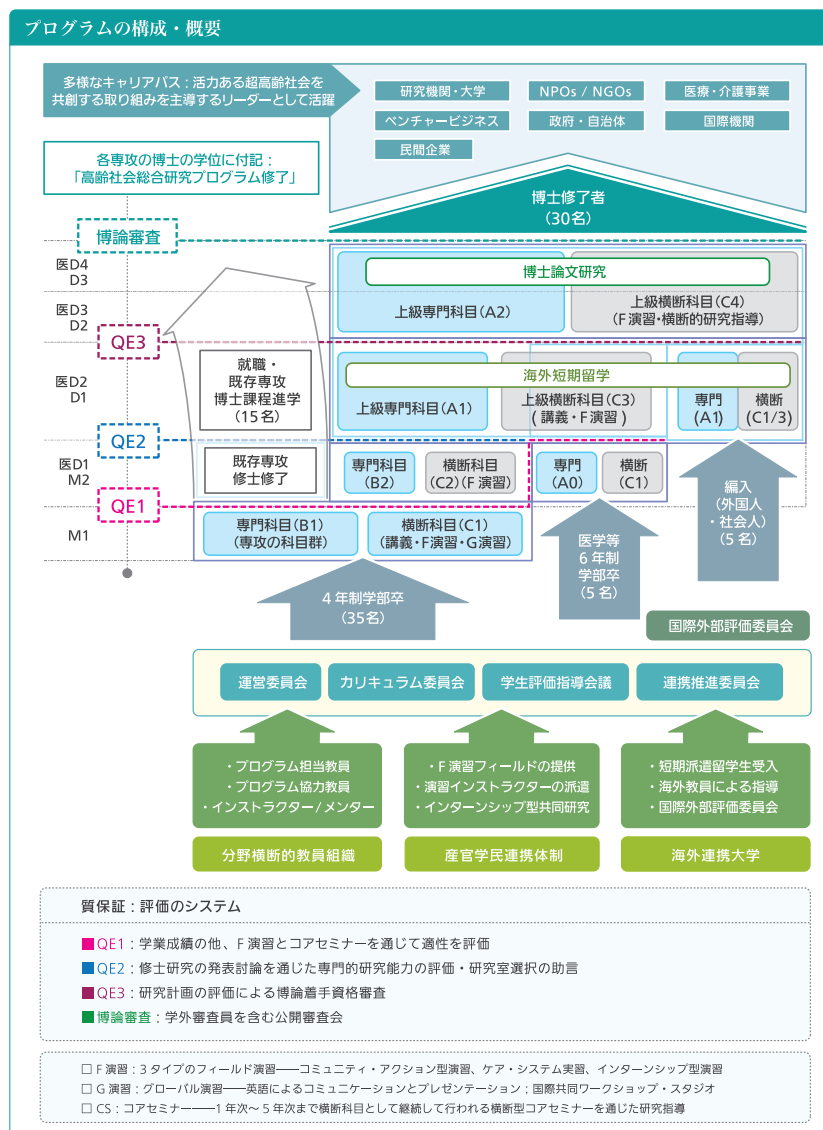
CS1：専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ

## 履修要件

本プログラムのコース生は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する科目について20単位（講義10単位・演習10単位）以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位（講義10単位・演習8単位）以上を、博士後期課程入学時から本プログラムに編入したコース生は16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記される。

なお、博士前期課程（修士課程）において（4年制博士課程においては2年次年度末までに）12単位（講義8単位・演習4単位）以上を取得すること。ただし、博士後期課程入学時から本プログラムに参加したコース生は博士後期課程修了時までまでに16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得するものとする。（2017年度シラバスより）



プログラムの枠組み



### 3. プログラム担当教員

#### プログラム担当教員

職名は2017年度3月31日現在

氏名	所属（研究科・専攻等）・職名	専門	役割分担
(プログラム責任者)			
大久保 達也	大学院工学系研究科・研究科長／総括プロジェクト機構プラチナ社会総括寄付講座・教授（兼務）	プラチナ社会、化学工学、ナノ材料	事業統括、生活サポートシステム分野担当
(プログラムコーディネーター)			
大方 潤一郎	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・機構長	都市計画	プログラムの企画推進調整、運営委員会委員長、居住環境分野担当
(プログラム担当教員)			
秋山 弘子	高齢社会総合研究機構・特任教授	老年学	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当、国際連携推進担当
辻 哲夫	高齢社会総合研究機構・特任教授	在宅医療、ケア政策、社会保障政策	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当、産官学民連携推進担当
田中 敏明	高齢社会総合研究機構・特任教授	福祉工学、理学療法、人間工学、病態運動学	生活サポートシステム分野担当
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・教授、副機構長	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
武川 正吾	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	福祉社会学	社会システム分野担当
白波瀬 佐和子	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	社会学	社会システム分野担当
牧野 篤	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	社会教育学、生涯学習論	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
東郷 史治	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・准教授	教育生理学	ケアシステム分野担当、プログラム評価担当
北村 友人	大学院教育学研究科学校教育高度化専攻・准教授	教育政策、国際教育開発論	社会システム分野担当、国際連携推進担当
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科総合法政専攻・教授	政治学	社会システム分野担当、国際連携推進担当
岩村 正彦	大学院法学政治学研究科法曹養成専攻・研究科長、教授	社会保障法	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
岩本 康志	大学院経済学研究科現代経済専攻・教授	公共経済学	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
荒井 良雄	大学院総合文化研究科広域科学専攻・教授	人文地理学	社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
原田 昇	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授	都市交通計画	居住環境分野担当
光石 衛	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授	医用工学、生産工学	生活サポートシステム分野担当
羽藤 英二	大学院工学系研究科社会基盤学専攻・教授	交通計画	居住環境分野担当
大月 敏雄	大学院工学系研究科建築学専攻・教授	建築計画	居住環境分野担当、カリキュラム編成担当
中尾 政之	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授	生産技術、ナノ転写、失敗学	生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
浅間 一	大学院工学系研究科精密工学専攻・教授	サービスロボテック、身体性システム科学、自律分散システム	生活サポートシステム分野担当
巖淵 守	先端科学技術研究センター・准教授	支援工学	生活サポートシステム分野担当

檜山 敦	先端科学技術研究センター・講師	複合現実感、ヒューマンインターフェイス、ジェロントロジー	生活サポートシステム担当
安永 円理子	大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構・准教授（同研究科生物・環境工学専攻兼任/生産・環境生物学専攻兼任）	ポストハーベスト工学	食分野担当
阿部 啓子	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・特任教授	食品科学、味覚科学、遺伝子科学	食分野担当、産官学民連携推進担当
佐藤 隆一郎	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・教授	食品生化学	食分野担当、プログラム自己評価・外部評価担当
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科水圏生物学専攻・教授	水産化学・食品科学	食分野担当
中嶋 康博	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・教授	農業経済学、フードシステム論	食分野担当
関崎 勉	大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター長・教授（同研究科応用動物科学専攻兼任/獣医学専攻兼任）	獣医細菌学、食品病原微生物学	食分野担当
橋本 英樹	大学院医学系研究科社会医学専攻・教授	医療経済学、社会学	ケアシステム分野担当、社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
秋下 雅弘	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・教授/高齢社会総合研究機構・副機構長	老年医学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
小川 純人	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・准教授	老年医学	ケアシステム分野担当
福原 浩	大学院医学系研究科外科学専攻・准教授	泌尿器外科学	ケアシステム分野担当
芳賀 信彦	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	リハビリテーション医学	ケアシステム分野担当
神馬 征峰	大学院医学系研究科国際保健学専攻・教授	国際保健・ヘルスプロモーション	ケアシステム分野担当
山本 則子	大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻・教授	高齢者在宅長期ケア看護学	ケアシステム分野担当
森 武俊	大学院医学系研究科ライフサポート技術開発学（モルテン）寄附講座・特任教授	看護工学	ケアシステム分野担当、生活サポートシステム分野担当
堀 洋一	大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻・教授	電気工学、制御工学	生活サポートシステム分野担当
菅野 純夫	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	ゲノム医科学	ケアシステム分野担当
内丸 薫	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	血液内科学	ケアシステム分野担当
四柳 宏	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	感染症学	ケアシステム分野担当、フィールド演習企画運営担当
鎌田 実	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	生活支援工学	プログラムコーディネーター補佐、生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
飛原 英治	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	熱工学、冷凍空調工学	生活サポートシステム分野担当
岡部 明子	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	建築環境教育	居住環境分野担当
堀田 昌英	大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻・教授	社会的意思決定論、コンフリクトマネジメント、開発と環境社会配慮、社会基盤マネジメント	社会システム分野担当
鳴海 拓志	大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻・講師	バーチャルリアリティ、人間拡張工学	生活サポートシステム担当
菅原 育子	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会心理学、社会老年学	社会システム分野担当
村山 洋史	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会疫学、公衆衛生学、老年学	ケアシステム分野担当
後藤 純	高齢社会総合研究機構・特任講師	都市計画、まちづくり、地域包括ケアシステム、総合老年学	居住環境分野担当

## 学外プログラム担当者

氏名	所属 (研究科・専攻等)・職名	専門	役割分担
Toni Claudette Antonucci	ミシガン大学・副学長 (Associate Vice President for Research, Social Sciences and the Humanities)	ジェロントロジー	国際連携アドバイザー
David English	ミズーリ大学法科大学院・教授	高齢者法	国際連携アドバイザー
Sarah Harper	Director, Oxford Institute of Population Ageing / Professor of Gerontology and Senior Research Fellow, Nuffield College, Oxford University	ソーシャルジェロントロジー	国際連携推進担当
Gyounghae Han	Professor, Division of Consumer Studies and Child and Family Studies, College of Human Ecology, Seoul National University	Family Study	国際連携推進担当
Angelique Chan	Associate Professor, Department of Sociology, National University of Singapore and Duke-NUS Graduate Medical School	社会学	国際連携推進担当
大内 尉義	国家公務員共済組合連合会虎の門病院・院長 / 東京大学・名誉教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
永田 久美子	社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修センター・研究部部长	認知症ケア、当事者ネットワーク	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
太田 秀樹	医療法人アスミス・理事長	高齢者・障害者医療	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
秋山 正子	(株) ケアーズ白十字訪問看護ステーション・統括所長	地域看護、在宅医療連携	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
木村 昌平	一般社団法人日本家庭教育協会・会長 / 益子昌平塾・塾長 / セコム (株)・相談役 (元会長) / セコムグループ・代表補佐	社会の安全安心の確保	産官学民連携アドバイザー
野呂 順一	(株) ニッセイ基礎研究所・代表取締役社長	保険数理、年金数理、経済統計	産官学民連携アドバイザー
濱 隆	大和ハウス工業 (株)・取締役常務執行役員 / 環境エネルギー事業担当	高齢者住宅開発、スマートコミュニティ開発、再生エネルギー事業	産官学民連携アドバイザー
滝山 真也	(株) ベネッセホールディングス・取締役 / (株) ベネッセスタイルケア・代表取締役社長	介護事業等のグループ経営	産官学民連携アドバイザー
関根 千佳	(株) ユーディット・会長兼シニアフェロー / 放送大学・客員教授	ユニバーサルデザイン	産官学民連携アドバイザー
大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院・教授	医療福祉ジャーナリズム	産官学民連携アドバイザー
南 砂	(株) 読売新聞東京本社・取締役調査研究本部長	医療・医学、科学技術政策、メディア論	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
河出 卓郎	(株) 毎日新聞東京本社企画編集室 / 東京都健康長寿医療センター・非常勤研究員	社会保障論	産官学民連携アドバイザー
John Creighton Campbell	ミシガン大学・名誉教授 / 高齢社会総合研究機構・客員研究員	Gerontology	国際連携推進アドバイザー
宮島 俊彦	三井住友海上火災保険 (株)・顧問 / 岡山大学・客員教授 / 日本介護経営学会・理事 / 東京女子医科大学・監事 / 高齢社会総合研究機構・客員研究員	高齢者ケアシステム	産官学民連携アドバイザー
樋口 範雄	武蔵野大学法学部・特任教授	英米法、医事法、信託法	社会システム分野担当、国際連携推進担当

## 特任助教

氏名	所属	専門
木全 真理	高齢社会総合研究機構	在宅看護

三浦 貴大	高齢社会総合研究機構	福祉工学、ヒューマンインタフェース、アクセシビリティ、音響工学
萩野 亮吾	高齢社会総合研究機構	社会教育、生涯学習
孫 輔卿	高齢社会総合研究機構	老年医学
室山 良介	高齢社会総合研究機構	消化器内科学
朴 孝淑	高齢社会総合研究機構	労働法
西野 亜希子	高齢社会総合研究機構	建築計画、住宅改修
藤崎 万裕	高齢社会総合研究機構	地域看護学
税所 真也(2017.10～)	高齢社会総合研究機構	福祉社会学、家族社会学

## 4. 履修生に対する経済的支援

### 奨学金制度

優秀な学生が経済的な理由から博士課程への進学を断念することのないよう、学生の希望と能力に応じ奨励金を支給する制度が用意されている。2017年度は、博士前期課程（修士課程）2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額、博士後期課程のコース生には、学業成績等に応じ月額20万円を上限とした額と定めた。

### 留学制度

原則として全学生を第3年次（医学系等4年生博士課程にあっては第2年次）の夏休み（8月）から冬学期の間、6ヶ月以内の海外短期留学で派遣し、その旅費を支給することとした。以下がその概略である。

- ミシガン大学：修士課程レベル以上のISR（Institute for Social Research）、SPH（School of Public Health）などのサマースクールや短期コースの受講。
- ミズーリ大学：主に高齢社会問題について法学分野の研究を遂行する学生を想定。
- オックスフォード大学：修士課程レベル以上のサマースクールや短期コースの受講。
- アジア地域における高齢社会問題を研究したい学生のためにはシンガポール大学、ソウル大学等と連携。
- その他：上記に限らず学生は、博士研究のテーマに適した留学先への留学が可能。  
\*海外短期留学には、大学への留学だけではなく、海外の企業等におけるインターンシップ型留学を含む。

## 5. 応募状況と合格者

### 2017年 応募状況と合格者

プログラム募集定員数（実数）		35人
① 応募学生数		29人
	うち留学生数	11人
	うち自大学出身者数	9人（1人）
	うち他大学出身者数	20人（10人）
	うち社会人学生数	9人（4人）
	うち女性数	12人（4人）
② 合格者数		16人
	うち留学生数	3人
	うち自大学出身者数	7人（0人）
	うち他大学出身者数	9人（3人）
	うち社会人学生数	4人（1人）
	うち女性数	8人（2人）
③ ②のうち受講学生数		15人
	うち留学生数	3人
	うち自大学出身者数	6人（0人）
	うち他大学出身者数	9人（3人）
	うち社会人学生数	4人（1人）
	うち女性数	7人（2人）
プログラム合格倍率（①応募学生数／②合格者数） （小数点第三位を四捨五入）		1.81倍
充足率（合格者数／募集定員）		46.00%
<b>【備考】</b> ※編入学生： 平成29年度：修士課程2年次に編入学 3名、博士後期課程1年次に編入学 2名 ※（ ）は留学生の人数 ※2018年3月31日現在		

## **2. 2017 年度教育活動**

# 1. 講義群

2017年度には以下のように必修・選択必修を開講し、このほかにも昨年同様、20の選択講義を設けた。

## ■ 高齢社会総合研究学概論Ⅰ（高齢者の体と心：老いとつきあう）

本授業では高齢社会におけるさまざまな課題に対して、主として高齢者の体と心について、国内のトップ講師からの講義を受け、老いとつき合うとはどういうことであるのか、その基礎を分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて、高齢者の健康寿命を延ばし、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者が快活に暮らし、社会の支え手となって活躍する活力ある超高齢社会について考えていく。

### 【授業日程】

- 4/12 第1回 なぜ老いる？ならば上手に老いるには？（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 4/19 第2回 疾病・障害とヘルスプロモーション（秋下雅弘：医学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 4/26 第3回 高齢社会の課題と可能性（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 5/10 第4回 高齢者と看護学（山本則子：医学系研究科教授）
- 5/17 第5回 知的機能の変化と適応（高山緑：慶応義塾大学教授）
- 5/24 第6回 高齢社会と「学び」の専門職：住民の主体的な学びを促すコーディネーター（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 5/31 第7回 栄養とエイジング（阿部啓子：東京大学名誉教授・農学生命科学研究科特任教授）
- 6/7 第8回 ケアの当事者学（上野千鶴子：東京大学名誉教授・認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク〈WAN〉理事長）
- 6/14 第9回 身体機能を補う福祉工学機器（伊福部達：北海道大学、東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 6/21 第10回 老化と生物学（孫輔卿：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 6/28 第11回 高齢期の社会関係（菅原育子：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 7/5 第12回 人生の最終段階のケア（会田薫子：人文社会系研究科特任教授）
- 7/12 第13回 高齢者の働き方とライフスタイル（前田信彦：立命館大学教授）

## ■ 高齢社会総合研究学概論Ⅱ（高齢社会のリ・デザイン）

本授業では主として社会システムおよび、それを支える居住環境システムについて、国内のトッ

プ講師からの講義を受け、高齢社会のリ・デザインについて分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて活動レベルが低下して介助が必要になった後も、施設収容により対応するのではなく、住み慣れた地域社会の中で、できるだけ自立的に活力を維持しながら暮らせる社会システム及び居住環境システムについて考える。

#### 【授業日程】

- 10/4 第1回 活力ある超高齢社会の構想と共創（大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
- 10/11 第2回 高齢化の人口学（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
- 10/18 第3回 自己決定と本人保護（朴孝淑：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 10/25 第4回 年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用（濱口桂一郎：労働政策研究・研修機構統括研究員）
- 11/1 第5回 人口減少社会における年金と社会保障財政（岩本康志：経済学研究科教授）
- 11/8 第6回 高齢者の移動を支える（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/15 第7回 高齢期の住まい方（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 11/22 第8回 高齢期の健康づくり：公衆衛生学の視点から（村山洋史：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 11/29 第9回 小規模多機能型居宅介護（柴田範子：NPO 法人「楽」理事長）
- 12/6 第10回 21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える（辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 12/13 第11回 シニア×ICT（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
- 1/10 第12回 地域包括ケアシステムの地域実装（1）（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 1/17 第13回 地域包括ケアシステムの地域実装（2）（関野幸吉：SOMPO ケアメッセージ株執行役員）

#### ■ 高齢社会総合研究学特論Ⅱ（超高齢社会の住まい・まちづくり）

超高齢社会の諸課題に対応した地域社会の物的・社会的な生活環境について、多面的に講義を行う。

#### 【授業日程】

- 4/4 総論 都市と計画
  - 第1・2回 高齢社会対応の住まいとまちづくり（大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
- 4/11 交通とまちづくり
  - 第3回 高齢社会と交通（原田昇：工学系研究科教授）
  - 第4回 高齢者の移動とまちづくり（大森宣暁：宇都宮大学教授）
- 4/18 バリアフリー環境とまちづくり
  - 第5回 バリアフリーのまちづくり（高橋儀平：東洋大学教授）



- 第 6 回 弱視者にとってのバリアフリー（松田雄二：工学系研究科准教授）
- 4/25 地域に住む
- 第 7 回 高齢者の住まいの建築・福祉制度における体系 1（田中紀之、土師真裕子：高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 第 8 回 高齢者の住まいの建築・福祉制度における体系 2（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 5/9 高齢者の住まい
- 第 9 回 高齢社会の住まい—近居—（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 第 10 回 地域循環居住（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 5/16 高齢者の転倒と住まい
- 第 11 回 住まいの日常災害と高齢者（直井英雄：東京理科大学名誉教授）
- 第 12 回 高齢者の転倒と住まい（西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 5/23 高齢者の転倒
- 第 13・14 回 弱った高齢者の住まい（西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 5/30 まちづくり
- 第 15・16 回 地域配置論（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）

## ■ 高齢社会総合研究学特論Ⅳ（高齢社会のケア・サポート・システム）

高齢者の特性や生活を理解し、体系的に高齢社会における高齢者へのケア・サポート・システムを学ぶ。

### 【授業日程】

- 6/8 第 1 回 超高齢社会に求められるケア・サポート・システム（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 6/8 第 2 回 自治体と医師会の一体的な地域包括ケアシステムの推進（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長、稲荷田修一：柏市保健福祉部地域医療推進課課長、古田達之：柏市医師会在宅プライマリケア担当理事）
- 6/15 第 3 回 医療制度改革と地域包括ケアシステム（宮島俊彦：前内閣官房社会保障改革担当室室長）
- 6/15 第 4 回 地域連携と地域アセスメント（成瀬昂：医学系研究科助教）
- 6/22 第 5 回 高齢者医療の考え方（小島太郎：医学系研究科助教）
- 6/22 第 6 回 老年症候群（小川純人：医学系研究科准教授）
- 6/29 第 7 回 地域包括ケアシステムの理論（筒井孝子：兵庫県立大学大学院教授）
- 6/29 第 8 回 認知症の理解（亀山祐美：医学系研究科助教）
- 7/6 第 9 回 認知症ケアの最前線（永田久美子：認知症介護研究・研修東京センター研究部部長）

- 7/6 第10回 訪問看護と地域包括ケア（秋山正子：白十字訪問看護ステーション統括所長）
- 7/13 第11回 高齢者のケアとサービス：状態別の理解（野口麻衣子：医学系研究科助教）
- 7/13 第12回 在宅医療を推進する新たな地域包括ケアシステム（太田秀樹：医療法人アスミス理事長）

## ■ 高齢社会総合研究学特論Ⅵ（高齢者法）

高齢者に関わる法制度や政策課題について、オムニバス形式での講義およびディスカッションを行う。

### 【授業日程】

- 9/29 第1回 高齢者法の概要と意義
- 10/6 第2回 医療上の決定
- 10/13 第3回 在宅での医療
- 10/20 第4回 高齢者への医療給付制度・介護保険制度など
- 10/27 第5回 高齢者の住まい、特養・療養施設など
- 11/10 第6回 高齢者の住宅問題
- 11/17 第7回 年齢による差別
- 11/24 第8回 成年後見・財産管理と信託・相続
- 12/1 第9回 年金など経済的基盤
- 12/8 第10回 高齢者と職業・社会参加
- 12/15 第11回 情報化の進展と高齢者
- 12/22 第12回 高齢者と移動 交通
- 1/12 第13回 高齢者虐待・高齢者と犯罪

\* 講義はすべて樋口範雄：東京大学名誉教授・武蔵野大学教授、松井孝太：杏林大学専任講師

## ■ 高齢社会総合研究学特論Ⅷ（高齢社会の人文学・社会科学）

高齢社会・超高齢社会における人口構造、社会構造、社会政策、ライフコース、生涯学習などについて、人文学および社会科学的なアプローチにより、活力ある超高齢社会を研究するうえでの基本的な知識を得ることを目標とする。

### 【授業日程】

- 9/28 第1回 地域学校協働活動とコミュニティの未来—生涯学習が課題化される社会（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 10/05 第2回 人口高齢化の社会的意味—世帯／家族の変容に着目して—（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
- 10/12 第3回 高齢化の国際比較（大泉啓一郎：(株)日本総合研究所上席主任研究員）
- 10/19 第4回 高齢期の就労・労働市場（福井康貴：名古屋大学准教授）

- 10/26 第5回 高齢者に対する人生の最終段階のケア—臨床倫理の視点から—（清水哲郎：岩手保健医療大学学長）
- 11/2 第6回 長寿時代のエンドオブライフ・ケア—意思決定支援とACP—（会田薫子：人文社会系研究科特任教授）
- 11/9 第7回 ソーシャル・サポート再考（中田知生：北星学園大学准教授）
- 11/16 第8回 臨床心理学の視点（高橋美保：教育学研究科教授）
- 11/30 第9回 長寿社会に生きる（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 12/07 第10回 高齢期の認知機能—加齢に伴う変化と適応—（権藤恭之：大阪大学准教授）
- 12/14 第11回 超高齢社会の社会政策（武川正吾：人文社会系研究科教授）
- 12/21 第12回 グローバル化とケアの標準化（小川全夫：公益財団法人福岡アジア都市研究所特別研究員）
- 1/11 第13回 「新しい認知症ケア」が家族介護にもたらすものの（井口高志：奈良女子大学准教授）

## ■ 高齢社会総合研究学特論Ⅸ（高齢者の食と健康〈維持〉）

超高齢化を目前にして、いつまでも自立して自分らしく生きる為に、より早期からの健康維持～虚弱予防が重要な鍵となる。そこには本人自身の意識変容・行動変容と良好な社会環境の実現の両面が必要であり、高齢者の様々なプロダクティビティの増進が期待される。そこで、本講義では虚弱（フレイル：Frailty）の最たる要因である加齢性筋肉減少症（サルコペニア）を予防する為に、『食』を中心に見据えた高齢期における早期からの健康維持を包括的な視点から、その予防対策に関する最新知識を学ぶ。

### 【授業日程】

- 11/7 第1回 フレイル（虚弱）予防 —健康寿命延伸を実現するための新概念—（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 第2回 フレイル予防はまさに「総合知によるまちづくり」—住民の食べる力を向上するため—（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 11/14 第3回 高齢期における歯科口腔機能の重要性（平野浩彦：東京都健康長寿医療センター研究所専門副部長）
- 第4回 「食の楽しみ」という原点から介入する高齢者の食育（川口美喜子：大妻女子大学教授）
- 11/28 第5回 「口から食べる幸せ」をサポートするための包括的スキル（小山珠美：NPO 法人人口から食べる幸せを守る会理事長）
- 第6回 終末期を飾る「人生のエンディング食」（下平庄吾：飯塚病院緩和ケア病棟シェフ、柏木秀行：飯塚病院緩和ケア科医師）
- 12/5 第7回 栄養研究から見た日本人の栄養摂取（若林秀隆：横浜市立大学附属市民総合医

療センター リハビリテーション科講師)

- 第 8 回 高齢期における身体活動と運動習慣 (高橋競: 高齢社会総合研究機構特任研究員)
- 12/12 第 9 回 食べることの意義と今後の食育のあり方 (田中弥生: 駒沢女子大学教授)
- 第 10 回 民間企業が高齢者の「食」をどう守るのか (株)クリニコ、イーエヌ大塚製薬(株)、日清ファルマ(株)、(株)ヤヨイサンフーズ)
- 12/19 第 11 回 超高齢になるまでの食習慣 (潮秀樹: 農学生命科学研究科教授)
- 第 12 回 「食」の現状, 「食」の将来 (潮秀樹: 農学生命科学研究科教授)

## ■ 高齢社会総合研究学特論X (ジェロンテクノロジー)

ジェロンテクノロジー (Gerontechnology) とは、高齢者を支援するためのシステムを扱う研究分野である。本科目では、高齢者の生活や社会活動などを支援するための情報・機械システムについて、オムニバス形式で講義を行う。本講義の内容は次の通りである。

- ・衰えた運動器・感覚器の機能補助を行うための運動支援・認知機能支援システム
- ・日進月歩での発展が著しい情報機器を用いた支援手法と、それら機器の使用の支援手法
- ・高齢者就労など社会的課題に対応するための仕組みとシステム

### 【授業日程】

- 10/06 第 1 回 感覚・コミュニケーションを支援する福祉工学 (伊福部達: 北海道大学、東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構客員研究員)  
高齢者就労における ICT の役割 (廣瀬通孝: 情報理工学系研究科教授)
- 10/13 第 2 回 元気高齢者のための新しい社会参画技術 (小林正朋: 日本 IBM (株)東京基礎研究所アクセシビリティ・リサーチ担当)  
高齢者の遠隔就労・社会参加とテレプレゼンス技術 (檜山敦: 先端科学技術研究センター講師)
- 10/20 第 3 回 高齢者支援機器と事業モデル—技術とニーズ、政策、社会をつなぐ— (後藤芳一: 日本福祉大学客員教授)  
アクティブシニアの ICT 活用とユニバーサルデザイン (関根千佳: 同志社大学客員教授・(株)ユーディット会長兼シニアフェロー)
- 10/27 第 4 回 高齢者の農作業のための軽労化支援スーツ (田中孝之: 北海道大学准教授)  
高齢者の支援技術における国内外の動向 (井上剛伸: 国立障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部長)
- 11/10 第 5 回 高齢者のための福祉・リハビリテーション工学 (田中敏明: 高齢社会総合研究機構特任教授・北海道科学大学教授)  
臨床現場におけるリハビリ工学の実際 (吉田直樹: リハビリテーション科学総合研究所主任研究員・関西リハビリテーション病院リハビリテーション・エンジニア)

- 11/17 第6回 認知症高齢者の情報支援（二瓶美里：新領域創成科学研究科講師）  
高齢社会のモビリティ構築に向けて（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/24 第7回 福祉機器実用化における課題 ～福祉ロボットなどの実例からわかること（手嶋教之：立命館大学教授）  
人型セラピーロボット最前線（西尾修一：国際電気通信基礎技術研究所石黒浩特別研究所主幹研究員）
- 12/01 第8回 高齢者の行動計測・見守りモニタリング（森武俊：医学系研究科特任教授）
- 12/08 第9回 医療・介護・健康分野で期待されるサービスロボティクス（浅間一：工学系研究科教授）

## 2. 演習

### フィールド演習

#### ■ フィールド演習 1（コミュニティ・アクション型）

##### グループ共同研究

2017年度は、以下の5グループが活動した。

##### 【共同研究 1/2】「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」グループ

##### 要介護高齢者の居住地選択要因——施設入居者を対象として——

近年、我が国では、要介護期にある高齢者やその家族の「本人・家族の選択と心構え」（厚生労働省；2013）をサポートする地域包括ケアシステムが推進されている。また、要介護期にある高齢者が居住地を選択する際のサポートでは、高齢者自身の心身の状態、家族関係、経済状況、居住環境、サポートやサービスの環境、地域住民との関係など、複合的な要因を理解する必要がある。しかし、要介護の高齢者や家族の当事者の視点による、要介護期の居住場所や介護サービス選択の要因は十分に明らかにされていない。

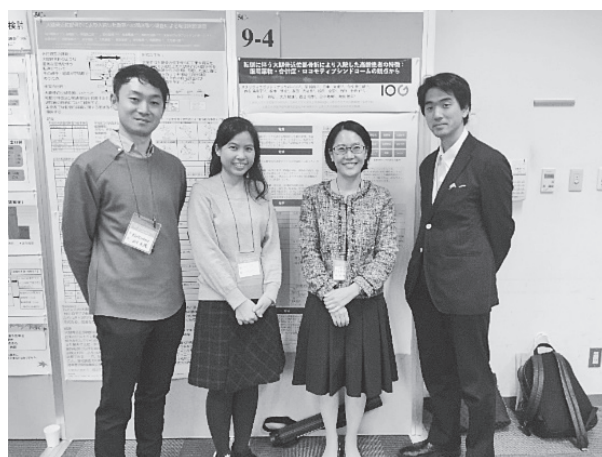
そこで、今年度は、高齢者・家族・支援者の3者の視点から、要介護期にある高齢者の居住地の選択に影響を与える複層的な要因を明らかにすることとした。また、Dahlgren & Whiteheadのモデル（1991）を参考に、①個人（本人の健康状態の変化、身体機能低下、行動障害、経済状態）、②本人が築いてきた個人的ネットワーク（家族・友人・ご近所づきあいなどの関係性）、③住居などの生活状況（改修の有無、滞在場所の変化）、④地域環境・サービス提供体制（各種サービスの種類やその組み合わせ、地域にある資源など組織化・システム化された要素）の4つの構成要素を探索する。そのため、1) 要介護者に介護サービスを提供している専門家（ケアマネジャーや訪問看護師など）、2) 自宅で生活する要介護者をサポートしている家族や支援者（インフォーマルなケア提供者を含む）、3) 施設で暮らしている要介護の高齢者・家族・ケアマネジャーに対して、要介護期において高齢者の居住地の選択に影響を与えた要因について、フォーカスグループインタビュー、あるいは個別にインタビューを実施した。その結果、要介護の高齢者が住み慣れた自宅から

施設に入居する経過において、①個人、②本人が築いてきた個人的ネットワーク、③住居などの生活状況から、居住地の選択に関わる主要な要因を抽出し、整理した。一方、④地域環境・サービス提供体制に関わる要因の検討は十分ではなかった。そのためには、直接、施設に入居している要介護の高齢者にアプローチするなどして、4つの構成要素を総合的に検討することも必要となってくるであろう。（特任助教・木全真理）

### 【共同研究3-1】「弱らない・弱っても暮らし続けられる住環境のデザイン」グループ

#### 転倒・骨折高齢者を対象とした調査

2017年度は転倒による骨折で東大病院整形外科に入院し手術を行った60歳以上の男女患者さんの中、調査の同意が得られた33名のうち、23名のベッドサイド調査を行った。骨折につながる転倒の特徴や身体的および環境的要因をインタビュー形式で調査した（教員による事前挨拶後、学生1~2人体制）。さらに、ベッドサイド調査を行った23名中18名から退院6か月前後の自宅訪問調査の同意が得られ、9月からは本格的に自宅訪問を行い、転倒場所の検証や自宅へ戻ってからの生活の変化や転倒の恐怖などを調査した（9月2例、11月3例、12月2例で合わせて7例〈8転倒例〉、教員、学生2~3人体制）。これらの研究結果をまとめて10月に盛岡で開催された日本転倒予防学会（口述発表：1件、ポスター発表：2件）、11月に東京で開催された国際シンポジウム APRU（ポスター発表：1件）の発表を行った。今後は退院後の自宅訪問調査を主に行いながら、新規紹介患者さんのベッドサイド調査と自宅訪問後1年目のフォローアップも進める方針である。（特任助教・孫輔卿）



日本転倒予防学会（岡山）で発表したメンバー

### 【共同研究3-2】「要介護になっても暮らし続けられるバリアフリー改修マニュアル作り」グループ

2017年度に新規に設けられた本グループは、4名の学生、3名の教員で活動を実施した。まず、高齢期の住まいの種類や既往研究を調べた。次に、身体機能が低下しても自宅に住み続けるための手段として、介護保険制度の住宅改修に着目し、制度およびその動向について調べた。そして、住宅改修の講習会の実施が、住宅改修の質の向上につながる、という仮説のもと、プレ調査として、東京都の62の自治体を対象に、アンケートを行った。その結果、講習会を実施しているのは9自治体で、そのうち8自治体は事務手続きに関する講習であることが明らかになった。住宅改修に関する講習を実施している1自治体では、リハビリ、ケアマネ、建築等の複数の視点から講義を実施しており、その自治体でアドバイザーとして活動している方へのインタビューを行い、多職種連携が重要である、という結論に至ったことから、リフォームヘルパー制度がある愛知県の自治体にその取り組みに関するインタビューを実施した。

2018年度は、フィールドで住宅改修の実態や自治体と連携し介護保険住宅改修の実態を把握し、バリアフリー改修マニュアルの枠組みを作っていく予定である。（特任助教・西野亜希子）



愛知県日進市役所インタビュー調査

#### 【共同研究 4/5/6】「高齢者の QOL 向上のためのコミュニティ活動のファシリテーション」グループ

2017年度はG4/5にG6（高齢者の食の研究グループ）が合流した。G4/5/6として、従来の千葉県柏市豊四季台地区における活動に加えて、神奈川県鎌倉市大平山丸山地区を新たなフィールドとして、共同研究活動を進めた。

1つ目のフィールドである千葉県柏市豊四季台地区では、住民主体のコミュニティ活動をテーマにして、住民運営の通いの場である「地域活動館（仮称）」の立ち上げに関わった。2018年2月の開館にあたり、まず、地域のグループ約30団体に、地域の課題や、活動のニーズに関する聞き取り調査を実施した。この意見をもとに、1週間、各団体が実際に活動するオープニングウィークを企画した。各団体が主催する企画に院生も参加し、シニア世代がどの活動に関心を持ち、お互いにどのような会話をしているのか、日常的にどのような場に出かけ付き合っているのかについて参与観察や聞き取り調査を行った。

調査を通じて、活動への参加者は、外出頻度やその興味・関心に応じて、幾つかの層に分けられるという仮説を立てるに至った。今後は、これらの各層に対しどのような働きかけが有効か、地域活動館の活動に参加することにより参加者のQOLがどの程度向上するのか、質的・量的な調査を実施していく予定である。また、住民主体の運営へと移行していくために、各団体による共同管理を行うためのマニュアルの整備や、恒常的な利用を促すためのサロン活動の担い手の発掘なども実施していく予定である。

2つ目のフィールドである、神奈川県鎌倉市大平山丸山地区では、地元の町内会と協力し、地区の将来計画の策定に携わった。事前に院生に対するファシリテーション研修を行った上で、2017年7月・11月と、2018年2月の3回にわたり、延べ100名以上の住民が参加するワークショップを開いた。



院生による利用団体に対する利用説明会

第1回のワークショップでは、地図を用いた居住環境点検を実施し、地域資源や地域課題を可視化しつつ、住民がお互いに話し合うきっかけを作った。第2回のワークショップでは、地区の強みや弱み、将来の可能

性を話し合う SWOT 分析を行った上で、地区と自らの将来ビジョンを共有した。第3回では、テーマごとに、実現可能なアクションプランについて話し合いを行った。

以上のワークショップは、移動や買い物に関する潜在的な地域課題や、まだ活用されていない地域資源に関する住民の気付きを促し、地域活動の担い手であるという当事者意識を高めていく効果があった。今後は、アクションプランの実現に向けた支援を行う一方で、他の地域でも同様の手法を用いて、介入方法の妥当性を検証していく予定である。

2018年度は、これら2地区での活動を継続し、超高齢社会に対応できる、住民主体のコミュニティづくりに関する共同研究を深めていく予定である。(特任助教・荻野亮吾)



大平山丸山町内会館にて、院生がファシリテーションを務める様子

#### **【共同研究7】「高齢者支援技術のデザイン指針や導入方策を導くためのニーズ・現状調査」グループ**

少子高齢化社会の進展に伴い、生産年齢人口の減少を補うべく、様々な ICT/IoT による自動化の必要性が増している。特に、高齢者の自立支援・介護支援は、各種システム化による需要が見込まれており、システムの研究開発・商業化展開が急激に進展している。

これまで、我々 GLAFS 共同研究グループ7では、まずは将来的な普及が見込まれるロボットに関して、外観の好ましさ・直観的な操作性などの重要性などを示した。また、高齢者やその支援者における困り事として、排泄や入浴の介助の他、夜間などの見守り支援などのセンシングに関するニーズを抽出してきた。しかし、これらのニーズにも関わらず、高齢者個人々人へのシステムは広まっているとは言い難い。これは、高齢者にとっての受容しやすさについての検討が不足しているためだと我々は考えた。そこで、本年度はセンシング技術が個人々人宅に受容されるための要件を探るべく、実際にセンシング技術が導入されていた介護施設での導入がどのように行われたのかを明らかにすることを目的とした。

本検討では先進的介護施設への見学・インタビュー調査を行った。まずは、居室見守りシステム・壁収納型リフトを導入した介護施設で調査を実施した。この結果、見守り結果から排泄 QOL や生活リズムの把握に繋がった他、想定しなかった入居者の身体機能の確認などが出来たとの事だった。従来、センサ導入効果はプライバシーと安全のトレードオフで語られていたが、むしろ潜在的な能力の確認などに繋がり、プライバシー侵害の原因となった直接接触の頻度が下がり、結果として入居者のプライベート時間が増加するという現象が確認できた。また、マット型センサを導入した施設においても同様の調査を行った。こちらでは、直接の見守りを減らすことが出来た一方で、入居者によっては訪問がなくなる事を寂しく思うケースがあった。

以上から、技術受容のためには利用者の属性の考慮、顕在的機能のみならず、潜在的機能の考慮、利用者とその周囲との関係性の考慮が必要であるとわかった。(特任助教・三浦貴大)



## 岩手県大槌町フィールド演習

学習のねらいは、多様な分野の学生がチームになって、地域に関与し、地域住民や地域団体等との交流を通じて、高齢化した地域社会の実態を把握し、フィールドにおける具体的な課題を特定し、解決策を地元へ提案、そして実証を行うことにある。

2017年度も岩手県上閉伊郡大槌町に整備した東京大学大ケ口多世代交流会館（コミュニティ・サポートセンター）で合宿し、次のような全3回の演習を行った。

第1回 7/22～23 コミュニティ居住環境点検を通したニーズ調査・現地踏査を行い、本年度取り組むべき問題設定を行う。

第2回 9/1～3 初回を踏まえた現状把握（分析）および目標設定を行う。

第3回 11/4～5 目標設定に対して、地域資源を活用した具体的な解決案を作成する。

### 〈参加人数〉

第1回演習：12名（GLAFS学生）、6名（GLAFS/IOGスタッフ他）

第2回演習：9名（GLAFS学生）、4名（GLAFS/IOGスタッフ他）

第3回演習：7名（GLAFS学生）、4名（GLAFS/IOGスタッフ他）

### 〈演習の様子〉（第1回）

7月22日	90分	被災地視察
	60分	ゲスト講師との意見交換
	120分	グループワーク
7月23日	120分	町内会長たちとの意見交換
	90分	グループワーク（課題整理）
	60分	成果発表会



語り部ガイドから震災時やその後の避難生活、復興に向けた動きなどのレクチャーを受けながら視察。



町内会の会長から地域コミュニティの現状や課題についてお話を伺う。



ショッピングセンターで高齢者から生活の現状についてヒアリングを行う。



2日間で得られた情報をもとに、地域コミュニティの現状と課題について整理し、今後の提案の方向性をグループごとに議論。

## 柏市豊四季台団地フィールド演習：一人暮らし高齢者対象「懇談と昼食会」

10月9日開催。柏市豊四季台団地で一人暮らしをする高齢者の交流促進と友人づくりの機会提供を目的としたこの会は、今年で8年目となった。GLAFSの学生及び教員、産学ネットワーク「ジェロントロジー」のメンバー等、総勢41名がスタッフとして運営をお手伝いした。

演習の目的は以下の通り。

- ・実際に高齢者と接し、高齢者との対話の中から暮らしの状況や課題・ニーズを把握する手法やコミュニケーション方法を学ぶこと。
- ・地域の住民や団体と連携してイベントを運営する手法を学ぶこと。
- ・各専門分野からのアプローチを互いに学び、対話を通じてこれからのコミュニティ・超高齢社会のあり方について検討すること。

本年度の参加者は約206人。GLAFS学生にとっては、高齢者の日常の生活状況を把握するための実践的演習の場となった。

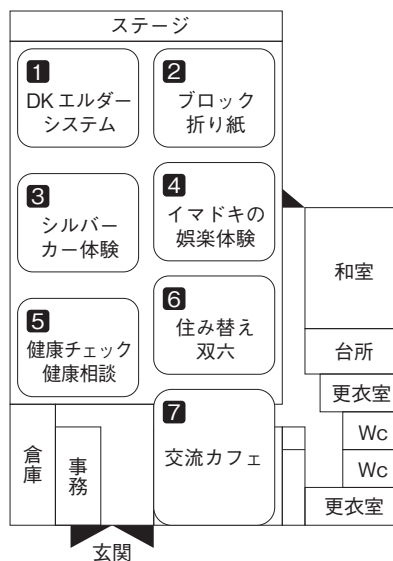
### 〈イベントスケジュール〉

11:00	開場
11:30—11:50	開会の辞 来賓挨拶
第1部	
11:50—12:20	<b>簡単な健康チェック</b>  <p>柏市在宅リハビリテーション連絡会のご協力により、参加者全員で指先を動かしたり、肩甲骨を回したりなどの体操をして、体をほぐした。インストラクターは、同会代表の西田恭子さん。</p>
12:20—12:50	昼食会
12:50—13:20	<b>歌と音楽による健康づくりプログラム</b>  <p>(株)第一興商の協力で、インストラクターの指導のもと、DK エルダーシステム（通信カラオケ機器「DAM」を活用した、介護予防・健康増進コンテンツ配信システム）を使って、音楽を聴きながら体操をした。</p>

13:30—15:00

**ブース企画**

豊四季台団地商店街で活動してきた「わいわいクラブ」のブロック折り紙紙体験ブース、同じく「介護者交流カフェくるる」による「交流カフェ」、第1部に続き(株)第一興商のDKエルダーシステムを使った「音楽健康教室体験」、柏市在宅リハビリテーション連絡会の「健康チェック・健康相談」のほか、GLAFSからは共同研究ごとに3ブースを企画。高齢者の日常生活の様子や、ニーズの把握に努めた。GLAFSで企画したブースとその目的は次のようなものであった。



**共同研究 G1/2 「住み替え双六」**


IOGが作成した「住み替え双六」を使いながら、現在の暮らしやすさや、今後の居住環境に求めるものを聞き取った。



**共同研究 G3/7 「シルバーカー体験」**

何台かのシルバーカーを持ち込み、使い心地の聞き取りを行った。



	<p><b>共同研究 G4/5/6 「イマドキの娯楽体験」</b></p> <p>最新のテーブルゲームを体験してもらい、シニアの方がどの部分に面白さを感じるかを調査した。</p> 
15 : 00	閉会

## ■ フィールド演習 2 (ケア・システム実習型)

実践的課題解決能力を養うために、医療や介護を必要とする高齢者の生活実態や、高齢者の生活を支える医療・介護・看護の実際を把握するため、生活支援や介護サービス施設の見学、訪問診療・訪問看護に同行する実習型のフィールド演習を行った。

実習前、他分野の学生とチームを作り、各自で参加目標を立案し、その目標をチームメンバー間で共有した。実習では、介護サービスを利用する高齢者に触れ、当事者の思いを捉えた。また、高齢者の地域生活を支える介護・訪問看護・訪問診療の機能を理解し、具体的な課題やその解決策を探索し、自らの専門分野で期待される役割を考えた。スケジュールは、下記のとおりであった（介護は全コース生参加。訪問診療と訪問看護は希望者のみ）。

### 〈実習先と日程〉

2017年11月～12月（全コース生参加）	
小規模多機能型居宅介護など	
9 : 00～12 : 00	事業所の概要の説明と介護サービス利用者の見学
12 : 00～13 : 00	昼食
13 : 00～15 : 00	利用者宅に訪問、利用者が生活する地域を散策
15 : 00～16 : 00	目標達成の振り返りと質疑応答
地域密着型介護老人福祉施設など	
10 : 00～11 : 00	法人や各種介護サービスの概要の説明
11 : 00～12 : 00	A 施設の見学
12 : 00～13 : 00	昼食
13 : 00～15 : 00	B・C 施設の見学
15 : 00～16 : 00	目標達成の振り返りと質疑応答
2018年1月（希望者のみ）	
訪問看護と看護小規模多機能型居宅介護	
9 : 00～10 : 30	訪問看護事業所の概要と訪問看護の利用者の説明
10 : 30～12 : 30	D 利用者宅に訪問看護に同行

12：30～13：30	昼休み
13：30～15：30	看護小規模多機能型居宅介護事業所の見学と利用者の見学
15：30～17：00	目標達成の振り返りと質疑応答
訪問診療	
13：00～15：00	患者宅に訪問に同行（数件）
15：00～16：00	目標達成の振り返りと質問応答

## 〈コース生の感想〉

### 吉崎れいな（工学系研究科機械工学専攻 修士2年）

介護施設では、高齢者の支援機器の活用について見学させていただきました。今回、特に印象深かったのは、施設の方のアシストスーツに対する感想でした。導入されたアシストスーツは呼気によって制御を行う仕組みでしたが、これを使う場面では対象への声かけが必要なので、使えないとのこと。こういった開発者側と介護側との齟齬は、開発者側が介護の現場に入り込めていないことが問題で、今後は相互に広く発信しあえる場が必要であると痛感しました。

訪問看護・看護小規模多機能居宅介護の実習には、在宅高齢者の生活に訪問看護がどういった役割を果たしているか、またその限界とは何かを調査する姿勢で臨みました。実際、高齢者宅にお邪魔して、訪問看護の様子を見学してみると、訪問看護、往診、訪問介護など、それぞれ得意分野と役割があることが大変よく理解できました。特に、訪問看護は医療の助けが必要な方に対して、その人らしい生活が送れるように様々な工夫がなされていることが分かりました。

### 小川景司（農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻 修士1年）

近年、障害者の就労支援として福祉と農業の連携が進んでいます。そこで、農作業をケアの一環と捉え、介護現場に農業を組み込む可能性についても検討してみたいと考えました。その可能性を探る端緒として、小規模多機能型居宅介護施設の経営実態の把握を目的として、実習に参加しました。

丸一日対応して頂いた施設の理事長からは、施設の設定経緯から、利用者・雇用者の人数、収益性まで具体的な数字を教えてくださいました。さらに、質の高いケアサービスの提供（経営目的）のために、インフォーマルなネットワークを積極的に活用（経営戦略）することで、より利便性の高い施設の移転先の確保、町内会からの協力などを得て、質の高いケアを実現するという、経営成果に結びつくまでの一連のマネジメントプロセスを把握することができました。地域との良好な関係づくりを通して、新たな経営資源を獲得し、経営成果へと繋げるプロセスは、優秀な農業経営において観察されるものであり、1つの経営として、非常に参考になるケースであると感じました。施設の立地場所の制約から、農業との連携についてはほとんど触れられなかったものの、制度に経営規模や事業内容の多くを規定される介護ケア施設においても、経営的な視点・工夫が重要であることがよくわかりました。

## ■ フィールド演習3（インターンシップ型）

2011年に設立された東京大学産学ネットワーク「ジェロントロジー」（自動車、電機、住宅、食品、生活用品関連等の企業が約50社参加）と連携。年3回の全体会（6/8、12/20、3/7）に学生も参加し、企業のスタッフとディスカッション、交流をした。

### 〈第1回全体会・講演内容〉

講演1「ヨーロッパに見るユニークな介護施設を語る」殿井悠子（ジャーナリスト・noi(株)代表）

講演2「米国の高齢者福祉とサービス～多様な生き方やニーズへ応えるには～」及川綾子（朝日新聞東京本社文化くらし報道部）

### 〈第2回全体会・講演内容〉

講演1「希望のごはん～『おいしい』が、ずっと続く未来へ」クリコ・保森千枝（料理研究家）

講演2「介護スナック竜宮城の活動について」佐々木貴也（株あたた代表取締役）

### 〈第3回全体会・講演内容〉

講演1『地域づくりは『地域経営』の視点から』寺谷篤志（地域経営実践士）

講演2『南三陸町 自然・人・羊と共に……』金藤克也（さとうみファーム代表）

## グローバル演習

### ■ グローバル演習1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

国際的なコミュニケーション能力と多文化・多分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組む「グローバル演習」を開講した。

開講時に英語運用能力測定試験を実施し、3段階の能力別クラス分けを行い、1クラス4～7名×4クラスの少人数クラスにて指導を行った。

プログラムの内容は、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、論理的会話力、ファシリテーションの能力を向上させる英語学習の研修プログラムと、語学を活用し、リーディングプログラムの趣旨に沿った高いコミュニケーションスキル、グローバルマインドを向上させる研修プログラムによって構成され、年間22回×3時間 合計66時間のコースで、英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション能力の育成を図った。また、終了時にも英語運用能力測定試験を実施し、学生へのフィードバックを行った。

### ■ グローバル演習2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

〈短期留学〉 渡航期間3ヶ月以内

留学先① National Institute of Health（アメリカ）

参加学生：後藤大地 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士3年

渡航目的：インターンシップ参加のため

実施期間：2017年3月3日～2017年5月26日

留学先② University of Copenhagen（デンマーク）

参加学生：Rogie Royce Carandang 医学系研究科国際保健専攻 博士2年

渡航目的：Interdisciplinary Aspects of Healthy Aging コース受講のため

実施期間：2017年6月30日～7月26日

留学先③ University Hospitals, Cleveland Medical Center (アメリカ)

参加学生：Ziaratnia, Sayyed Ali 工学系研究科先端学際工学専攻 博士3年

渡航目的：Epilepsy/EEG コース受講のため

実施期間：2017年7月7日～9月1日

留学先④ University of Michigan (アメリカ)

参加学生：麦山亮太 人文社会研究科社会文化研究専攻 博士2年

渡航目的：ICPSR 講義受講のため

実施期間：2017年7月23日～8月20日

〈長期留学〉 渡航期間3ヶ月以上

留学先① Johns Hopkins University (アメリカ)

参加学生：石井絢子 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士1年

渡航目的：看護学に関する講義を受講するため

実施期間：2017年8月26日～2018年1月19日

留学先② El Collegio de Mexico (メキシコ)

参加学生：増田耕平 工学系研究科都市工学専攻 修士1年

渡航目的：都市工学の講義の受講及び、調査のため

実施期間：2017年8月6日～2018年1月17日

留学先③ Carnegie Mellon University (アメリカ)

参加学生：小松廉 工学系研究科精密工学専攻 博士2年

渡航目的：Robotic Institute で共同研究を行うため

実施期間：2017年7月8日～2018年6月30日(予定)

〈留学報告〉

## 海外留学報告書

GLAFS 2期生

医学系研究科健康科学・看護学 博士1年

石井絢子

### 1. 留学準備

✓ 応募

今回留学する最大の目的は、米国における医療安全システムや看護管理/看護大学院教育の実情を理解し、看護管理分野の大学教員になるための必要な資質を学ぶことであった。当初は、自分の研究テーマの論文が

らペンシルバニア大学を希望したものの伝手がなく、直に教授に依頼メールを送り申請したが受け入れ困難であった。そのため、次にHPを利用し、自分の研究テーマの分野を保有しておりかつ米国の看護系大学院教育ランキングが高い大学に標準を絞り、指導教員に相談し Johns Hopkins University を選定した。東京大学大学院医学系研究科附属グローバルナースングリサーチセンター設立にあたり、指導教員らが Johns Hopkins University に訪問していたことがあり、依頼は指導教員から先方の学部長へ依頼する形をとった。その後、受け入れ可能との返事を受け留学必要書類の作成というプロセスをたどった。留学を希望してから要した期間は1年間であった。

#### ✓ 渡航前の準備（研究面）

今回の留学は半年という長期間の留学であったため、現地で論文投稿に向けた論文執筆活動や国際学会での発表を計画し、それに向けた分析や資料作成など準備を行った。また、指導教員と留学中に遠隔でどのようにやり取りするかを事前に打ち合わせし留学中の予定表を作成した。更に、今回の留学の身分が International Visiting Scholar というものであり、自分の研究発表の場があることが予測されたため、自分の研究について報告する資料を作成した。また、今後の研究生活に役立つように、PhD コースの授業の聴講を希望し準備を進めた。

#### ✓ 渡航前の準備（生活面）

先方より留学の許可を得てから、早速事務を担当する職員とメールでのやり取りを開始した。内容は主に留学中のステータス（International Visiting Scholar）や取得するビザ（交換留学生・研究者ビザである J1—Visa）などについて相談した。

#### ● International Visiting Scholar

大半の留学生が Johns Hopkins University へ所属する身分は、International Visiting Scholar であった。

#### ● Visa

J1—Visa は取得後2年間米国への長期滞在が出来ないルールが有名だが、今回は大学側の支援ということで2年ルールの対象外であった。留学時期が夏であり大使館の混雑が予測されたが、出国2カ月前の6月に予約し7月に面接をするスケジュールで問題なくビザを取得することが出来た。Johns Hopkins University とのやり取りが開始し、Visa 発行に至るまでの期間は4カ月であった。米国人は、休日を大切にするため先方のカレンダーを入手し効率的にやり取りすることを勧めたい。

J1—Visa の取得には英語能力証明書が必要であり、受け入れ先の Johns Hopkins University に TOEFL または IELTS スコアの提出が求められた。私は出国までの期間が短期であったため、先方に御願いをし Skype での面談をスコア提出の代替としてもらった。

#### ● 住居

今回の留学にあたり最も困難であったのが住居の確保であった。留学先があるメリーランド州ボルチモアは、米国国内でも非常に物価の高い地域であり、かつ治安がすごく悪い地域であるため居住できるエリアが限られ、安全なエリアは家賃が高いという状況であった。さらに、通常は年単位での契約が多く、私は半年という中途半端な期間であったため、通常の賃貸契約では違約金などが発生してしまう可能性が高かった。また、家具なども全て揃えることは困難であり、予算も限られていたため、光熱費・Wi-Fi・家具付きの物件を中心に探した。その折、Johns Hopkins University より学生 ID を取得後、大学が運営する Housing Office の Website からアクセスし物件を探した。一方で、大学側が運営しているにも関わらず、実際の契約には大学側は関与していないため、家主と直接のやり取りする形であったがなかなか返信が来ないこともあり、探し始めてから決定までには3カ月を要した。

実際住んでいた家は、3階建ての一軒家であり、3階部にオーナーさんが居住している物件であった。1・2階の3部屋を貸し出しており、キッチン・トイレ・バス・洗濯機等は共用部のものを使用する形であった。入居者は、Johns Hopkins University の留学生やボルチモア市内で働くインターン生などであった。家具などは全て揃っており、光熱費・Wi-Fi も備え付けられていたため、当初希望していた条件とほぼ一致したた



め決定した。

### ● 金銭面

自費では限界があり、GLAFSの支援をいただいた。現地では、Debit cardを使用した。東京三菱UFJのDebit cardはPaypalにも対応していることからとても使い勝手がよかった。

### ● 保険

Johns Hopkins Universityより必要な付帯条件が提示されていること、また所属する東大の医学系が推奨する保険が決まっていることから、入る保険はGLAFSを通じて容易に決定した。

### ● 語学

英語が元々苦手であり、留学が決まった半年前から英会話教室に通学した。実際行ってみると、日本で習う英語と若干違うことが明らかとなった。

## 2. 留学先の概要

Johns Hopkins HospitalとNursing training programは1889年より開設された。さらに、Johns Hopkins UniversityのSchool of Nursingは1983年に設立され、翌年より学生を受け入れ始めた。Johns Hopkins University School of Nursingは大学院教育を行っており、看護教育において米国のモデルとなっている。2017—2018年度米国大学院教育ランキングでは、修士課程教育では全米1位であり、大学院プログラム全体のランキングは2位と高い教育レベルを保持している。学生は約1200名（フルタイム500名、パートタイム700名）おり、フルタイムの教員は約80名である。そのうち、男性教員は5%以上おり、PhD保持者は34%である。看護教育だけでなく、研究にも特化しており、看護系大学の中で研究費獲得額は全米で最多であり各国と共同研究を行っている。特化した分野は、認知症・循環器看護ケア・精神看護・地域や国際保健・医療の質に関するマネジメントである。更に、Johns Hopkins Hospitalにおいては、ボルチモア市内に数多くの関連施設を有しており、ボルチモアの医療だけでなく雇用などの経済活動においても重要な機関となっている。



## 3. 留学期間中

### ✓ 大学生活

International Visiting Scholarは出入りがあるものの約10名がコンスタントにいる状況であった。最多は中国の8名であり、他はイラン人がいた。ほぼ連日のようにセミナーがあり、School of Nursing以外のセミナーへの参加も許可されていた。更には週1回International Visiting Scholar生で自主的にpresentationの時間を設け、自国の社会システムや看護教育、臨床現場の実際について紹介した。International Visiting Scholar生には部屋が用意されており、PC、印刷、ロッカーなど集中して勉学できるスペースが利用できる環境であった。また、それぞれにメンターがつき生活や研究についても手厚くフォローされていた。

私は上記のセミナー以外に、博士課程の授業を2教科履修したため、週2回授業があった。9月から12月までの1セメスターではあったが、最終試験の他月1回レポート提出があり、かつ宿題も多いため予習と復習に加えて課題をこなすため時間の経過はあっという間であった。初めはディスカッションにもついていけず落ち込むこともあったが、米国人の同級生が毎回ノートを見せてくれたため内容理解もできとても有意義な授業であった。

自分の研究については、メンターとの面談でアドバイスをもらうこともあり、更には関連するセミナーや学会へ参加することで知見を深めることができた。また自分の研究を、学内の教員・学生に presentation する時間をもらい発表し議論を深めた。また学内だけでなく、附属する病院への見学も許可され、自分の研究分野の実情を学ぶことが出来た。

#### ✓ 現地での生活

大学生生活中心の生活であった。現地では1人暮らしであり、自炊をして生活していた。ボルチモア市内は治安が悪く、外出は朝の7時半から19時までということを守って行動する必要があるため、自宅でも過ごす時間も長かったため、折角の留学という環境では不便な部分もあった。一方で利点もあり、日本で生活するよりも規則正しい生活を送っていたように感じる。更には、治安が悪いことで市内の交通網が発達しており、無料バスや大学のシャトルバスが定期的に走っていたことは大変助かった。そういった交通網を利用して、無料で外出や通学ができる状況であったことはとてもありがたかった。更に、アジア系のスーパーが郊外にあるため、日本の材料も手に入る事が多く食事には苦勞せず生活できた。



交友関係では、現地の日本人はとても少ないため、友人に紹介してもらう形が最も交友関係を広める効果的な手段であった。私は渡米前に、友人から現地に在住する日本人を数人紹介してもらっており、その日本人の方々から現地に在住している別の日本人を紹介してもらう形で交友関係を広めていた。日本人以外の交友関係では、大学の関係者や同級生を通して知り合いを増やしたため沢山のひと々に支えられ、楽しい留学生活となった。

米国は寄附やボランティア文化が定着しており、折角の機会なので社会貢献にも参加した。休日にボルチモア市内に植樹するボランティアや公園の清掃といったボランティアを行った。ボランティアの実施は、進学試験のアドバンテージになるとのことで学生の参加も多いのが印象的であり、働いた後の食事は格別であった。

#### ✓ 余暇の過ごし方

基本休日は、知り合った日本人や、大学の同期や友人と食事会をしたり、1人で観光をしたりして過ごした。今回の留学は夏から冬までの半年間であり、休日に数多くの文化に触れることができたことは、米国の実情を学ぶという点においても大いに勉強になったことである。休日に関して日本と米国の大きな違いは、日本にはコンスタントに祝日があることである。一方で米国は定期的な祝日は少ないものの、レイバデー・サンクスギビング・クリスマスといったホリデーシーズンは週単位の休暇になるのが特徴的である。米国のホリデーシーズンは、各々が家族と過ごすために帰省することが多く、企業や大学だけでなく、街中の

レストランやスーパーも閉店し米国全体が休暇となり交通・経済全てが止まってみえるのが印象的であった。そのため、大学周辺は閑散とし大学に入れにくいこともあるくらいであった。ホリデーシーズン前は買い出しをしておくことや、前もって必要な案件はある程度見通しをつけておく必要があった。留学の調整時、なかなか進展が見込めない期間があったことも今となっては理解でき、先方の文化に合わせて行動することが効率性を生むことを理解した。

米国のホームパーティーはポットラックと言われるシステムで開催されることが多い。ポットラックとは持ち寄りのシステムであり、各々が購入したものや料理したものを持ち寄ることが原則である。私は日本料理を持ち寄ることが主であり、ヘルシーで見た目がきれいな日本料理はどこでも喜ばれるものであった。生魚は好き嫌いが二分されるため、野菜やお肉を使用した料理が喜ばれることを理解した。

ボルチモア市内は観光する場所が限られており、かつ車の所有がない私にとって、最初の数カ月で主要な観光名所はめぐることが出来てしまった。しかし、ボルチモア市内からワシントン DC までは電車で片道1時間であり、料金も \$8 と安いので、ワシントン DC に観光に行くことが多かった。特にスミソニアン博物館は、その多くが無料で見学できる施設であり、かなり大きいため何度行っても見つくことが出来ないところであった。更に、ワシントン DC は米国の政治の中心であり、テレビでよく目にするホワイトハウスや国会議事堂、ワシントンモール等が近くで目にできたときは大変興奮したことを今でも忘れられない。ワシントン DC はボルチモアに比べ相当治安も良いため、ゆっくり安心して観光できる環境であったことがとてもよかった。

#### 4. 次年度参加する学生へのアドバイスなど

留学を検討できる環境にある人は、是非行くことを強く薦める。準備時は、不安も多く多大な時間や労力を要するため、行くことを躊躇するかもしれないが、日本では経験できないことを沢山経験出来ると思う。IT の進歩により現地に居なくてもある程度の情報が収集できる。しかし昔から言われる通り、「百聞は一見に如かず」であることを痛感した。IT で得ることの情報は一側面であり、実際行くことで多面的な情報を得ることが出来る。また、人がいることで沢山のディスカッションをすることが可能になり、1つの事象でも様々な価値観や意見を聞くことが出来るのは知見を深めることに大いに役立ったと感じた。また、実際米国から輸入されたシステムとして日本で紹介されていても、実情が若干違うと気づくこともあった。留学は有意義な時間であり、少しでも検討している人は行った方がいいと考える。

準備については、思い立ったが吉日、早急に行動を起こすことである。上記で述べた通り、準備に多大な時間と労力を要する。また、準備の良し悪しが留学の充実に影響すると思った。時間をかけて入念に準備を行うためにも、早急にとりかかった方がいいと感じた。また、幸いに GLAFS には短期・長期で留学を経験した学生が数多くいるのは強みであると考えている。私も準備にあたり経験した学生に準備の手順など聞いて実施した。VISA に関しては申し送り書的なものも存在しており、とても重宝した。私も経験をもとにリバイスして後輩に残したいと考えており、留学に興味のある人には気軽に声を掛けて欲しいと思っている。

### ■ グローバル演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

2017 年度の実績は以下のとおりである。

#### 5/19 国際交流特別セミナー「韓国のベビーブーマー世代」

韓国ソウル国立大学のハン・ギョンへ教授によるセミナー、“Korean Baby Boomers, will they become Senior Bomb?” を開催した。日本をしのぐスピードで人口の高齢化が進む韓国社会において、注目されているのが第一次ベビーブーマー世代と呼ばれる 1955 年から 63 年に生まれた

人々で、この世代、およびその前の世代を対象とした大規模な調査データをもとに、これらの世代が直面している課題や、今後直面するであろう課題についての分析が紹介された。

講義の後にはハン教授と参加者との活発なディスカッションが交わされ、韓国社会が直面する課題と可能性、日本をはじめとする他国との比較などが話題となった。（特任講師 菅原育子）

#### 〈参加したコース生の感想〉

金兌恩（人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士1年）

韓国社会は日本に相次ぐ早いスピードで高齢化が進行しています。今回のハン・ギョンへ先生の講義を通じて、韓国の高齢社会におけるある意味での主役になるベビーブーマーの特徴について学ぶ有意義な時間になりました。特に「サンドイッチ世代」と呼ばれる特徴を持っていることが印象深く、また、韓国のベビーブーマーの退職・経済・健康などの面において現在までの高齢者と異なる点についてわかるようになりました。これまで漠然と日本の団塊世代とも似ていると思いましたが、今回の講義でより詳しく韓国の高齢社会について理解することになりました。

#### 11/9~11 APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists

APRU Population Ageing（環太平洋大学協会・高齢社会部門）が定期的で開催している若手研究者向けのワークショップを東京大学本郷キャンパスで開催した。日本を含む9か国から正式な参加者21名および、APRU参加大学である慶應義塾大学の大学院生5名、GLAFSの大学院生39名が講演やポスターセッション等に参加。

ワークショップ1日目は午前には講演会が行われ、初めにWHO神戸センター、テクニカルオフィサーのローゼンバーク恵美氏による、「Measuring and Evaluating Age-Friendly Cities and Communities」と題した講義で、WHOが考案したAge-friendly（高齢者に優しい）コミュニティの評価方法と街づくりの実践について具体的な事例が紹介された。アジア・エイジング・ビジネスセンター理事長の小川全夫氏は「Recommendation of Action Research for Promoting Age-Friendly Communities」と題した講義で、アクションリサーチの実際の取り組み例を紹介。昼食時は、立食形式で昼食をとりながらワークショップ参加者によるポスター発表が行われ、多岐にわたる分野の研究について意見交換がなされた。

午後は小川全夫氏が紹介した手法の一つである「おたがいさまワークショップ」を参加者が体験した。ワークショップでは「おたがいさまワークショップ」を様々なコミュニティで実際に導入してきたNPO法人ドネルモの山内泰氏が司会し、九州経済産業局の南慎太郎氏、原口尚子氏、アジア・エイジング・ビジネスセンターの佐々木喜美代氏、湯浅玲子氏が各グループを回り、ディスカッションを行った。様々な立場の当事者（ステークホルダー）が共通のコミュニティについて語り合うことの意義を体験し、自分の所属するコミュニティや社会への適用可能性について考えるきっかけとなった。

夜にはウェルカムディナーを開催し、自分の研究分野や出身国について自由に語り合う場とした。



ポスターセッション



ワークショップ

2日目の午前は、9年前に東京大学で開催されたIOG主催のAPRUワークショップに参加し、その後インドネシアの高齢社会研究の第一人者となったTri Budi Rahardjo教授によるインドネシアの老年学を俯瞰した講義と、シンガポール（Ad Maulod氏）、タイ（Thanakamon Leesri氏）、日本（GLAFSコース生・駒沢行賓氏）の参加者から自身の研究について口頭発表があり、アジアにおける老年学研究の共通点や違いについて議論した。

その後、グループに分かれて今後アジアで研究されるべき老年学のテーマについて、午後には主要な4つのテーマ、①高齢者の金融リテラシー、②高齢者に優しい文化、③認知症に優しいコミュニティ、④高齢者の社会参加についてディスカッションし、おおよそ1年から2年間で発表を行うことを目標とした研究計画が練られた。



Tri Budi 先生講演



グループディスカッション

最終日には、2日目に議論された研究計画をグループごとに発表。どのグループも3~4か国の参加者を含み、国際的な研究の枠組みが考案された。



グループ発表

各グループの研究タイトルは下記のとおり。

- ①高齢者のエンパワメントとしての金融リテラシー 健康管理や晩年の人生の選択肢を広げる5つの都市の比較研究
- ②介護従事者に「高齢者に優しい」文化を広める比較文化的アプローチ
- ③アジア各国における認知症に優しいコミュニティの比較文化研究
- ④社会参加と幸福—日常生活に不自由のある高齢者の文化比較

午後は3種類のサイトビジットツアーを用意し、希望者が参加した。ツアーは①利用者の独立した生活を支援する小規模多機能施設等の見学、②高齢者の多い地区である谷根千・巣鴨エリアの街並みや日常生活を解説するツアー、③国立障害者リハビリテーションセンターにて生活支援技術、福祉機器の開発研究を学ぶツアー、の3つのコースで、それぞれの分野を研究する高齢社会総合研究機構の教職員および学生がガイドした。



暮らしの保健室



根津神社



国立障害者リハビリセンター

### 〈参加したコース生の感想〉

#### 駒沢行賓 工学系研究科都市工学専攻 博士1年

多様なステークホルダーを巻き込み、‘Science for society’の言葉の下で課題解決に臨む姿勢は、勿論できることは限られますが、一学生として学ぶところが多かったと解しています。また、WSや発表を通じ、各国、社会経済的状況が異なる中、アジア諸国からの参加者が、お互いの活動や知見を共有していく過程に、やや大げさですが、欧州でも米州でもない、アジアとしてのモデルを創り上げていける可能性を感じました。個人的には、同じ問題意識を持つ方とお話しができたほか、自分に足りないこと、頑張っって追いつかなければならないところが見え、これを‘収穫’としたいと考えます。いずれにしても、貴重な経験をいただき、ありがとうございました。

#### スタッヴォラヴット・アンヤポーン 医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻 MD2年

11月11日、環太平洋大学協会（Association of Pacific Rim Universities、略称APRU）の研究者が新宿区の暮らしの保健室、坂町ミモザの家とマギーズ東京の見学にいらっしゃいました。暮らしの保健室で秋山正子先生がそのプロジェクトのきっかけとシステム等について説明した後、スタッフから坂町ミモザの家を案内していただきました。暮らしの保健室は予約なしに医療や介護、健康などの相談が無料でできます。坂町ミモザの家は小規模多機能型居宅介護として高齢者が地域の中で暮らし続けることを支えます。また、がんのサポートセンターのマギーズ東京を視察しました。がんになった人とその家族が、気軽に訪れて、安心して相談したり、自分の力をとりもどせるサポートがあるセンターです。最後に、スタッフやAPRUの研究者と共に、熱心な意見交換を行いました。その三つの施設は今の社会に必要な力だと感じました。

#### 横内陳正 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士2年

最終日は、プログラムを終えた程良い解放感の下で、また、天気にも恵まれて、和気あいあいとした散策となりました。本郷キャンパスを出発し、根津、千駄木、谷中にかけて、公的施設、神社、商店街などを巡りながら、学生スタッフや教職員がそれぞれの知識を出し合っって、参加学生に解説をしながら歩きました。学生スタッフ同士も、お互いの知識から新しいことを学び、また、参加者からの問いかけを通して、普段とは異なる視点で、地域のことや、地域の高齢者の方の生活を振り返る良いきっかけにもなりました。

## 吉崎れいな 工学系研究科機械工学専攻 修士1年

国立障害者リハビリテーションセンター（以下、国リハ）へ見学に伺いました。国リハの大きな役割である、JIS規格に則った試験評価のための機器や、体温調整機能の搭載を試みる車椅子など試作品を見せていただきました。また、認知症のある人の福祉機器展示館では、認知症の方向けのコミュニケーションロボットや回想による想起を促すツール、薬の飲み忘れを防ぐ機器、認知を助けるトイレなど、生活の場における様々な支援機器を見学、体験しました。見学者の方々は、コミュニケーションロボットの倫理的問題や、日本の介護など諸制度をはじめ、積極的な質問と活発な議論がなされました。

## コアセミナー

コアセミナーとして、次のような学際的な研究指導の体制を確保した。

CS1：修論・博論の研究に関し、他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を確保し、専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：医療・看護・介護や、まちづくり、新たな高齢者ビジネスなどの様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話をうかがい、ディスカッションするケーススタディ

月	日	CS1	CS2	
			内容	講師
4月	15日	グループ共同研究発表会1 研究進捗状況発表会1		
	22日	研究進捗状況発表会2	<b>セミナー1 「2050年を構想する」</b> (第1回グループワーク技法セミナー；個人の限られた手持ちの情報を関連づけて物事の筋を推定する：フェルミ推定) 人口推計・人口移動の基礎的データ等を示し、地方消滅、CCRC構想などの問題点なども示した上で、学生には、グループ別に、ありうる将来の可能性(シナリオ)を描いてもらい、ディスカッションする。	大方潤一郎(工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長)
5月	27日	研究進捗状況発表会3		
6月	3日	グループ共同研究発表会2		
	10日		<b>セミナー2 「Age Friendly City (AFC)」</b> WHOが求めるAFC評価はどのように評価されるのか、理想とするAFCと高齢社会における地方自治体の政策とを如何につないでいくべきかについて考える。	齊藤恵美子(秋田市役所福祉保健部長寿福祉課エイジフレンドリーシティ推進担当課長) 東福光晴(富山市環境部環境政策課課長代理) ローゼンバーグ恵美(WHO健康開発総合研究センター〔WHO神戸センター〕テクニカル・オフィサー)
	17日		<b>セミナー3 「農ある暮らしのはじめかた」</b> 農作業・ガーデニングに関してシニアのニーズはどこにあるのか、また長続きするには、どのような支援が必要となるかを学ぶ。	佐藤啓二(一般財団法人都市農地活用支援センター常務理事・統括研究員) 堀隆雄(おくたま海沢ふれあい農園代表)

6月	24日		<b>セミナー4 「シニアの能力を生かした就労」</b> リタイア後も何かしら仕事を続けたいと考えるシニアは多い。虚弱化しても、自分の役割が果たせるようにするには、どのような社会的支援が必要となるであろうか。	宇佐川邦子（リクルートジョブズジョブズリサーチセンター センター長） 緒形憲（株高齢社代表取締役社長） 戸枝陽基（社会福祉法人むそう代表）
7月	1日		<b>セミナー5 「住民主体のコミュニティケア活動」</b> 住民主体のコミュニティケア活動は、担い手の高齢化などを受けて、機能不全に陥る寸前である。この課題を乗り越えるために、住民主体のコミュニティケア活動の取り組み事例について学ぶ。	鈴木恵子（すずの会） 柴崎光夫（鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会）
	8日		<b>セミナー6 「シニアのニーズをビジネスにつなげるⅠ」</b> 高齢者の困りごと、悩み事はどのようにビジネスにつなげていけばよいのか、そのノウハウについて、実践者からお話を伺い、アプローチ方法を考える。	中村善貞（富士フィルム（株）R&D 統括本部 先端コア技術研究所 兼経営企画本部イノベーション戦略企画部イノベーションアーキテクト）
			<b>セミナー7 「超高齢社会と地方自治体Ⅰ」</b> 高齢化・人口減少が先行する地方の「まちづくり・むらおこし」（暮らしやすい地域社会の物的・社会的な生活環境を共創する活動）をどう進めるべきかを考える。	山下祐介（首都大学東京都市教養学部人文社会系准教授）
	15日		<b>セミナー8 「シニアのニーズをビジネスにつなげるⅡ」</b> 高齢者の困りごと、悩み事はどのようにビジネスにつなげていけばよいのか、そのノウハウについて、実践者からお話を伺い、アプローチ方法を考える。	瓜坂和昭（大和ハウス工業（株）ヒューマン・ケア事業推進部ネクストライフ事業推進室長）
			<b>セミナー9 「第2回グループワーク技法セミナー：小集団の知識を集約し構造化する：KJ法型WS」</b>	杉崎和久（法政大学大学院教授）
29日	グループ共同研究活動			
8月	1~2日	グループ共同研究発表会3 研究進捗状況発表会4	<b>セミナー10 「第3回グループワーク技法セミナー：大集団の知識を集約し構造化する：ワールドカフェ」</b>	後藤純（高齢社会総合研究機構特任講師）
10月	7日		<b>セミナー11 「シニアの閉じこもり予防1（メディア系）」</b> 高齢者の閉じこもりは、QOLの低下や要介護に陥りやすい。そこで、閉じこもり予防のために、高齢期の関心事や継続的・主体的に関わることができる活動を理解する。	戸塚圭介（株第一興商執行役員・エルダー事業開発部部長）
	14日	グループ共同研究活動		
	21日	グループ共同研究発表会4		
	28日		<b>セミナー12 「住まいとリハビリ」</b> 病院でのパワーリハの時代は終わり、自宅や近所での生活機能リハ、社会参加リハへと時代が変わっている。そこで、住まいとリハビリ、それに対応したバリアフリーの実践について学ぶ。	井上文（NPO法人サース代表理事） 小林由実（UR都市機構東日本賃貸住宅本部東京北エリア経営部ストック技術課長） 渡辺良明（もも太郎有代表取締役）



11月	18日	研究進捗状況発表会 5		
	25日		<b>セミナー 13 「シニアをアシストする移動機器」</b> Ageing in Place に資する地域住環境のあり方を考えるとき、歩行者環境が貧しい。そこで、移動環境が歩行器や電動車椅子対応になっているか、今後どういう移動機器が必要とされていくのかを考える。	河野誠 (㈱長谷工エアネシス ICT 活用推進 PJ 室技術主幹) 山下典之 (ヤマハ発動機㈱技術本部) 佐治友基 (SB ドライブ㈱代表取締役社長兼 CEO)
12月	2日		<b>セミナー 14 「高齢者の最期の時を支える 1」</b> 最期に向けた自分の意思を明示しておくことの重要性は指摘されている。自分の意思が明示できなくなった場合や死後どのようなトラブルが起きるか、そのためにどのようなことを事前に取り組んでおけばよいかについて考える。	佐藤健雄 (秋田市エイジフレンドリーパートナー企業ゆりはか) 尾崎力弥 (弁護士法人岡山パブリック法律事務所副所長・社会福祉士) 矢野洋 (㈱アクティブ・RE 代表)
	9日		<b>セミナー 15 「高齢者の食行動」</b> 家族形態や家族機能の変化から、高齢者の孤食が増加している。幸せを感じる食行動とは何か、どのように最期まで食を楽しむ生活を送ることができるのかを考える。	品田知美 (早稲田大学文学学術院非常勤講師) 山脇直人 (ハウス食品グループ本社㈱新規事業開発部)
	16日	グループ共同研究発表会 5		
1月	20日		<b>セミナー 16 「シニアの閉じこもり予防 2 (体操系)」</b> 高齢者の閉じこもりは、QOL の低下や要介護に陥りやすい。そこで、閉じこもり予防のために、高齢期の関心事や継続的・主体的に関わることができる活動を理解する。	坂詰真二 (スポーツ&サイエンス) 高橋競 (東京大学高齢社会総合研究機構特任研究員)
	27日		<b>セミナー 17 「高齢者の最期の時を支える 2」</b> 最期に向けた自分の意思を明示しておくことの重要性は指摘されている。自分の意思が明示できなくなった場合や死後どのようなトラブルが起きるか、そのためにどのようなことを事前に取り組んでおけばよいかについて考える。	小佐波幹雄 (社会福祉法人品川区社会福祉協議会品川成年後見センター後見第一係係長) 平松太郎 (NPO 法人ライフサポート東京理事長)
2月	10日	研究進捗状況発表会 6		

### 3. 合宿

8月1日～2日、夏期合宿をKKR熱海で開催した。今回の合宿の特別テーマは、「2030年 超高齢社会における持続可能な開発をバックキャスティングで考える——SDGs×超高齢社会＝革新的な取り組み・政策・技術を提案する——」。この共通テーマについて、2日間にわたって全員参加型のワールドカフェや、ワークショップ等を行った。

ゲストにお招きしたのは、日本 NPO センター SDGs 事業プロデューサーの新田英理子先生で、日本の超高齢社会において SDGs の観点から取り組むべき課題やビジョンは何か、国際的な視点、また国内で何を進めればよいか等をお話しいただいた。この後に行われたワールドカフェでは、新田先生の投げかけを受け、“SDGs のフレームをもとに取り組むべき課題”、“自らが貢献できること”等を各自発表。その上で「理想とする持続可能な開発を実現する企画検討」を行うグループワークの時間も設けた。グループワーク終了後に発表された各班のアイデアは、同日夜に開かれたナイトセッションの際に投票があり、得票上位の班の代表者 4 名が翌日のパネルディスカッションの壇上に上がった。

参加者は、コース生 56 名、教員・スタッフ 34 名の計 90 名。大所帯となったが、従来通り個別研究指導や共同研究発表も行われ、たいへん充実した合宿となった。特別テーマの「ねらい」と「到達目標」は次の通り。

### 〈ねらい〉

- 国際的な SDGs を題材にして、超高齢社会における持続可能な開発のあり方について考える。
  - ⇒ 超高齢社会に SDGs の考え方を統合することで、わが国の持続可能性に影響を与える課題（健康長寿、経済成長、ジェンダー、社会参加等）を解決しつつ、その過程で重要な革新的取組みを生み出し（例：AI・アシスティブテクノロジーによるケアの近代化、高齢者の閉じこもり予防等）、これを世界的な（特に途上国の）不平等の解決へと結びつける。
- 学生同士、またプログラム教員と共通のテーマについて話し合うことによって、他分野のアプローチを学ぶ。
- 集団的政策形成技法を学ぶ。
  - ⇒ 意見交換・ブレストを目的としたワールドカフェ（検討系—発散型）、及び具体的方策を検討する KJ 法型ワークショップ（議論系—収束型）をもとに、GLAFS として SDGs にどのように取り組むか、パネルディスカッション（決定系）を通して検討する。
  - ⇒ ワールドカフェや、KJ 法、バックキャスト法など小グループの発想を全体で共有し、新たな知識を創造する手法を学ぶ。

### 〈到達目標〉

GLAFS として目指す持続可能な超高齢社会のビジョン、長期的に取り組むべきこと、短期的に取り組むべきことについて検討する。

### 〈合宿スケジュール〉

1 日目	
12:30	集合
12:30—12:40	開会の辞 全体スケジュール説明
12:40—13:20	ゲスト講話「SDGs から持続可能な超高齢社会のあり方について考える」 新田英理子（日本 NPO センター）

13 : 20—14 : 15	<p><b>超高齢社会領域における SDGs について考えるワールドカフェ</b></p>  <p>4人1グループで、メンバーを入れ替え、計3ラウンド「超高齢社会の持続可能性」をテーマにアイデア出しを行った。</p>
14 : 25—14 : 30	休憩
14 : 30—14 : 45	<b>持続可能な開発のビジョンと取り組むべき課題・活用すべき資源を決める</b>
14 : 45—15 : 25	<p><b>理想とする持続可能な開発を実現する企画検討</b></p>  <p>グループワークでは、持続可能な開発のためのビジョンや、取り組むべき課題について、意見を集約し、班ごとに企画検討を行った。その後、各班のアイデアを発表した。</p>
15 : 25—15 : 50	<b>全体共有・講師のコメント</b>
15 : 50—16 : 00	休憩
16 : 00—17 : 10	<p><b>共同研究発表 G7 G3</b></p>  <p>G3 発表の様子。多くの先生方から貴重なご意見・アドバイスをいただいた。</p>
17 : 10—17 : 25	休憩
17 : 25—18 : 45	<p><b>研究進捗状況報告会 その1</b> 5部屋に分かれて行われた研究進捗状況報告会では、内外のプログラム担当の先生方から丁寧なご指導をいただいた。</p>
18 : 45—19 : 00	休憩

19:00—20:30	夕食
20:30—22:00	<b>ナイトセッション</b>  壁に貼り出されているのは、グループワークでまとめた企画内容。この会場で投票が行われた。
<b>2日目</b>	
7:15—9:00	朝食
9:00—10:00	<b>パネルディスカッション「GLAFSとして取り組むSDGs×超高齢社会」</b>  前日の投票で高得点を得た4班の代表者と先生方によるシンポジウム。テーマは「GLAFSとして取り組むSDGs×超高齢社会」。前日のグループワークの成果を下敷きに、院生から、「趣味を生涯続けられる社会の実現」、「若者が夢を追うことができる社会へ」、「義務教育の低年齢化」等、各グループのアイデアが発表された。これを受けて、先生方も交えたクロストークが行われ、GLAFSとして今後取り組むべきことが話し合われた。GLAFSの持つ総合性を活かし、子どもや障がい者、貧困の問題にも視野を広げていくこと、各地域単位でのSDGsの実現に向けて多世代のコミュニケーションを図ること、ジェロントロジーの考え方をさらに社会に広めていくこと等が提起された。学生からは、SDGsという共通目標を通して、他の分野とつながり、自分の研究の立ち位置が見えてきた、という感想があった。
10:00—10:20	休憩
10:20—12:00	<b>研究進捗状況報告会 その2</b>   4部屋に分かれ、35名のコース生が発表をした。
12:00—13:00	昼食
13:00—14:20	<b>研究進捗状況報告会 その3</b>
14:20—14:30	休憩

14 : 30—15 : 40	共同研究発表 G4/5/6 G1/2 
15 : 40—16 : 00	共同研究全体に関するディスカッション 総括
16 : 00	解散

## 4. 国際・産学活動

### 国際セミナー・学会等参加状況

#### 7/23～27 The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (第21回国際老年学会議)

サンフランシスコで開催された第21回国際老年学会議に、IOG/GLAFSからは秋山弘子特任教授、飯島勝矢教授、菅原育子特任講師、村山洋史特任講師、木全真理特任助教、孫輔卿特任助教の6名と学生3名が参加した。なお、26日にはミシガン大学名誉教授でプログラム担当教員のJohn Campbell先生の提案で、CCRCの見学ツアーがあり、GLAFS生も参加した。

#### 〈コース生の感想〉

福井千絵 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士課程2年

2017年7月23日～27日にアメリカ・サンフランシスコで開催された第21回国際老年学会（IAGG）に参加し、個人研究のポスター演題を発表してきました。今年は、“Global Aging and Health: Bridging Science, Policy, and Practice”をテーマに掲げ、全世界の高齢者のQuality of lifeを改善するために、医学、看護、社会科学、心理学、経済、政策、学際的なものを含めた様々な領域から最新のアプローチを共有することを目的として開催されました。

IAGGには、世界81か国から8,000編以上のアブストラクトが寄せられ、ピアレビュープロセスを経て、650以上ものセッションが5日間・朝8時～夜20時に亘り、提供されました。受諾されたアブストラクトのトピックTOP3は、Dementia/Alzheimer’s、Long-Term Care、Cognitionでしたが、他にもFamily

Caregiving や Social Network など興味深く幅広いトピックが取り上げられており、どれも高齢者を取り巻く重要な課題を取り扱うものばかりでした。ポスターセッションは、毎回 500 本ものポスター演題がホールに一斉に並び、各所で活発な意見交換がなされていました（全 5 セッション）。また、オーラルセッションやシンポジウムでも、多くの会場で立ち見が出るような状況で大きな賑わいを見せていました。

私にとっては、初めての海外学会発表で自身の演題に興味を持ってもらえるかを不安に思っていたのですが、実際は制限時間があっという間に終了してしまうほど、多くの方と研究に関して対話することができました。自身の研究を各国の人々に知ってもらうことができたことは大変喜ばしく、直接意見を交わせることは大変励みになる経験でした。今回の学会参加を通して、「日本は制度が似ているところがあるから参考にしたい」「自国にとっても日本の知見は大変貴重」などいろいろな国の方が話しかけてくださいました。今後も、日本における研究が、各国における老年期に関する課題を解決するために共有されることを強く望みます。

#### スタッフヴォラヴット・アンヤポーン 医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻 MD2 年

7 月 26 日、カルフォルニア州にある高齢者向け継続介護コミュニティ（CCRC）を視察しました。この施設には、プログラム担当の John Campbell 先生が入居していらっしゃいます。スタッフから施設について説明を受けた後、フィットネスセンター、リハビリスペース、図書館、ナーシングセンター、住居スペースを案内いただきました。居住者は、これらの施設を利用し、社会的、教育的、精神的、及び文化的な活動を行っていました。最後に、スタッフや居住者と共に、高齢者の生活とニーズに関して意見交換を行いました。

### 9/26~28 Emerging Researchers Conference “Demography, Ageing and Health” (IARU 主催)

IARU（International Alliance of Research Universities）主催の国際会議は今年度はオックスフォード大学 Institute of Population Aging の設立 20 周年記念行事を兼ねてオックスフォード大学で開催された。IOG/GLAFS からは秋山弘子特任教授、似内遼一学術支援専門職員と学生 2 名が参加した。

#### 〈コース生の感想〉

#### 宮部峻 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程 2 年

2017 年 9 月 26 日から 28 日にかけて International Alliance of Research Universities 主催の Emerging Researchers Conference “Demography, Ageing and Health” に参加した。口頭発表・ポスター発表・講演・グループ・ディスカッションが行われた。イギリス開催ということもあり、英国内の学生が中心であったが、その他、アフリカ・東南アジア・南アジア地域からの学生の参加も少なくなかった。研究の方向性としては、日本と同じく、人口問題、年金問題、テクノロジーと高齢者、公衆衛生の発表も行われたものの、死生学や中国の都市農村格差問題の発表など、日本ではなじみのないトピックも扱われていた。印象に残った発表は、「都市構造と高齢者」に着目した研究である。高齢期における社会関係というマイクロな視点と超高齢社会に伴う都市構造の変容というマクロな視点がうまく組み合わせられている発表であった。自身は団地の自治会と宗教の関係について発表したが、質問は、信仰と実践をどのように捉えるのか、コミュニティとの関係についてが多かった。海外での発表の機会を得ることで、自身の研究をグローバルな文脈で位置付けることができたと感じる。これからも積極的に海外での発表を積み重ねていきたい。

【国際学会参加コース生】

氏名	学会名	期間	
吉田真悟 (農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻 博士2年)	Rural Entrepreneurship conference (ニューキャッスル/イギリス)	6/14~6/1	口頭発表
石井絢子 (医学系研究科 健康科学・看護学専攻 博士1年)	The 21th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) (ソウル/韓国)	1/9~1/13	ポスター
王天天 (総合文化研究科 広域科学専攻 博士3年)	2017 AAG (American Association of Ge- ographers) (ボストン/アメリカ)	4/5~4/9	ポスター
松田弥花 (教育学研究科 総合教育科学専攻 博士3年)	Research meeting of Stockholm-Tokyo University Partnership (ストックホルム/スウェーデン)	2/1~2/2	会議出席
田中友規 (医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻 MD3年)	IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (サンフランシスコ/アメリカ)	7/22~7/28	ポスター
	Association of Pacific Rim Universities Steering Group, Population Ageing Re- search Hub: Frailty Research Group Meeting (サンフランシスコ/アメリカ)	7/24	口頭発表
	3rd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia (ソウル/韓国)	10/27~10/28	ポスター
	Research meeting of Stockholm-Tokyo University Partnership (ストックホルム/スウェーデン)	2/1~2/2	口頭発表
宮部峻 (人文社会系研究科 社会文化研究専攻 修士2年)	International Alliance of Research Uni- versities Emerging Researchers Confer- ence "Demography, Ageing and Health" (オックスフォード/イギリス)	9/25~9/30	口頭発表
福井千絵 (医学系研究科 健康科学・看護学専攻 博士2年)	IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (サンフランシスコ/アメリカ)	7/22~7/28	ポスター
藤原綾 (医学系研究科 健康科学・看護学専攻 博士2年)	Summer Conference 2017: Improving Nu- trition in Metropolitan Areas (ロンドン/イギリス)	7/9~7/17	ポスター
森泉寿士 (新領域創成科学研究科 メディカル情報生命専攻 博士2年)	American Association for Cancer Re- search 2017 (ワシントンDC/アメリカ)	4/1~4/5	ポスター
安原敦洋 (新領域創成科学研究科 メディカル情報生命専攻 博士2年)	Antibodies as Drugs: Translating Mole- cules into Treatments (C1) (ウィスラー/カナダ)	2/25~3/1	ポスター
スタッヴォラヴット・アンヤポーン (医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻 MD2年)	IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (サンフランシスコ/アメリカ)	7/22~7/28	ポスター
	International Alliance of Research Uni- versities Emerging Researchers Confer- ence "Demography, Ageing and Health" (オックスフォード/イギリス)	9/24~9/30	口頭発表
	3rd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia (ソウル/韓国)	10/27~10/28	ポスター

## 産業界との共同研究

### 日産自動車株式会社との共同研究

車載インタフェース操作による認知負荷を、簡易的に計測するための手法を開発し評価を行った。前年度まではワーキングメモリテストと評価対象のインタフェース操作の二重課題を基に、それらインタフェース操作に伴って、ディストラクションに繋がる Mind-wandering がどの程度発生するかを定量的に評価した。本年度はインタフェースの種類を増やして比較実験を引き続き行った。

### 日立東大ラボ ハビタットイノベーション WG4「超高齢社会」

本年度より、高齢者の生活状況支援のためのモニタリング技術の開発を開始した。

まずは各種センシング技術を柏キャンパスの模擬住居内にまとめて実装の上で、連動デモンストレーションの開発を行なった。今後はこの動作精度を向上させ、実際の住居などでの導入実験や協創の場として活用していく。

### 新日鉄興和不動産株式会社との共同研究

「超高齢社会に対応したマンションの建て替え方式」を研究するため研究会を開催。新日鉄興和不動産が関係したマンション建て替え事例のレビュー（住民インタビュー等を含む）と、いくつかの建て替え予備段階にある事例のケーススタディを行った。

具体的には次のとおりである。

**研究目的** 建築的デザイン、都市的デザイン、建て替えマネジメント手法等を総合的に検討しながら、超高齢社会に対応したマンション建て替え手法を研究開発すること。

**研究内容** 事例調査等を中心として、1) 建築的デザイン、2) 都市的デザイン、3) 建て替えマネジメント手法について、学内の多分野の専門家・学生が連携して、超高齢社会に対応したマンション建て替え手法について検討する。

**調査内容** 建て替えがスムーズに進んだ理由、高齢化するなかで建物のどのような点に不安を持ったか。新しい建物で改善されて良かった点は何か。建て替え後の移住等の状況。建て替えにより世代交代や世代ミックスは進んだか、近隣との関係性に変化はあったか。

具体的なマンション建て替えについて、調査するために、団地内の自治会等に調査協力を依頼し、超高齢社会に対応したマンション建て替え手法についてモデルを検討している。



## 5. シンポジウム

### 10/20～21 博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム2017」

開催日前日に行われた分科会、「学生による『出口戦略』に関する事前議論」（学生のキャリア支援やプログラムの定着などの出口戦略について議論する分科会）から2名の学生が参加。15グループのうち、コース生らのグループの提言が選ばれ、21日に発表された。また、最終的にその内容は「名古屋宣言」（出口戦略、プログラム定着、多様性推進という3つの分科会で参加者の合意が得られた提言のまとめ）にも盛り込まれた。

20日には、「リーディングプログラムで身につけたスキルがキャリア形成にどう生かされるか」についてのポスター発表と、その後に行われた意見交換会に2名の学生が参加し、そのうち1名がAcademia Future Leader Awardを受賞した。

### 3/2 第7回「高齢者クラウド」シンポジウム（後援）

本郷キャンパスで行われた第7回目「高齢者クラウド」シンポジウムを後援した。「高齢者クラウド」の研究開発を取り巻く情勢とその社会実装について議論を展開し、柔軟な働き方を実際に社会に広げている企業や行政の方々を交え、シニアも活躍する2020年に向けたディスカッションが行われた。

### 3/3 国内シンポジウム2018「これからのジェロントロジーを考える——新しい福祉国家像の実現に向けて——」

東京大学浅野キャンパス武田ホールで、IOG/GLAFS国内シンポジウム2018「これからのジェロントロジーを考える——新しい福祉国家像の実現に向けて——」を開催した。

午前の部はGLAFS学生による共同研究の成果発表。午後からは神野直彦先生（東京大学名誉教授・日本社会事業大学学長）に、福祉国家の所得再配分機能が機能不全に陥っていったその歴史的経緯からポスト福祉国家のビジョンまで、財政学の立場からお話しいただいた。

後半のパネルディスカッションでは、神野先生に加え、熊田孝恒先生（京都大学情報学研究科教授・GLAFSプログラムオフィサー）、山本則子先生（東京大学医学系研究科教授・GLAFSプログラム教員）、上村泰裕先生（名古屋大学環境学研究科准教授）が登壇され、コーディネーターを務めた大方機構長と共に“新しい福祉国家像の実現”に向けて、公共サービスのあり方や現在の問題点等について話し合った。

参加者は150名超。パネルディスカッション後には一般参加者からも多くの質問が寄せられ、高齢社会に対する問題意識が社会的に共有されていることを感じさせてくれた。

## 〈プログラム〉

午前の部（10：30～12：30）

### GLAFS 共同研究成果報告

本年度で4年目となる共同研究の成果報告とともに、残された課題や今後の方針について意見交換を行った。

#### 【各グループの発表テーマ】

G1/2 「要介護高齢者の居住地選択要因」

G3—① 「弱らない・弱っても住み続けられる住環境のデザイン」

G3—② 「要介護になっても暮らし続けられるバリアフリー改修マニュアル作り」

G4/5/6 「超高齢社会における住民主体のコミュニティづくりの方法論の開発」

G7 「高齢者支援技術のデザイン指針や導入方策を導くためのニーズ・現状調査」

### プログラム教員、プログラムオフィサーからのコメント

午後の部（13：45～17：20）

IOG/GLAFS の活動紹介 大方潤一郎（東京大学工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）

### 基調講演

「超高齢社会における福祉国家のあり方」 神野直彦（東京大学名誉教授・日本社会事業大学学長）

### パネルディスカッション「これからのジェロントロジーを考える—新しい福祉国家像の実現に向けて—」

超高齢社会を見据えた新しい福祉国家像の実現に向けて、ジェロントロジーにはどのような研究が求められるのか。IoT や AI などのテクノロジーの応用可能性、税負担とサービス給付の関係、地域間格差の問題、地域資源を活かした見守りの体制づくりなど、4名の登壇者それぞれの専門的見地から、活発なディスカッションがなされた。



#### 【登壇者】

神野直彦（東京大学名誉教授・日本社会事業大学学長）

熊田孝恒（京都大学情報学研究科教授・GLAFS プログラムオフィサー）

山本則子（東京大学医学系研究科教授・GLAFS プログラム教員）

上村泰裕（名古屋大学環境学研究科准教授）

#### 【コーディネーター】

大方潤一郎

## 6. 研究会・セミナー

### イブニングセミナー

学内外の最先端の研究や取り組みの成果の報告、及びそれらを共有する場として、2015年度からスタートした。

#### 〈各回の話題提供者とテーマ〉

#### 4/25 第1回

University of Washington の Nancy. S. Jecker 教授をお招きし、「Preserving Dignity in Old Age: An Argument Based on Life Stage Relativity」というテーマで、老年期の倫理的課題や米国の現状についてお話を伺った。ヒトの持つ10の特性 (Nussbaum, 2008) をもとに尊厳 (dignity) が保たれていない高齢者の事例をわかりやすく解説していただき、尊厳という概念の文化的差異について議論を深めた。

#### 〈コース生の感想〉

Suthutvoravut Unyaporn 医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻 MD2年

The topic of dignity is very interesting. Thank you for the easy-to-understand talk and pleasant discussion. I would like to learn more about how we could help caring the older adults using concept from both asian and western countries.



ライブラリで行われたセミナーの様子

#### 6/27 第2回

愛知県豊橋市の医療法人・社会福祉法人「さわらび会」統括本部長・山本左近氏をお迎えし、「超高齢社会に向けたさわらび会の取り組みと展望」をお話しいただいた。さわらび会は高齢者福祉施設だけでなく障がい者施設も運営する大規模な法人で、国の制度に先駆けて認知症ケアや医療

介護の連携等にいち早く取り組んだことで知られている。また、山本氏は元 F1 ドライバーという異色の経歴の持ち主。このセミナーでは、F1 ドライバーになるまで、また、その後に福祉の世界へ転身した動機や、さわらび会の理念、今後のアジア進出計画などについても伺った。

#### 〈コース生の感想〉

高田遼介 工学系研究科建築学専攻 修士 2 年

さわらび会が目指す福祉村という理念は大変勉強になった。元々、高齢者医療を専門として独自の研究を進め、地域との共生を念頭に置きながら、徐々に地域の人々にサービスを提供するシステムを構築していった過程は今後、他の地域にも適用していけると思う。また、近年、インドでの事業も開始しており、アジアとの連携を意識していることに関しては、世界を渡り歩き様々な経験をしてきた、山本左近氏ならではの情熱を感じることができた。



### **3. 若手研究者による研究成果**

# 1. 論文等

## ■ 菅原育子（特任講師）

### 【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

1. 小林江里香，菅原育子，秋山弘子．高齢者の健康・心理・社会的側面の横断的・縦断的变化におけるコーホート差の研究．理論と方法，2017;32（1），194.

### 【国際会議における発表】

1. Sugawara I, Takayama M, Ishioka Y, Suganuma M, Masui Y, Ogawa M. Neighborhood social support and companionship among the very old living in an urban area in Japan. The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, CA:USA, 2017.7.23-27. 査読有
2. Sugawara I, Akiyama H. Diversity of social network and well-being: Examining its impact on older Japanese. In T. Antonucci (Chair), 'Convoys in global context', Symposium conducted at The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, CA:USA. 2017.7.23-27. 査読有
3. Takayama M, Ishioka Y, Sugawara I, Masui Y, Suganuma M, Ogawa M. Social capital, health, and subjective well-being in the very old: The K2 Study. The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, CA:USA. 2017.7.23-27. 査読有

### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 菅原育子，檜山敦，神山祥子，小林謙次郎，秋山弘子．歩行姿勢チェックを入り口としたヘルスプロモーションによる意識および行動変容の効果．第59回日本老年社会学会，名古屋市，2017.6.15-16．査読有
2. 石岡良子，高山緑，菅原育子，増井幸恵，小川まどか，菅沼真樹．都市部に在住する後期高齢者の家庭での役割行動の評価尺度：K2 study データを用いて．第59回日本老年社会学会，名古屋市，2017.6.15-16．査読有
3. 高山緑，石岡良子，孫怡，菅原育子，増井幸恵，小川まどか，菅沼真樹．後期高齢期における幸福感，地域への意識，地域環境との関係性：K2 study データを用いて．第59回日本老年社会学会，名古屋市，2017.6.15-16．査読有
4. 高山緑，石岡良子，孫怡，菅原育子．後期高齢期における精神的健康と地域環境との関係：マルチレベル分析を用いて．第32回日本老年精神医学会，名古屋市，2017.6.15-16．査読有
5. 石岡良子，高山緑，菅原育子，増井幸恵，小川まどか，菅沼真樹．後期高齢者の生活に対する将来展望と認知機能との関連：K2 study データを用いて．日本心理学会第81回大会，久留米

市, 2017.9.20-22.

6. 菅原育子, 小林江里香. 高齢者の家庭内外での社会的活動の類型化とその関連要因: 潜在クラス分析による活動類型の検討. 日本社会心理学会第58回大会, 東広島市, 2017.10.28-29.

## ■ 村山洋史 (特任講師)

### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Murayama H, Shinkai S, Nishi M, Taniguchi Y, Amano H, Seino S, Yokoyama Y, Yoshida H, Fujiwara Y, Ito H. Albumin, hemoglobin, and the trajectory of cognitive function in community-dwelling older Japanese: a 13-year longitudinal study. *Journal of Prevention of Alzheimer's Disease* 2017;4 (2): 93-99. [査読有](#)
2. Murayama H, Spencer MS, Sinco BR, Palmisano G, Kieffer EC. Does racial/ethnic identity influence the effectiveness of a community health worker intervention for African American and Latino adults with type 2 diabetes? *Health Education & Behavior* 2017;44 (3): 485-493. [査読有](#)
3. Murayama H, Shaw BA. Heterogeneity in trajectories of body mass index and their associations with mortality in old age: a literature review. *Journal of Obesity & Metabolic Syndrome* 2017;26: 181-187. [査読有](#)
4. Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S. Changes in health behaviors and the trajectory of body mass index among older Japanese: a 19-year longitudinal study. *Geriatrics & Gerontology International* 2017;17:2008-2016. [査読有](#)
5. Murayama H, Fujiwara T, Tani Y, Amemiya A, Matsuyama Y, Nagamine Y, Kondo K. Long-term impact of childhood disadvantage on late-life functional decline among older Japanese: Results from the JAGES prospective cohort study. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences*. (in press) [査読有](#)
6. Tabuchi T, Murayama H, Hoshino T, Nakayama T. An out-of-pocket cost removal intervention on fecal occult blood test attendance. *American Journal of Preventive Medicine* 2017;53: e51-e62 [査読有](#)
7. Yokoyama Y, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Nofuji Y, Narita M, Matsuo E, Seino S, Kawano Y, Shinkai S. Dietary variety and decline in lean mass and physical performance in community-dwelling older Japanese: A 4-year follow-up study. *Journal of Nutrition, Health and Aging* 2017;21:11-16. [査読有](#)
8. Taniguchi Y, Kitamura A, Seino S, Murayama H, Amano H, Nofuji Y, Nishi M, Yokoyama Y, Shinozaki T, Yokota I, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S. Gait performance trajectories and incident disabling dementia among community-dwelling older Japanese. *Jour-*



*nal of the American Medical Directors Association* 2017;18:192.e13–192.e20 [査読有](#)

9. Taniguchi Y, Kitamura A, [Murayama H](#), Amano H, Shinozaki T, Yokota I, Seino S, Nofuji Y, Nishi M, Yokoyama Y, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S. Mini-Mental State Examination score trajectories and incident disabling dementia among community-dwelling older Japanese. *Geriatrics & Gerontology International* 2017;17:1928–1935. [査読有](#)
10. Seino S, Nishi M, [Murayama H](#), Narita M, Yokoyama Y, Taniguchi Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S. Effects of a multifactorial intervention comprising resistance exercise, nutritional, and psychosocial programs on frailty and functional health in community-dwelling older adults: a randomized, controlled, crossover trial. *Geriatrics & Gerontology International* 2017;17:2034–2045. [査読有](#)
11. Nonaka K, Suzuki H, [Murayama H](#), Hasebe M, Koike T, Kobayashi E, Fujiwara Y. For how many days and what types of group activities should older Japanese adults be involved in to maintain health? A 4-year longitudinal study. *PLoS ONE* 2017;12 (9): e0183829. [査読有](#)
12. Amemiya A, Fujiwara T, [Murayama H](#), Tani Y, Kondo K. Adverse childhood experiences and higher-level functional limitations among older Japanese people: results from the JAGES study. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences* 2018;73:261–266. [査読有](#)
13. Okamura T, Ura C, Miyamae F, Sugiyama M, Inagaki H, Edahiro A, [Murayama H](#), Motokawa K, Awata S. To give or to receive: Relationship between social support giving/receiving and psychometrics in the large-scaled survey. *International Journal of Geriatric Psychiatry*. (in press) [査読有](#)
14. Taniguchi Y, Kitamura A, Nofuji Y, Ishizaki T, Seino S, Yokoyama Y, Shinozaki T, [Murayama H](#), Mitsutake S, Amano H, Nishi M, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S. Association of trajectories of higher-level functional capacity with mortality and medical and long-term care costs among community-dwelling older Japanese. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences*. (in press) [査読有](#)
15. 田口敦子, [村山洋史](#), 荒川美穂子, 寺尾敦史. 健康推進員組織の課題解決を目指した研修プログラムの効果. *日本公衆衛生雑誌*, 2017;64 (4):207–216. [査読有](#)
16. 土屋瑠見子, 吉江悟, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, [村山洋史](#), 西永正典, 飯島勝矢, 辻哲夫. 在宅医療推進のための多職種連携研修プログラム開発：都市近郊地域における短期的効果の検証. *日本公衆衛生雑誌*, 2017;64 (7):359–370. [査読有](#)

#### 【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. [村山洋史](#). 高齢期の体重管理を考える. *老年看護学*, 2018;22 (2):25–27.

## 【著書，編著】

1. 村山洋史，野中久美子，箕浦明，南潮，池内朋子，藤原佳典. 労働市場・雇用政策と健康. 高尾総司，藤原武男，近藤尚己，監訳. 社会疫学. 大修館書店，2017:pp. 189-259.
2. 村山洋史，高尾総司，藤原武男，近藤尚己. なぜいま社会疫学なのか. 高尾総司，藤原武男，近藤尚己，監訳. 社会疫学. 大修館書店，2017:pp. 337-351.

## 【国際会議における発表】

1. Murayama H. Socioeconomic status and weight change in old age: comparison between Japan and Finland. The Pre-meeting of the 9<sup>th</sup> Annual Meeting of International Society of Social Capital Research, Turku, Finland, 2017.6.6-7. [査読有](#)
2. Murayama H. Neighbourhood bonding and bridging social capital and self-rated health in urban area of Tokyo. The 9<sup>th</sup> Annual Meeting of International Society of Social Capital Research, Stockholm, Sweden, 2017.6.8-9. [査読有](#)
3. Tabuchi T, Murayama H, Hoshino T, Nakayama T. An out-of-pocket cost removal intervention on fecal occult blood test attendance. The 2017 Annual Meeting of Society for Epidemiologic Reserach, Seattle, WA, USA, 2017.6.20-23. [査読有](#)
4. Murayama H, Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Eda Hiro A, Okamura T, Awata S. Are neighborhoods associated with the likelihood of dementia? A study in the Tokyo metropolitan area. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
5. Murayama H, Liang J, Bennett JM, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S. Trajectories of body mass index and their association with mortality among older Japanese. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
6. Shinkai S, Taniguchi Y, Amano H, Murayama H, Seino S, Nishi M, Yokoyama Y, Kitamura A. Trajectory pattern of Mini-Mental State Examination score and dementia in KLSAH. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
7. Shinkai S, Yokoyama Y, Narita M, Taniguchi Y, Seino S, Amano H, Murayama H, Kitamura A. Nutritional status and active life expectancy in a general population of older Japanese. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
8. Taniguchi Y, Seino S, Murayama H, Nishi M, Amano H, Fujiwara Y, Kitamura A, Shinkai S. Trajectory pattern of arterial stiffness and mortality risk among older Japanese. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)

9. Taniguchi Y, Murayama H, Seino S, Nishi M, Amano H, Fujiwara Y, Kitamura A, Shinkai S. Prospective of study of trajectories of physical performance and all-cause mortality. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
10. Seino S, Kitamura A, Nishi M, Murayama H, Narita M, Yokoyama Y, Nofuji Y, Shinkai S. A multifactorial intervention for improving frailty status: Exploring short- and long-term effects. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
11. Botosaneanu A, Shaw B, Murayama H, Liang J. Trajectories of grip strength, cardiometabolic risk factors, and disability on older adults. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
12. Sugiyama M, Murayama H, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Eda Hiro A, Okamura T, Awata S. The association of childhood socioeconomic disadvantage with cognitive impairment in older Japanese. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
13. Kobayashi E, Harada K, Murayama H, Fukaya T, Liang J. social isolation among older Japanese: Do regional attributes matter? The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
14. Fujiwara Y, Murayama Y, Hasebe M, Yamaguchi J, Yasunaga M, Nonaka K, Murayama H. Influence of intergenerational programs on social capital in local community. The 21<sup>st</sup> IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23-27. [査読有](#)
15. Yokoyama Y, Kitamura A, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Seino S, Shinkai S, Dietary diversity and lean mass in community-dwelling elderly Japanese: implications for dietary strategies to prevent sarcopenia, The 12th International Academy on Nutrition and Aging, San Francisco, CA, USA, 2017.7.23 [査読有](#)
16. Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S. Changes in health behaviors and the trajectory of body mass index among older Japanese: A 19-year longitudinal study. The 21<sup>st</sup> International Epidemiological Association World Congress of Epidemiology, Saitama, 2017.8.19-22. [査読有](#)
17. Tabuchi T, Murayama H, Hoshino T, Nakayama T. An out-of-pocket cost removal intervention on fecal occult blood test attendance. The 21<sup>st</sup> International Epidemiological Association World Congress of Epidemiology, Saitama, 2017.8.19-22. [査読有](#)
18. Fukui C, Yokouchi N, Kim T, Nakano K, Kyuwon K, Yamaguchi G, Fujita A, Suzawa S, Baba A, Sumikawa Y, Hyosook P, Kimata M, Murayama H, Sugawara I. Obstacle of aging

in place in Japan: A preliminary study. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, 2017.11.9-11.

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 岡村毅, 宇良千秋, 宮前史子, 杉山美香, 稲垣宏樹, 枝広あや子, 本川佳子, 村山洋史, 栗田主一. 与えるサポートと受けるサポートはどちらがこころの健康に有用か: 都市部地域在住高齢者の調査から. 第18回日本認知症ケア学会大会, 那覇, 2017.5.26-27. 査読有
2. 村山洋史. 高齢期における体格指数の軌跡と死亡率との関連 (シンポジウム). 第22回日本老年看護学会学術集会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
3. 岡村毅, 宇良千秋, 宮前史子, 杉山美香, 稲垣宏樹, 枝広あや子, 本川佳子, 村山洋史, 栗田主一. 認知症になった際の医療・介護に関する不安を持つ地域在住高齢者の特徴. 第32回日本老年精神医学会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
4. 谷口優, 北村明彦, 清野諭, 村山洋史, 野藤悠, 横山友里, 西真理子, 天野秀紀, 藤原佳典, 新開省二. 脈波伝播速度の加齢変化パターンと死因別死亡に関する前向き研究. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
5. 根元裕太, 野中久美子, 小池高史, 南潮, 桜井良太, 村山陽, 村山洋史, 小林江里香, 藤原佳典. 地域自立高齢者における社会参加活動への新規参加ならびに脱落の関連要因の検討: 縦断研究. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
6. 池内明子, 北村明彦, 横山友里, 清野諭, 成田美紀, 西真理子, 村山洋史, 新開省二. 未来時間展望と社会的ネットワークの異質性および同質性との関連: 地域在住高齢者における検討. 第59回日本老年社会学会大会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
7. 村山幸子, 小林江里香, 倉岡正高, 野中久美子, 安永正史, 田中元基, 根元裕太, 箕浦明, 松永博子, 村山洋史, 藤原佳典. ジェネラティビティの構成概念と関連要因についての探索的検討: 都市部高齢者を対象とした郵送調査の結果から. 第59回日本老年社会学会大会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
8. 野中久美子, 村山洋史, 倉岡正高, 村山幸子, 田中元基, 安永正史, 根元裕太, 松永博子, 渡辺修一郎, 小林江里香, 藤原佳典. 有償生活支援サービスのニーズと生活機能の関連. 第59回日本老年社会学会大会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
9. 田中元基, 小林江里香, 野中久美子, 村山洋史, 倉岡正高, 村山幸子, 安永正史, 根元裕太, 松永博子, 箕浦明, 藤原佳典. 高齢者間の世代差から見た他世代との日常生活における支援の授受の検討. 第59回日本老年社会学会大会, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
10. 枝広あや子, 本川佳子, 白部麻樹, 杉山美香, 稲垣宏樹, 宇良千秋, 宮前史子, 岡村毅, 村山洋史, 大淵修一, 藤原佳典, 金憲経, 井原一成, 河合恒, 渡邊裕, 平野浩彦, 栗田主一. オーラルフレイルと認知機能, 抑うつ傾向の関連. 第4回サルコペニア・フレイル学会大会, 京都, 2017.10.14-15. 査読有
11. 藤原佳典, 高橋知也, 野中久美子, 松永博子, 長谷部雅美, 根本裕太, 村山洋史, 小池高史,

- 南潮, 深谷太郎, 村山陽, 小林江里香. 高齢者における就労理由の差異からみた心身社会的特徴: ESSENCE 研究より. 第 12 回日本応用老年学会大会, 東京, 2017.10.22. [査読有](#)
12. 高橋知也, 野中久美子, 松永博子, 長谷部雅美, 根本裕太, [村山洋史](#), 小池高史, 南潮, 深谷太郎, 村山陽, 小林江里香, 藤原佳典. 高齢者の社会的孤立は予測可能か: 地域在住高齢者を対象とした縦断調査の結果から. 第 12 回日本応用老年学会大会, 東京, 2017.10.22. [査読有](#)
13. [村山洋史](#), 田口敦子, 竹田香織, 伊藤海, 藤内修二. 住民組織活動を通じたソーシャルキャピタルの醸成・活用の現状と課題 (第 2 報). 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
14. 田口敦子, [村山洋史](#), 竹田香織, 伊藤海, 藤内修二. 住民組織活動を通じたソーシャルキャピタルの醸成・活用の現状と課題 (第 1 報). 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
15. 伊藤海, 田口敦子, 松永篤志, 山崎奈穂子, 竹田香織, [村山洋史](#), 大森純子. 「互助」の概念分析—地域包括ケアシステムにおける互助促進モデルの開発に向けて—. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
16. 横山友里, 西真理子, [村山洋史](#), 天野秀紀, 谷口優, 清野諭, 成田美紀, 池内朋子, 北村明彦, 新開省二. 地域在住高齢者における PFC バランスとフレイルとの関連—鳩山コホート研究—. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
17. 藤原佳典, 野中久美子, 倉岡正高, 松永博子, 村山幸子, 田中元基, 根本裕太, [村山洋史](#), 渡辺修一郎, 松永佳子, 福島富士子, 小林江里香. 大都市部におけるダブルケアの実態と他世代間の支援の関連. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
18. 太田沙紀子, 引地博之, [村山洋史](#), 石丸美穂, 緒方泰子, 康永秀生. 特定事業所の居宅介護支援サービスと要介護度に関するコホート研究. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
19. 谷口優, 北村明彦, 野藤悠, 石崎達郎, 清野諭, 横山友里, [村山洋史](#), 光武誠吾, 天野秀紀, 西真理子, 干川なつみ, 濱口奈緒美, 岡部たづる, 藤原佳典, 新開省二. 高次生活機能の加齢変化パターンと医療費及び介護費との関連—草津町研究—. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
20. 野中久美子, 高橋知也, 長谷部雅美, 松永博子, 根本裕太, [村山洋史](#), 小池高史, 深谷太郎, 村山陽, 鈴木宏幸, 小林江里香, 藤原佳典. 「高齢者見守りキーホルダー」システムの新規登録者の特徴: 健康との関連から. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
21. 池内朋子, 北村明彦, 西真理子, 横山友里, 清野諭, 成田美紀, 谷口優, 天野秀紀, [村山洋史](#), 新開省二. Future Time Perspective and Health Behavior: The Hatoyama Cohort Study. 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
22. 西真理子, 横山友里, 成田美紀, 池内朋子, 清野諭, 谷口優, 天野秀紀, [村山洋史](#), 北村明彦,

新開省二. 地域在宅高齢者における虚弱発生の関連要因—鳩山コホート研究—. 第76回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. 査読有

23. 高橋知也, 野中久美子, 松永博子, 長谷部雅美, 根本裕太, 村山洋史, 小池高史, 南潮, 深谷太郎, 村山陽, 鈴木宏幸, 小林江里香, 藤原佳典. 高齢者における就労理由と就労形態および諸変数間での比較~ESSENCE研究より~. 第76回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. 査読有

24. 長谷部雅美, 野中久美子, 高橋知也, 松永博子, 根本裕太, 村山洋史, 小池高史, 深谷太郎, 村山陽, 鈴木宏幸, 小林江里香, 藤原佳典. 地域高齢者における社会参加の種類と組み合わせが生活機能の良好さに及ぼす影響. 第76回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. 査読有

25. 村山幸子, 倉岡正高, 野中久美子, 田中元基, 根本裕太, 安永正史, 小林江里香, 村山洋史, 藤原佳典. 児童・生徒の挨拶習慣が居住地域の暮らしやすさと援助行動へ及ぼす影響. 第76回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. 査読有

26. 小林江里香, 野中久美子, 倉岡正高, 松永博子, 村山幸子, 田中元基, 根本裕太, 村山洋史, 渡辺修一郎, 松永佳子, 藤原佳典. 性・年齢層別にみた地域の子育て支援行動の実施状況と関連要因. 第76回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. 査読有

27. 村山洋史, Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, 小林江里香, 深谷太郎, 新開省二. 社会経済状態と高齢期の生活機能の軌跡パターン. 第28回日本疫学会学術総会, 福島, 2018.2.1-3. 査読有

28. 菖蒲川由郷, 坪川トモ子, 村山洋史, 齋藤玲子, 近藤克則. 地域のソーシャルキャピタルと閉じこもりの関連: JAGES新潟研究より. 第28回日本疫学会学術総会, 福島, 2018.2.1-3. 査読有

## ■ 後藤純 (特任講師)

### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 後藤純, 大方潤一郎. エイジフレンドリーシティ行動計画の特徴と意義. 都市計画論文集, 2017;52 (3), 975-982. 査読有

### 【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 後藤純. 福井県坂井地区における地域包括ケアシステムと住まいのアセスメント. 日本建築学会研究協議会「地域包括ケアとまちづくり~既存資源を活かした都市と建築の超高齢社会対応計画論~」資料, 2017;35.

2. 後藤純. エイジフレンドリーシティ国内自治体向け研修会報告. 雑誌『都市計画』, 2018;8.

### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 後藤純. セカンドライフ就労の支援とシステム. 秋田県大館市高年齢者活用促進セミナー, 2017.6.22. (基調講演)

2. 後藤純. 活力ある「健康長寿のまち」はとやまをみんなでつくろう. 埼玉県鳩山町地域包括ケ

アセンター開所式, 2017.7.2. (基調講演)

3. 後藤純. 在宅医療を含む地域包括ケアシステムをどうつくるか?—コミュニティデザインからのアプローチ—. 平成 29 年度東北ブロック地域包括・在宅介護支援センター職員研修会, 2017.11.16. (基調講演・コーディネーター)
4. 後藤純. 活力ある超高齢社会の協創. 彩の国さいたま人づくり広域連合政策課題研究会「香日向の未来どう創る?」. 2017.11.19. (基調講演)
5. 後藤純. 多様な主体が連携・協力しておこなう「地域づくり」. 神奈川県川崎市地域包括ケアシステム講演会 (基調講演・コーディネーター)
6. 後藤純. 人生 100 年時代を支える活力ある地域社会のつくり方. 福井県坂井市「まちづくり協議会グレードアップ研修会」, 2017.12.6. (基調講演)
7. 後藤純. 自分のやりたいことが健康とまちをつくる. 2018 年 1 月 30 日鶴ヶ島市ささえあい協議会「地域のささえあいの仕組みを考える講演会」, 2018.1.30. (基調講演)
8. 後藤純. 人生 100 年時代を拓くこれからの地域づくり～地域包括ケアとフレイル予防～. 福井県あわら市「あわら市健康長寿セミナー」. 2018.2.23. (基調講演)
9. 後藤純. これからの時代新たなコミュニティ形～次世代につなぐ助けあいの仕組み. 岩手県釜石市平成 29 年度地域づくりフォーラム, 2018.3.4. (基調講演)
10. 後藤純. 医療福祉の立場から, 埼玉県草加市「これからのまちづくりを語る!まちづくりタウンミーティング」, 2018.3.17. (情報提供)
11. 後藤純. 自分らしい地域デビューをしよう. 川崎市宮前区「宮前区地域包括ケアシステム推進シンポジウム」, 2018.3.18. (基調講演)

#### 【自治体研修】

1. 後藤純. 自市町村の総合事業を考える～我が町に介護保険制度無かったら. 秋田県長寿社会振興財団平成 29 年度地域包括ケアシステム構築セミナー, 2017.5.23. (基調講演)
2. 後藤純. 自市町村の総合事業を考える～我が町に介護保険制度がなかったら. 秋田県横手市地域包括支援センター職員研修, 2017.7.12.
3. 後藤純. 地域包括ケアシステムとコミュニティデザイン. 秋田県主任介護支援専門員指導力向上研修, 2017.9.12.
4. 後藤純. コミュニティデザイン技法を用いた地域マネジメント. 神奈川県川崎市地域包括支援センター職員研修, 2018.3.13.

#### ■ 木全真理 (特任助教)

##### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 木全真理. 保険制度外の訪問看護の実態に関する調査研究. 日本看護科学会誌, 2017;37:329–335. 査読有

### 【国際会議における発表】

1. Kimata M. Role Awareness of Home-Visit Nurses in Multidisciplinary Collaboration. the 21<sup>st</sup> International Association of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, California, US, 2017.7.23-27. [査読有](#)
2. Suzawa S, Yamaguchi G, Fujita A, Kim K, Baba A, Wang T, Haseda M, Mugiyama R, Ando E, Sakka M, Fukui Y, Kimata M., Sugawara I. Factors influencing a process for building intentions about a life of elderly people using home nursing care. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, Tokyo, Japan, 2017.11.9-11.
3. Fukui C, Yokouchi N, Kim T, Nakano K, Kim K, Yamaguchi G, Fujita A, Suzawa S, Baba A, Sumikawa Y, Park H, Kimata M., Murayama H, Sugawara I. Obstacles to Aging in Place in Japan: A Preliminary Study. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, Tokyo, Japan, 2017.11.9-11.

### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理. 訪問看護ステーション管理者の多職種協働への参加理由と管理者の特徴. 第37回日本看護科学学会学術集会, 仙台, 2017.12.16-17. [査読有](#)

### ■ 三浦貴大 (特任助教)

#### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Matsuo M, Sakajiri M, Onishi J, Ono T, Miura T. Experience Report of a Blind Gamer to Develop and Improve the Accessible Action RPG ShadowRine for Visually Impaired Gamers. Journal on Technology and Persons with Disabilities, 2017;5:172-191. DOI: 10.2113/190211. [査読有](#)
2. 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, 金ギョンミン, 長木美緒, 高田遼介, 三浦貴大, 孫輔卿, 西野亜希子, 田中敏明, 飯島勝矢, 西出和彦, 大月敏雄. 在宅高齢者の転倒実態調査に基づく転倒プロセスのモデル化—文京区・横浜市・柏市を対象とした調査研究—. 日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, 2017;12:217-226 [査読有](#)

### 【国際会議における発表】

1. Ueda M, Nishikubo T, Miura T., Morihara T, Tsuchida Y, Hiroe M, Hiraguri Y. How to establish a better information disclosure system on noise and environment -Concept proposals of information disclosure and a noise experience tool-. Proc. ICBEN 2017, Zurich, Switzerland, 2017.6, 5 pages [査読有](#)
2. Matsuo M, Miura T., Sakajiri M, Onishi J, Ono T. Inclusive Side-scrolling Action Game



Securing Accessibility for Visually Impaired People, Proc. INTERACT 2017 (Lecture Notes in Computer Science, 10516), Mumbai, India, 2017.9, 410-414 [査読有](#)

3. [Miura T](#), Soga S, Matsuo M, Sakajiri M, Onishi J, Ono T. GoalBaural: A Training Application for Goalball-related Aural Sense, Proceedings of the 9th Augmented Human International Conference (Proc. AH'18), Seoul, Korea, 2018.2, Article No. 20 (5 pages). [査読有](#)
4. [Miura T](#), Yabu K, Ogino R, Hiyama A, Hirose M, Ifukube T. Collaborative Accessibility Assessments by Senior Citizens Using Smartphone Application ReAcTS (Real-world Accessibility Transaction System). Proceedings of the 15th International Cross-Disciplinary Conference on Web Accessibility (Proc. W4A'18), Lyon, France, 2018.4, 10 pages. DOI: 10.1145/3192714.3192826 (to Appear) [査読有](#)
5. Miura T (\*), Ando G (\*), Onishi J, Matsuo M, Sakajiri M, Ono T. Virtual Museum for People with Low Vision. Proceedings of 16th International Conference on Computers Helping People with Special Needs (Proc. ICCHP 2018), Linz, Austria, 2018.7, 4 pages [査読有](#) (\*: equally contributed) (to Appear).
6. Miura T (\*), Fujito M (\*), Matsuo M, Sakajiri M, Onishi J, Ono T. AcouSTTic: A training application of aural sense on sound table tennis (STT). Proceedings of 16th International Conference on Computers Helping People with Special Needs (Proc. ICCHP 2018), Linz, Austria, 2018.7, 8 pages [査読有](#) (\*: equally contributed) (to Appear).

#### **【国内学会・シンポジウム等における発表】**

1. 清水洋志, 古川政光, 田中兼一, 道吉誓子, 山本哲也, 藪謙一郎, 上田一貴, [三浦貴大](#), 伊福部達. 音声操作時における認知負荷推定手法の開発. 自動車技術会 2017 年春季大会, 横浜, 2017.5, 6 pages.
2. 松尾政輝, [三浦貴大](#), 櫻田仁幸, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東. 全盲者のアクセシビリティに配慮した音で作図するタッチスクリーン端末用地図エディタ. LIFE 2017, 東京, 2017.9, 3 pages (OS-8-3).
3. 坂尻正次, [三浦貴大](#), 三好茂樹, 大西淳児, 小野東, 伊福部達. 2次元触覚ディスプレイを用いた盲ろう者の歌唱支援のための触覚フィードバックによる音声ピッチ制御. LIFE 2017, 東京, 2017.9, 2 pages (OS-8-4).
4. [三浦貴大](#), 坂尻正次, 大西淳児, 松尾政輝, 小野東. Minsky: 全盲者のためのスマートフォン向け小型ソフトウェアキーボード. LIFE 2017, 東京, 2017.9, 3 pages (OS-8-5).
5. [三浦貴大](#), 藪謙一郎, 荻野亮吾, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達. 子供向け地域アセスメント支援ツールによるアクセシビリティマップの多世代共同作成支援. LIFE 2017, 東京, 2017.9, 4 pages (OS-8-6).
6. 大西淳児, 杉崎信清, 松尾政輝, 坂尻正次, [三浦貴大](#), 小野東. 盲ろう学生のための遠隔要約筆記伝達支援ソフトウェアの試作. LIFE 2017, 東京, 2017.9, 3 pages (OS-8-7).

7. 坂尻正次, 三浦貴大, 大西淳児, 曾我晋平, 松尾政輝, 小野東. ゴールボールにおける投球音の定位能力を訓練するアプリケーションの開発. 日本音響学会 2017 秋季研究発表会, 松山, 2017.9, 1497-1498.
8. 上田麻理, 三浦貴大. 主要空港における情報公開システムの現状と将来展望. 日本音響学会 2017 秋季研究発表会, 松山, 2017.9, 1399-1402.
9. 三浦貴大, 新雅史, 祐成保志, 三浦倫平, 西野亜希子, 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎. ヒビトル: 経験サンプリング法に基づく高齢者のための日常生活記録アプリケーション. 第 43 回 (2017 年) 感覚代行シンポジウム, 2017.12, 43-46.
10. 安藤玄太郎, 松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東. 弱視者のためのバーチャルミュージアムの構築. ライフサポート学会フロンティア講演会, 2018.3, 1 page.
11. 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 曾我晋平, 松尾政輝, 小野東. ゴールボールにおける投球音の定位能力を訓練するアプリケーションの開発. 日本音響学会 2018 春季研究発表会, 埼玉, 2018.3, 1607-1608.

## ■ 荻野亮吾 (特任助教)

### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 八木信一, 荻野亮吾, 諸富徹. 関係性のなかで自治制度を捉える: 長野県飯田市の地域自治組織を事例として. 地方自治, 2017;835:2-23.
2. 八木信一, 荻野亮吾, 木下巨一. まちづくりにおける「飯田モデル」の検証: 地域自治組織の導入前後における「自治の質量」の変化の観点から. 日本公共政策学会 2017 年度研究大会報告論文集, 2017; 全 18 頁.
3. 荻野亮吾. パートナーシップを通して地域の社会関係資本と共有価値を創造する. 生活協同組合研究, 2017;498:40-47.
4. 荻野亮吾. 女性活躍推進におけるパートナーシップの現状と課題. NVEC 実践研究, 2018;8: 24-42.

### 【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 西川昇吾, 丹田桂太, 中川友理絵, 大山宏, 相良好美, 荻野亮吾. 公民館研究の動向. 日本公民館学会年報, 2017;14:157-162.

### 【著書, 編著】

1. 荻野亮吾. 成人学習論. 日本教育社会学会 (編). 教育社会学事典. 丸善出版, 2018:pp. 508-509.

### 【国際会議における発表】

1. Kaneko K, Komazawa Y, Sakai E, Terazawa S, Yoshida S, Suto M, Matsuda Y, Doke M, Hamada T, Suthutvoravut U, Carandang R, Miyabe T, Fujiwara A, Fukui C, Jin G, Masuda K, Sandhu H, Ogawa K, Kim H, Ogino R, Goto J. Development of methodology for creating social activities run by the elderly themselves. APRU Aging in the Asia-Pacific

Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017. 11. 9.

2. Kim H, Ogawa K, Sandhu H, Masuda K, Hamada T, Jin G, Yoshida S, Kaneko K, Komazawa Y, Suto M, Matsuda Y, Doke M, Suthutvoravut U, Carandang R, Miyabe T, Fujiwara A, Fukui C, Sakai E, Terazawa S, Ogino R, Goto J. A process of neighborhood planning to create purpose in life for a longevity society: Formation of collective intention through workshops in Ohirayama, Kamakura city. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017. 11. 9.

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 八木信一, 荻野亮吾, 木下巨一. まちづくりにおける「飯田モデル」の検証：地域自治組織の導入前後における「自治の質量」の変化の観点から. 日本公共政策学会 2017年度研究大会 自由公募セッション I, 富山, 2017. 6. 17.
2. 荻野亮吾, 木下巨一. まちづくりにおける「飯田モデル」の検証. 第57回社会教育研究全国集会 分科会9「自治体改革と住民の学び」, 神奈川, 2017. 8. 27.
3. 荻野亮吾. 地域と学校との連携・協働を通じた社会関係資本の再構築の過程：大分県佐伯市を事例として. 日本社会教育学会第64回研究大会, 埼玉, 2017. 9. 16.
4. 三浦貴大, 藪謙一郎, 荻野亮吾, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達. 子供向け地域アセスメント支援ツールによるアクセシビリティマップの多世代共同作成支援. LIFE 2017, 東京, 2017. 9. 16.
5. 氏原理恵子, 荻野亮吾. 地域運営組織と公民館. 日本公民館学会第16回研究大会 テーマ別セッション C, 佐賀, 2017. 12. 9.

#### ■ 孫輔卿（特任助教）

##### 【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Hashizume T, Son BK, Kojima T, Nanao-Hamai M, Asari Y, Umeda-Kameyama Y, Ogawa S, Akishita M. Sex difference in the association of androgens with aortic calcification. *Geriatr Gerontol Int*, 2018 (in press). [査読有](#)
2. 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, 金ギョンミン, 長木美緒, 高田遼介, 三浦貴大, 孫輔卿, 西野亜希子, 田中敏明, 飯島勝矢, 西出和彦, 大月敏雄. 在宅高齢者の転倒実態調査に基づく転倒プロセスのモデル化—文京区・横浜市・柏市を対象とした調査研究—日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, 2017;12:217-226. [査読有](#)

##### 【国際会議における発表】

1. Uchiyama E, Unyaporn S, Imaeda S, Tanaka T, Taniguchi S, Son BK, Matsubara T, Otsuki T, Nishide K, Tanaka T, Iijima K, Okata J. Physical and Environmental Characteristics of Elderly Faller with Femoral Neck Fractures. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists. Tokyo, Japan, 11, 2017.
2. Son BK, Ogawa S, Akishita M. Preventive effects of testosterone on development of ab-

dominal aortic aneurysm. The 21st International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, USA 2017.7.23-27. [査読有](#)

3. Nanao-Hamai M, [Son BK](#), Hashizume T, Ogawa S, Akishita M. Ginsenoside Rb1 Inhibited Vascular Smooth Muscle Cells Calcification through Androgen Receptor. The 21st International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, USA 2017.7.23-27. [査読有](#)
4. Hashizume T, [Son BK](#), Nanao-Hamai M, Ogawa S, Akishita M. Characteristics of age-related skeletal muscle decline and cognitive impairment in mouse: Influence of vascular inflammation. 7th International Conference on Frailty and Sarcopenia Research (ICFSR), Barcelona, Spain 2017.4.28. [査読有](#)
5. [Son BK](#), Ogawa S, Akishita M. Preventive effects of testosterone/androgen receptor against the formation of abdominal aortic aneurysm in mice. 8th Congress of the International Society for Gender Medicine, Sendai, Japan 2017.9.14-16. [査読有](#)
6. Nanao-Hamai M, [Son BK](#), Hashizume T, Ogawa S, Akishita M. Estrogen inhibits vascular smooth muscle cells calcification through estrogen receptor alpha-dependent Gas6 transactivation. 8th Congress of the International Society for Gender Medicine, Sendai, Japan. 2017.9.14-16. [査読有](#)

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [孫輔卿](#), 小川純人, 秋下雅弘. テストステロン低下による大動脈瘤形成の促進と炎症の関与—精巣摘出マウスを用いた検討—第 59 回日本老年医学会, 名古屋, 2017.06.14-16. [査読有](#)
2. 七尾道子, [孫輔卿](#), 橋詰剛, 小川純人, 秋下雅弘. Ginsenoside Rb1 の血管石灰化抑制作用—選択的アンドロゲン受容体モジュレーター (SARM) としての可能性—第 59 回日本老年医学会, 名古屋, 2017.6.14-16. [査読有](#)
3. [孫輔卿](#), 小川純人, 秋下雅弘. 低テストステロンによる大動脈瘤形成と炎症の関与—精巣摘出マウスを用いた検討. 第 49 回日本動脈硬化学会, 広島, 2017.7.6-7. [査読有](#)
4. 橋詰剛, [孫輔卿](#), 濱井道子, 小川純人, 秋下雅弘. 大動脈瘤の認知機能低下への影響—大動脈瘤マウスモデルを用いた検討—第 49 回日本動脈硬化学会, 広島, 2017.7.6-7. [査読有](#)
5. 浅利雄介, 七尾道子, [孫輔卿](#), 橋詰剛, 小川純人, 秋下雅弘. 芍薬の Paeoniflorin は血管石灰化を抑制する. 第 49 回日本動脈硬化学会, 広島, 2017.7.6-7. [査読有](#)
6. 橋詰剛, [孫輔卿](#), 濱井道子, 小川純人, 秋下雅弘. 大動脈瘤による認知機能低下への影響—炎症制御破綻を介した作用—第 8 回日本脳血管・認知症学会, 東京, 2017.8.5. [査読有](#)
7. 内山瑛美子, [孫輔卿](#), 今枝秀二郎, 田中友規, 松本博成, 森田光治良, Suthutvoravut Unyaporn, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 大腿骨近位部骨折により入院した患者への聞き取り調査による転倒実態調査. 日本転

倒予防学会第4回学術集会一般演題. 岩手, 2017, 10.7-8. [査読有](#)

8. 今枝秀二郎, 内山瑛美子, [孫輔卿](#), 田中友規, 松本博成, 森田光治良, Suthutvoravut Unyaporn, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 地域や自宅における在宅高齢者の転倒事例に基づく建築的な転倒予防対策. 日本転倒予防学会第4回学術集会一般演題. 岩手, 2017, 10.7-8. [査読有](#)
9. Suthutvoravut Unyaporn, [孫輔卿](#), 田中友規, 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 松本博成, 森田光治良, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 転倒に伴う大腿骨近位部骨折により入院した高齢患者の特徴: 服用薬物・合併症・ロコモティブシンドロームの観点から. 日本転倒予防学会第4回学術集会一般演題. 岩手, 2017, 10.7-8. [査読有](#)
10. [孫輔卿](#), 小川純人, 秋下雅弘. 大動脈瘤形成に対するテストステロンの抑制作用と炎症の制御—精巣摘出マウスを用いた検討—第8回テストステロン研究会. 東京, 2017.10. 7. [査読有](#)

#### ■ 室山良介 (特任助教)

##### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Arai J, Goto K, Stephanou A, Tanoue Y, Ito S, [Muroyama R](#), Matsubara Y, Nakagawa R, Morimoto S, Kaise Y, Lim LA, Yoshida H, Kato N. Predominance of regorafenib over sorafenib: Restoration of membrane-bound MICA in hepatocellular carcinoma cells. Journal of Gastroenterology and Hepatology, 2017, [Epub ahead of print]. [査読有](#)

##### 【国際会議における発表】

1. [Muroyama R](#), Goto K, Matsubara Y, Nakagawa R, Arai J, Morimoto S, Kaise Y, Ito S, Kato N. Fusion HBx from HBV integrant might alter ER stress response and contribute to hepatocarcinogenesis. APASL Single Topic Conference 2017, Nagasaki, Japan, 2017. 4.10. [査読有](#)
2. [Muroyama R](#), Nakagawa R, Kaise Y, Matsubara Y, Lim LA, Kato N. Fusion HBx from HBV integrant might be implicated in hepatocarcinogenesis through dysregulation of ER stress response. The 68<sup>th</sup> American Association for the Study of Liver Diseases. Washington, DC, USA, 2017. 10. 22. [査読有](#)

##### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [室山良介](#), 加藤直也. HBx の機能阻害を作用機序とする新規の抗 HBV 薬の探索. 第53回日本肝臓学会総会, 広島, 2017. 6. 8. [査読有](#)

#### ■ 朴孝淑 (特任助教)

##### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. [朴孝淑](#). 正規・非正規労働者との間の処遇格差の問題. 労働問題リサーチセンター編『格差社

会と労働法の役割』, 財団法人日本 ILO 協会, 財団法人労働問題リサーチセンター, 2017.6; 200-225.

2. 朴孝淑. 日本の高齢期の所得保障制度: 高年齢者に対する雇用政策と年金政策の接続 (関係) を中心に. 社会保障法研究, 2017.12;6 (2): 35-60. 査読有
3. 朴孝淑. 韓国の産業災害補償保険法の解説. 業務委託型就業者の就業実態と法的保護の在り方 (東洋大学), 2018.2;122-134.

#### 【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 朴孝淑. [判例評釈] 改正高年法上の継続雇用制度における (職種変更を伴う) 再雇用内容の適法性: トヨタ自動車ほか事件 (名古屋高裁平 28・9・28 判決労判 1146 号 22 頁). 季刊労働法, 2017 (夏季);257:190-197.

#### 【国際会議における発表】

1. Hyosook Park, Japanese Social Security Law for Low fertility-Ageing Society, Social Security Law Asia Forum 3<sup>rd</sup> Colloquium: Asian social Security Law for Low Fertility-Ageing Society, Seoul National University, Korea, 2017.10;39-57.
2. Fukui C, Yokouchi N, Kim T, Nakano K, Kim K, Yamaguchi G, Fujita A, Suzawa S, Baba A, Sumikawa Y, Park H, Kimata M, Murayama H, Sugawara I. Obstacles to Aging in Place in Japan: A Preliminary Study. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, Tokyo, Japan, 2017. 11. 9-11.

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 朴孝淑. [判例評釈] Chubb 損害保険事件 (東京地裁平 29・5・31 判決労判 1166 号 42 頁), 東京大学労働判例研究会, 2018.3.2.
2. 朴孝淑. 韓国の特殊形態勤労従事者に対する社会的保護—産業災害補償保険法 125 条 (特例規定) を素材に. 財団法人労働問題リサーチセンター研究会, 東京, 2017.2.6.

### ■ 西野亜希子 (特任助教)

#### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 男女共同参画学協会連絡会: 第四回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査 解析報告書. 2017.8.
2. 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 松本博成, 田中友規, 谷口紗貴子, 金ギョンミン, 高田遼介, 三浦貴大, 西野亜希子, 西出和彦, 大月敏雄, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 地域や自宅における在宅高齢者の転倒事例に基づく建築的な転倒予防対策. 日本転倒予防学会第 4 回学術集会, 盛岡, 2017.10.8. 査読有
3. 内山瑛美子, 孫輔卿, 今枝秀二郎, 田中友規, 松本博成, 森田光治良, Suthutvoravut Unyaporn, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方

潤一郎. 大腿骨近位部骨折により入院した患者への聞き取り調査による転倒実態調査. 日本転倒予防学会第4回学術集会, 盛岡, 2017.10.8. [査読有](#)

4. Suthutvoravut Unyaporn, 孫輔卿, 田中友規, 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 松本博成, 森田光治良, 松原全宏, [西野亜希子](#), 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢. 転倒に伴う大腿骨近位部骨折により入院した高齢患者の特徴: 服用薬物・合併症・ロコモティブシンドロームの観点から. 日本転倒予防学会第4回学術集会, 盛岡, 2017.10.8. [査読有](#)
5. 金晃敏, [西野亜希子](#), 大月敏雄, 西出和彦. 通所介護と訪問介護の利用実態からみる高齢者の生活圏域に関する研究—地理情報システムを用いた柏市の介護給付明細データの分析—. 日本建築学会住宅系研究報告会論文, Vol.12, pp.7-14, 2017.12. [査読有](#)
6. 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, 金ギョンミン, 長木美緒, 高田遼介, 三浦貴大, 孫輔卿, [西野亜希子](#), 田中敏明, 飯島勝矢, 西出和彦, 大月敏雄. 在宅高齢者の転倒実態調査に基づく転倒プロセスのモデル化—文京区・横浜市・柏市を対象とした調査研究—. 日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, 2017;12:217-226. [査読有](#)

#### 【著書, 編著】

1. (共著) [西野亜希子](#): 「4-2 イギリスの福祉転用を支える組織」, 森一彦ほか『福祉転用による建築・地域のリノベーション 成功事例で読みとく企画・設計・運営』, 学芸出版, pp120-122, 2018.3.

#### 【国際会議における発表】

1. Yoshida K, Tobimatsu T, Nasu T, Takada R, Saisho S, [Nishino A](#), Okata J. Appropriate house modification manual for elderly living home with frail. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.9-11.

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [西野亜希子](#), 長木美緒, 大月敏雄, 西出和彦. ドイツの住宅改修への建築専門職をサポートする仕組みに関する研究. 日本建築学会学術講演梗概集, pp1037-1038, 2017.7.
2. 長木美緒, [西野亜希子](#), 大月敏雄, 西出和彦. 団地の建替えがコミュニティ形成を促す場を与える影響について—T団地における商店街と外出行為に着目して—. 日本建築学会学術講演梗概集, pp 1067-1068, 2017.7.
3. 三浦貴大, 新雅史, 祐成保志, 三浦倫平, [西野亜希子](#), 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎. ヒビトル: 経験サンプリング法に基づく高齢者のための日常生活記録アプリケーション. 第43回感覚代行シンポジウム講演論文集 (東京), pp43-46, 2017.12.

#### ■ 藤崎万裕 (特任助教)

##### 【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Takashi Naruse, [Mahiro Fujisaki-Sakai](#), Satoko Nagata. Home visiting nurse service duration and factors related to institution admission. Home health care management & prac-

- tice, 2017;29(1):46-52. [査読有](#)
2. Yamamoto N, Naruse T, [Sakai M](#), Nagata S. Relationship between maternal mindfulness and anxiety 1 month after childbirth. Japan Journal of Nursing Sciences, 2017;14(4):267-276. [査読有](#)
  3. Naruse T, Matsumoto H, [Fujisaki-Sakai M](#), Nagata S. Measurement of Special Access to Home Visit Nursing Services among Japanese Disabled Elderly People: Using GIS and Claim data. BMC Health Services Research, 2017;17:377. [査読有](#)
  4. Naruse T, Yamamoto N, Sugimoto T, [Fujisaki-Sakai M](#), Nagata S. The association between nurses' coordination with physicians and clients' place of death. International Journal of Palliative Nursing, 2017;23 (3). [査読有](#)
  5. 高橋競, 田中友規, Unyaporn Suthutvoravut, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 栄養(食・口腔機能)・運動・社会参加の包括的フレイルチェックによる高齢者の行動変容に関する質的研究. 日本未病システム学会雑誌. (印刷中) [査読有](#)

#### 【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 藤崎万裕, 飯島勝矢. 全国で一斉に推し進めよう! フレイル予防のまちづくり. 保健師ジャーナル, 2018;74(2):92-97.

#### 【著書, 編著】

1. 藤崎万裕, 飯島勝矢. IX. 認知症患者とその家族を支える社会支援体制 7. 公的介護保険の上手な利用法. 実地診療のための最新認知症学: 検査・治療・予防・支援. 日本臨牀, 2018;76 (増刊号 1):435-441.

#### 【国際会議における発表】

1. Suthutvoravut U, Tanaka T, Takahashi K, Yoshizawa Y, [Fujisaki M](#), Akishita M, Iijima K. Eating alone combined with living status is associated with frailty and its domains in community-dwelling older adults: Kashiwa study. 3rd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, South Korea, 2017.10.27-28. [査読有](#)
2. Tanaka T, Takahashi K, Suthutvoravut U, [Fujisaki M](#), Yoshizawa Y, Masahiro Akishita M, Iijima K. Overlapping of social and physical frailties strongly increase the risk for all-cause mortality among community-dwelling older adults: Findings from the Kashiwa study. 3rd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, South Korea, 2017.10.27-28. [査読有](#)
3. Tanaka T, Takahashi K, Suthutvoravut U, [Fujisaki M](#), Yoshizawa Y, Masahiro Akishita M, Iijima K. Social Frailty: A Most Important Risk Factor of Frailty and Sarcopenia in Community-Dwelling Elderly. The 21st IAGG World Congress, San Francisco, California, 2017.7.23-27. [査読有](#)
4. Suthutvoravut U, Tanaka T, Takahashi K, Yoshizawa Y, [Fujisaki M](#), Akishita M, Iijima



K. Frequency of food groups consumption is related with frailty in community-dwelling elderly: from Kashiwa study. The 21st IAGG World Congress, San Francisco, California. 2017.7.23-27. [査読有](#)

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [藤崎万裕](#), 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 住民によるフレイル予防活動：フレイル予防サポーターの属性と活動参加動機. 第82回日本健康学会(旧称：日本民族衛生学会)総会, 沖縄, 2017.11.10-11. [査読有](#)
2. 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 高橋競, [藤崎万裕](#), 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』は要介護認定リスクを高める：柏スタディー. 第1回日本老年薬学会学術集会, 東京, 2017.5.14. [査読有](#)
3. Suthutvoravut Unyaporn, 田中友規, 高橋競, [藤崎万裕](#), 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者における『多剤併用 (Polypharmacy)』とフレイルの関連：柏スタディー. 第1回日本老年薬学会学術集会, 東京, 2017.5.14. [査読有](#)
4. 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, [藤崎万裕](#), 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. コグニティブフレイルは主観的 Well-being の低下と要介護認定リスクを高める—柏スタディーより—. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.5.14-16. [査読有](#)
5. Suthutvoravut Unyaporn, 田中友規, 高橋競, 吉澤裕世, [藤崎万裕](#), 秋下雅弘, 飯島勝矢. Association of food-related behaviors and frailty: from Kashiwa study. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.5.14-16. [査読有](#)
6. 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, [藤崎万裕](#), Suthutvoravut Unyaporn, 飯島勝矢. 様々な身体活動や社会活動の重複実施はフレイルへのリスクを軽減する—柏データベースからの考察—. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.5.14-16. [査読有](#)
7. 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, [藤崎万裕](#), 飯島勝矢. 地域在住高齢者のソーシャルキャピタル低下にロコモティブシンドロームが及ぼす影響—柏スタディーより—. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.5.14-16. [査読有](#)
8. 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, [藤崎万裕](#), 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 認知的フレイルは主観的 Well-being の低下, 要介護認定リスクを高める：身体的フレイルとの比較から. 第59回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2017.5.14-16. [査読有](#)
9. 山本なつ紀, 成瀬昂, [松本博成](#), [藤崎万裕](#), 永田智子. 「利用者の安全に関わる出来事」に対する訪問看護師の認識と判断. 日本地域看護学会第20回学術集会, 別府, 2017.8.5-6. [査読有](#)
10. 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, [藤崎万裕](#), 飯島勝矢. ロコモティブシンドローム予防を目的とした自主グループ活動参加の効果. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会, 京都, 2017.10.14-15. [査読有](#)
11. 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, [藤崎万裕](#), 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 身体的フレイルに社会的フレイルが重複して初めて総死亡リスクが高まる—柏スタディーより—.

- 第4回日本サルコペニア・フレイル学会，京都，2017.10.14-15. 査読有
12. Suthutvoravut Unyaporn, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者における孤食とフレイルの関連：柏スタディー. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会，京都，2017.10.14-15. 査読有
13. 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, Suthutvoravut Unyaporn, 飯島勝矢. 生活圏域における地域活動が地域レベル及び個人レベルのフレイルに及ぼす影響. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会，京都，2017.10.14-15. 査読有
14. 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 栄養（食・口腔機能）・運動・社会参加の包括的フレイルチェックによる参加者の意識・行動変容への効果. 第24回日本未病システム学会学術総会，横浜，2017.11.4-5. 査読有
15. 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 異性間交流が豊富な高齢女性はサルコペニア有症率が低い—柏スタディーより—. 第24回日本未病システム学会学術総会，横浜，2017.11.4-5. 査読有
16. Suthutvoravut Unyaporn, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 同居家族がいるのにも関わらず孤食の地域高齢者は日常的な孤独感を感じやすい—柏スタディー—. 第24回日本未病システム学会学術総会，横浜，2017.11.4-5. 査読有
17. 藤崎万裕. 研究報告「フレイル予防サポーターの活動参加動機と，地域（コミュニティ）への波及効果」. 柏市フレイル予防2025PJ会議，千葉，2017.11.16.

## ■ 税所真也（特任助教）

### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 税所真也. 社会学から見た成年後見制度の運用と展開，その影響. 石川県成年後見制度連絡協議会（金沢弁護士会，リーガルサポート石川，ばあとなあ石川，北陸税理士会，石川県行政書士会，家庭裁判所，金沢権利擁護センターほか）主催，平成30年新春セミナー，金沢，2018.（招待：基調講演）
2. 税所真也. 市民後見に関するこれまでの流れとこれからの役割. 地域包括支援センター社会福祉士部会研修会主催，茅ヶ崎市福祉政策課・高齢福祉介護課・茅ヶ崎市社会福祉協議会共催，平成29年度 地域包括支援センター社会福祉士部会研修会，茅ヶ崎，2018.（招待：基調講演）
3. 税所真也. ケアを通じた財産管理の社会化——成年後見制度の利用の広がりのなかで. 第90回日本社会学会大会，東京，2017.
4. 税所真也. 成年後見と自己決定——生協の意思決定支援：システムへの期待. 福祉クラブ生協成年後見サポートワーカーズコレクティブあうん理事総会，横浜，2017.（招待：基調講演）

## 2. 受賞歴

### ■ 村山洋史（特任講師）

1. 「第76回日本公衆衛生学会総会示説（ポスター）賞」（村山幸子，倉岡正高，野中久美子，田中元基，根本裕太，安永正史，小林江里香，村山洋史，藤原佳典．児童・生徒の挨拶習慣が居住地の暮らしやすさと援助行動へ及ぼす影響）2017.10.

### ■ 三浦貴大（特任助教）

1. 「ライフサポート学会フロンティア講演会 奨励賞」（安藤玄太郎，松尾政輝，三浦貴大，坂尻正次，大西淳児，小野東．弱視者のためのバーチャルミュージアムの構築）2018.3.

### ■ 藤崎万裕（特任助教）

1. 「第1回日本老年薬学会学術集会最優秀演題賞」（田中友規，Suthutvoravut Unyaporn，高橋競，藤崎万裕，吉澤裕世，秋下雅弘，飯島勝矢．地域高齢者の『多剤併用（Polypharmacy）』は要介護認定リスクを高める：柏スタディー）2017.5.
2. 「第59回日本老年医学会学術集会最優秀演題賞」（田中友規，高橋競，Suthutvoravut Unyaporn，藤崎万裕，吉澤裕世，秋下雅弘，飯島勝矢．認知的フレイルは主観的 Well-being の低下，要介護認定リスクを高める：身体的フレイルとの比較から）2017.11.

### ■ 税所真也（特任助教）

1. 「日本保険学会第72回全国大会ポスター優秀発表賞」（税所真也．成年後見の社会化に関する研究——生命保険会社における成年後見制度の位置づけとそのあり方）2017.10.
2. 「第4回福祉社会学会奨励賞」（税所真也．「成年後見の社会化」からみるケアの社会化——士業専門職化がおよぼす家族への影響）2017.5.

### 3. コース生による研究成果

#### 【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- ・ 麦山亮太, 西澤和也. 大企業と中小企業が新卒者に求める能力は異なるか：求人情報サイトへのトピックモデルの適用. 理論と方法, 2017;32(2):214-227. [査読有](#)
- ・ 麦山亮太. 職業経歴と結婚への移行：職種・企業規模・雇用形態と地位変化の効果における男女差. 家族社会学研究. 2017;29(2):129-141. [査読有](#)
- ・ 麦山亮太. キャリアの中断が生み出す格差：正規雇用獲得への持続的影響に着目して. 社会学評論. 2017;68(2):248-264. [査読有](#)
- ・ 松田弥花. スウェーデンにおける子ども・若者を対象としたアウトリーチ事業：「フィールドワーカー」に着目して. 日本の社会教育, 2017;61:124-133. [査読有](#)
- ・ 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, 金ギョンミン, 長木美緒, 高田遼介, 三浦貴大, 孫輔卿, 西野亜希子, 田中敏明, 飯島勝矢, 西出和彦, 大月敏雄. 在宅高齢者の転倒実態調査に基づく転倒プロセスのモデル化—文京区・横浜市・柏市を対象とした調査研究—. 日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, 2017;12:217-226. [査読有](#)
- ・ 粟島靖之, 小松廉, 藤井浩光, 田村雄介, 山下淳, 浅間一. ロボット遠隔操作のためのLiDARを用いた全方位3次元測距による俯瞰映像上での障害物提示. 精密工学会誌, 2017;83(12):1216-1223. [査読有](#)
- ・ 今枝秀二郎, 西出和彦. 在宅高齢者の転倒実態に基づく転倒メカニズムのモデル化—文京区・横浜市・柏市を対象とした調査研究—. 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.623-624, 2017.9.
- ・ 金晃敏, 西野亜希子, 大月敏雄, 西出和彦：通所介護と訪問介護の利用実態からみる高齢者の生活圏域に関する研究—地理情報システムを用いた柏市の介護給付明細データの分析—, 日本建築学会住宅系研究報告会論文, Vol.12, pp.7-14, 2017.12 [査読有](#)
- ・ 高田遼介, 西出和彦. 高校と連携した学習塾に対して高校生が求める場としての役割に関する研究—O 学習塾の事例に基づいて—. 日本建築学会大会学術講演会研究発表, 2017 年度：121-122.
- ・ 麦山亮太. 職業経歴の影響にみる高齢層の経済格差：所得と資産の規定要因に関する男女比較から. 阪口祐介（編）. 2015 年 SSM 調査シリーズ 6 労働市場 1. 2015 年 SSM 調査研究会, 2018;1-27.
- ・ 稲吉玲美, 勝又結菜, 馬場絢子, 本田由美, 高橋美保. 臨床場面におけるマインドフルネスの活用に関する課題と今後の展望：セラピスト自身の実践体験から個人面接への導入へ. 東京

大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2018;41. (印刷中)

- ・ 石黒香苗, 本田由美, 稲吉玲美, 勝又結菜, 野村佳申, 馬場絢子, 加藤明日花, 北中眞貴, 高橋美保. 心理援助機関における面接経過と終了に関する量的分析: 東京大学大学院附属心理教育相談室のデータから. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2018;41. (印刷中)
- ・ 松田弥花, 是永かな子. スウェーデンの障害児者に対する学校教育と社会教育の教育課程の接続. 高知大学教育学部研究報告, 2018;78:365-377.
- ・ 松田弥花, 是永かな子. スウェーデンにおける障害児者を対象とした学校教育と社会教育における専門家の支援: 自立支援の観点から. 高知大学教育実践研究, 2018;32. (印刷中)
- ・ Naruse T, Matsumoto H, Fujisaki-Sakai M, Satoko Nagata. Measurement of Special Access to Home Visit Nursing Services among Japanese Disabled Elderly People: Using GIS and Claim data. BMC Health Services Research, 2017;17:377. [査読有](#)
- ・ Fukui C, Sakka M, Amiya RM, Sato I, Kamibeppu K. Validation of family conflict scales for family caregivers of persons with dementia in long-term care facilities and exploration of family conflicts and support. International Psychogeriatrics, 2017 Nov 8:1-11. doi: 10.1017/S1041610217002356. [Epub ahead of print] [査読有](#)
- ・ Kameda K., Wakatsuki M., Kuroyanagi K., Iwase F., Shima T., Kondo T., Asai Y., Koreta Y., Takase M. and Kamezaki N. Change in population structure, growth and mortality rate of juvenile green turtle (*Chenolia mydas*) after the decline of sea turtle fishery in Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago. Marine Biology. 2017;164 (6). [査読有](#)
- ・ Nakagawa Y, Ohta S, Sugahara A, Okubo M, Yamada A, Ito T. In Vivo Redox-Responsive Sol-Gel/Gel-Sol Transition of Star Block Copolymer Solution Based on Ionic Cross-Linking. Macromolecules, 2017;50(14):5539-5548. [査読有](#)
- ・ Nakagawa Y, Ohta S, Nakamura M, Ito T. 3D inkjet printing of star block copolymer hydrogels cross-linked using various metallic ions. RSC Advances, 2017;7:55571-55576. [査読有](#)
- ・ Goto T, Nakagami G, Takehara K, et al. Examining the accuracy of visual diagnosis of tinea pedis and tinea unguium in aged care facilities. J Wound Care. 2017;26 (4):179-183. [査読有](#)
- ・ Goto T, Nakagami G, Nakai A, et al. Utility of a three-dimensional wound measurement device in pressure ulcers. Chronic Wound Care Manag Res. 2017;4:129-133. [査読有](#)
- ・ Tanaka T, Takahashi K, Hirano H, Kikutani T, Watanabe Y, Ohara Y, Furuya H, Tsuji T, Akishita M, Iijima K. Oral Frailty as a Risk Factor for Physical Frailty and Mortality in Community-Dwelling Elderly. J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2017;doi:10.1093/gerona/glx225. (in press) [査読有](#)

- Uchiyama E, Tanaka T, Mino T, Iijima K, Takano W, Nakamura Y. Comparing clinical evaluation method and machine learning method based on motion capture data for locomotive syndrome of elderly people. *Robomech*2017. doi:10.1299/jsmermd.2017.2P2-L11. [査読有](#)
- Yasuhara A, Yamayoshi S, Soni P, Takenaga T, Kawakami C, Takashita E, Sakai-Tagawa Y, Uraki R, Ito M, Iwatsuki-Horimoto K, Sasaki T, Ikuta K, Yamada S, and Kawaoka Y. Diversity of antigenic mutants of influenza A (H1N1) pdm09 virus escaped from human monoclonal antibodies. *Scientific Reports*, 2017;7(1):17735. [査読有](#)
- Shinozaki N, Murakami K, Asakura K, Uechi K, Kobayashi S, Masayasu S, Sasaki S. Dietary phosphorus intake estimated by 4-day dietary records and two 24-hour urine collections and their associated factors in Japanese adults. *European Journal of Clinical Nutrition*, 2018; Mar 2. doi: 10.1038/s41430-018-0114-1. [Epub ahead of print] [査読有](#)
- Horinuki F, Noguchi-Watanabe M, Takai Y, Yamahana R, Ohno N, Okada S, Mori S, Yamamoto-Mitani N. The experience of persons with hematological malignancy when communicating with health care professionals. *Qualitative Health Research*, 2018;28(3):479–490. [査読有](#)
- Takase M and Ushio. H. Changes in Intestinal Gene Expression of Zebrafish (*Danio rerio*) Related to Sterol Uptake and Excretion upon  $\beta$ -Sitosterol Administration. *Fishes*. 2018;3(1), 1–9. [査読有](#)
- Sun Y, Carandang RR, Harada Y, Okada S, Yoshitake K, Asakawa S, Nogi Y, Matsunaga S, Takada K. Lactomycins A-C, Dephosphorylated Phoslactomycin Derivatives that Inhibit Cathepsin B, from the Marine-Derived *Streptomyces* sp. ACT232. *Marine Drugs*, 2018;16(2), 70;doi:10.3390/md16020070. [査読有](#)
- Haseda M, Kondo N, Ashida T, Tani Y, Takagi D, Kondo K. Community Social Capital, Built Environment, and Income-Based Inequality in Depressive Symptoms Among Older People in Japan: An Ecological Study From the JAGES Project. *Journal of Epidemiology*, 2018;28(3):108–116. [査読有](#)
- Saito J, Kondo N, Saito M, Tabuchi T, Takagi D, Haseda M, Tani Y, Kondo K. Exploring 2.5-year trajectories of functional decline in older adults by applying a growth mixture model and the frequency of outings as a predictor:2010–2013 JAGES longitudinal study. *Journal of Epidemiology*, in press. [査読有](#)
- Amano Y, Nakagawa Y, Ohta S, Ito T. Ion-responsive fluorescence resonance energy transfer between grafted polyacrylic acid arms of star block copolymers. *Polymer*, 2018; 137:169–172. [査読有](#)
- Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, Tsuji T, Iijima K. “Yubi-wakka” (finger-ring) test:

A practical self-screening method for sarcopenia and a predictor of disability and mortality among Japanese community-dwelling elderly. *Geriatr Gerontol Int.* 2018;18(2): 224-232. [査読有](#)

- Kogami H, An Q, [Yang N](#), Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H, Shimoda S, Yamasaki H, Itkonen M, Alnajjar F, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fuji T, Otomune H, Miyai I. Effect of Physical Therapy on Muscle Synergy Structure During Standing-Up Motion of Hemiplegic Patients. *IEEE Robotics and Automation Letters*, Brisbane, Australia, 2018;3(3):2229-2236. [査読有](#)
- [Kamesawa A](#), [Yoshizaki R](#), [Hirose S](#), Miura T. Acceptance and practical use of support systems for frail seniors and caretakers: Interview surveys on a nursing home. *Proc HCI International 2018*;15 pages (to Appear). [査読有](#)
- [Yoshinaga H](#), Ushio H, Haga Y, Satoh S. Pre-harvest Modulation of N-3 Long-chain Polyunsaturated Fatty Acids in Rainbow Trout Meat for Human Consumption. *J Food Process Technol* 2018;9:716. [査読有](#)

#### 【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

- [長谷田真帆](#). 社会的背景が複雑な患者への対応～健康の社会的決定要因を診療に活かそう～. レジデントノート増刊「さらにうまくいく！入院患者管理パーフェクト2」, 羊土社, 2017; (16) 5:211-216.
- [田中友規](#), 秋下雅弘, 飯島勝矢. 医療現場にてフレイルやサルコペニアを評価する意義と簡易評価法. *メジカルビュー月刊「Heart View」*, 2017;21(6):8-14.
- [三道ひかり](#). 人に寄り添う音楽療法, そして終末期医療とは: Coda de Musica 心に響く音楽療法. *公衆衛生*, 医学書院, 2018;82(1):80-83.
- [三道ひかり](#). 音楽と“今” 出会う時とは?—アマンダとローズ—: Coda de Musica 心に響く音楽療法. *公衆衛生*, 医学書院, 2018;82(2):168-171.
- [三道ひかり](#). 最後まで自分らしく生きるためには?—エミリーが見た光—: Coda de Musica 心に響く音楽療法. *公衆衛生*, 医学書院, 2018;82(3):253-255.
- [三道ひかり](#). 愛する家族の最後に何を贈りたいですか?: Coda de Musica 心に響く音楽療法. *公衆衛生*. 医学書院, 2018;82(4):330-333.
- [田中友規](#), 飯島勝矢. オーラルフレイルの位置づけと歯科医療②—フレイルとサルコペニアに対する効果的な介入とは? *日本歯科評論*, 2018;904;78(2).
- [田中友規](#). プロからプロへ: コミュニティで実践するフレイル予防のポイントは? 【自治体, 産業, 当事者の連携による日常生活に根付いた予防をめざす. *日本医事新報*, 2018;4849:54.

#### 【著書，編著】

- [田中友規](#), 飯島勝矢. 多職種連携—地域包括ケアシステムの事例. *サルコペニアがいろん. ライフサイエンス選書*, 2017:pp. 96-97.

- ・ 田中友規, 飯島勝矢. 地域連携：予防プログラム・セルフチェック法. ライフサイエンス選書, 2017:pp. 98-99.
- ・ 田中友規, 高橋競, 飯島勝矢. 市民啓発：笑いの効果・サロンづくり. ライフサイエンス選書, 2017:pp. 100-103.
- ・ 田中友規. サルコペニア診療ガイドライン作成委員会. サルコペニア診療ガイドライン 2017年版, 日本サルコペニア・フレイル学会・国立長寿医療研究センター, 2017.
- ・ 田中友規. 神奈川県オーラルフレイルプロジェクトチーム. オーラルフレイルンドブック第1版, 一般社団法人神奈川県歯科医師会, 2017. 査読有

#### 【国際会議における発表】

- ・ Moriizumi H, Nakamura T, Takekawa M. Functional analysis of feedback- phosphorylation of MKK4 by MAPKs. AACR Annual Meeting 2017, Washington D.C. USA, 2017.4.1-5. 査読有
- ・ Yamaguchi G, Kume T, Mimura H. Fabrication of Ellipsoidal Mirror by Cu Electroforming. International Conference on X-ray Optics and Applications 2017, p. 8-13, Yokohama, Japan, 2017.4.18-21.
- ・ Matsumoto H, Igarashi A, Aoki S, Aburayama K, Yasui H, Suzuki M, Murata S, Hamada T, Yamamoto-Mitani N. Development of a dementia-friendly community program featuring convenience stores. 32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan, 2017.4.26-29. 査読有
- ・ Iijima K, Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, Tsuji T. “Yubi-wakka (Finger-ring) test”: Development of simple self-screening method for sarcopenia and its valuable usefulness. 7th International Conference on Frailty and Sarcopenia Research (ICFSR), Barcelona, Spain, 2017.4.28. 査読有
- ・ WANG Tiantian. The Formation of Suburban Residential Area in Chinese Cities from a Life-course Perspective: A Case Study of Huilongguan Complex, Beijing. Association of American Geographers (AAG) 2017 Annual Meeting, Boston, USA, 2017.4.
- ・ Iijima K, Tanaka T, Takahashi T, Hirano H, Kikutani T, Furuya H, Tsuji T. Strong association between declines in oral functions and sarcopenia among Japanese community-dwelling elderly in Kashiwa study: Designing a new concept ‘Oral Frailty’. the American Geriatrics Society 2017, San Antonio, Texas, 2017.5.18-20. 査読有
- ・ Mikoshiba N, Okada H, Morita T, Kizawa Y. Characteristics of Advance Care Planning Conversation with Trained Facilitators in Japan. The 6<sup>th</sup> International Conference on Advance Care Planning and End of Life Care, Banf, Alberta, Canada, 2017.6.9-10. 査読有
- ・ Okatani T, Nakai A, Takahata T, Shimoyama I. A MEMS slip sensor: estimations of tri-axial force and coefficient of static friction for prediction of a slip. *The 19th Internation-*



*al Conference on Solid-State Sensors, Actuators and Microsystems (TRANSDUCERS2017)* , Kaohsiung, Taiwan, 2017 6.18–22. [査読有](#)

- Obitsu A, Matsuura Y, [Sandhu H](#). Analysis of music therapists in an interdisciplinary team in nursing homes. The 15<sup>th</sup> World Congress of Music Therapy, Tsukuba, Japan, 2017.7.7. [査読有](#)
- Tang J, Rivera L. A, [Sandhu H](#), Shiokawa K, Tse S, Chik D, Low M, Lin Y. Experiences as a Student Overseas and a Professional Back Home. The 15<sup>th</sup> World Congress of Music Therapy, Tsukuba, Japan, 2017.7.7. [査読有](#)
- [A. Fujiwara](#), K. Murakami, K. Asakura, K. Uechi, S. Masayasu and S. Sasaki: Estimation of total, added and free sugar intakes in Japanese adults using a newly developed food composition database. Nutrition Society Summer Conference 2017: Improving nutrition in metropolitan areas. London, UK, 2017. 7.10–12. [査読有](#)
- Kodama Y, Fukahori H, [Ishii A](#), Yamamoto-Mitani N. Preference, knowledge and education on pain management among interdisciplinary healthcare university students. The 21th IAGG, San Francisco, California, 2017.7.23–27. [査読有](#)
- [Fukui C](#), Sakka M, Amiya RM, Sato I, Kamibeppu K. Family caregiver conflicts and support of people with dementia in long-term facilities. The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, USA, 2017.7.23–27. [査読有](#)
- [Tanaka T](#), Takahashi K, [Suthutvoravut U](#), Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K. SOCIAL FRAILITY: A most important risk factor of frailty and sarcopenia in Japanese community-dwelling older adults. The 21st International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, USA, 2017.7.23–27. [査読有](#)
- Iijima K, Kuroda A, [Tanaka T](#), Takahashi K, Akishita M, Tsuji T. Impact of Social Disengagement on Physical Performance in Japanese Community-Dwelling Elderly Study. The 21st International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, USA, 2017.7.23–27. [査読有](#)
- [Suthutvoravut U](#), [Tanaka T](#), Takahashi K, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K. Frequency of food groups consumption is related with frailty in community-dwelling elderly: from Kashiwa study. The 21st International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) World Congress of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, USA, 2017.7.23–27. [査読有](#)
- [Haseda M](#), Kondo N, Kondo K. Effectiveness of supporting municipality staffs for data-oriented cross-sectoral collaborations on their job performances: JAGES Action Study Unit. Symposium19: Causal Inferences using natural experimental studies to face current

public health challenges, The 21st World Congress of Epidemiology, International Epidemiological Association, Omiya, Japan, 2017.8.19–22. [査読有](#)

- [Haseda M](#), Kondo N, Saito J, Takagi D, Tani Y, Kondo K. The benefit of having primary care physicians for maintaining activities of daily living: JAGES longitudinal study. The 21st World Congress of Epidemiology, International Epidemiological Association, Omiya, Japan, 2017.8.19–22. [査読有](#)
- Saito J, Kondo N, Saito M, Takagi D, Tani Y, [Haseda M](#), Tabuchi T, Kondo K. Low frequency of leaving home as a predictor of future trajectories of functional disability among older adults in Japan: the JAGES cohort study. The 21st World Congress of Epidemiology, International Epidemiological Association, Omiya, Japan, 2017.8.19–22. [査読有](#)
- [WANG Tiantian](#). Social Mobility and the Formation of Suburban Residential Area in Chinese Cities: A Case Study of Beijing. 12th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography, Jeju Island, Korea, 2017.8.
- [Yoshida K](#), [Tobimatsu T](#), [Nasu T](#), [Takada R](#), Nishino A, Saisho S, Okata J. Appropriate house modification manual for elderly living home with frail. APRU Aging Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.9.9.
- [Carandang RR](#). Filipino elderly: valued or neglected? University of Tokyo - Mahidol University Research Symposium, Tokyo, 2017.9.12.
- [Takase M](#), and Ushio H. The effect of phytosterol on FXR functions in fish. 85<sup>th</sup> Annual International Symposium. “Fisheries Science for Future Generations”, Tokyo, Japan, 2017. 9.22–24.
- [Miyabe T](#). The Role and the Contribution of Religion in Hyper-Aged Society: Focus on the Religious Network in the Local Community. Emerging Researchers Conference “Demography, Ageing and Health”, Oxford, United Kingdom, 2017.9.26.
- [Suthutvoravut U](#). Association of ‘Eating alone’ with body weight status and frequency of food group intake: from Kashiwa study. Emerging Researchers Conference, Oxford, UK, 2017.9.26–28.
- [Tanaka T](#), Takahashi K, [Suthutvoravut U](#), Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K. Overlapping of social and physical frailties strongly increase the risk for all-cause mortality among community-dwelling older adults: Findings from the Kashiwa study. 3rd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Seoul, Korea, 2017.10.27–28. [査読有](#)
- [Suthutvoravut U](#), [Tanaka T](#), Takahashi K, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K. Effect of Eating Alone despite Living with Others on Frailty and Its Domains in Community-Dwelling Older Adults: Kashiwa Study. 3rd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Seoul, Korea, 2017.10.27–28. [査読有](#)

- Kaneko K, Komazawa Y, Sakai E, Terazawa S, Yoshida S, Suto M, Matsuda Y, Doke M, Hamada T, Suthutvoravut U, Carandang RR, Miyabe T, Fujiwara A, Fukui C, Jin G, Masuda K, Sandhu H, Ogawa K, Kim H, Ogino R, Goto J. Development of methodology for creating social activities run by the elderly themselves. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017. 11. 9. 査読有
- Suzawa S, Yamaguchi G, Fujita A, Kim K, Baba A, Wang T, Haseda M, Mugiyama R, Ando E, Sakka M, Fukui Y, Kimata M, Sugawara I. Factors influencing a process for building intentions about a life of elderly people using home nursing care. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.9.
- Fukui C, Yokouchi N, Kim T, Nakano K, Kim K, Yamaguchi G, Fujita A, Suzawa S, Baba A, Sumikawa Y, Park H, Kimata M, Murayama H, Sugawara I. Obstacles of Aging in Place in Japan: A Preliminary Study. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.9.
- Komazawa Y, Suto M, Matsuda Y, Doke M, Suthutvoravut U, Carandang RR, Miyabe T, Fujiwara A, Fukui C, Sakai E, Terazawa S, Ogino R, Goto J. A process of neighborhood planning to create purpose in life for a longevity society: Formation of collective intention through workshops in Ohirayama, Kamakura city. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, Tokyo, Japan, 2017.11.9–11.
- Kamesawa A, Yoshizaki R, Hirose S, Shinozaki N, Komatsu R, Kitamura S, Fu O, Yang N, Ishii A, Sumikawa Y, Okatani T, Kaneko K, Nakagawa Y, Goto T, Miura T, Mori T, Ifukube T, Okata J. Acceptance and practical use of support systems for frail seniors and caretakers: Interview surveys on a nursing home. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.9–11.
- Carandang RR, Agustin D, Kutintara B, Laorinthong A, Hatanaka R. Cultivating a culture of “age-friendly” conduct among primary health care staff - A cross-cultural approach. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.9–11.
- Suzawa S, Yamaguchi G, Fujita A, Kim K, Baba A, Wang T, Haseda M, Mugiyama R, Ando E, Sakka M, Fukui Y, Kimata M, Sugawara I. Intention formation processes of elderly people requiring care -Focusing on human networks-. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists. The Association of Pacific Rim Universities (APRU), Tokyo, Japan, 2017.11.9–11.
- Uchiyama E, Suthutvoravut U, Imaeda S, Tanaka T, Son B, Matsubara T, Tanaka T, Otsuki T, Iijima K, Okata J. Physical and environmental characteristics of elderly fallers

with femoral neck fractures, APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.9–11.

- Komazawa Y, Kaneko K. Development of methodology for creating social activities run by the elderly themselves. APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists, Tokyo, Japan, 2017.11.10.
- Taniguchi S, Hanafusa M, Tsubone H, Yamanaka D, Ito K. Age-dependent alteration of oxidative stress and expression level of glutamate receptors in senescence-accelerated mouse prone 8. The 47th Annual Meeting of Society for Neuroscience, Washington, D.C., USA, 2017.11.11–15. 査読有
- Yamaguchi G, Kume T, Mimura H. Fabrication of Cu-electroformed Mirrors for X-ray Focusing. 7th International Conference of Asian Society for Precision Engineering and Nanotechnology, NTR-O-07, Seoul, Korea, 2017.11.14–17. 査読有
- Ishii A, Igarashi A, Morita K, Yasunaga H, Takemura Y, Yamamoto-Mitani N. The effects of nursing assistants on patient/nurse outcomes in Japanese neurosurgical wards: A nationwide survey. The 21st East Asian Forum of Nursing Scholars, 18–0586, Korea, 2018.1.11–12. 査読有
- Matsuda T, Kawano A, Eriksson L, Matsuda Y. Comparative Study of Social-Education and Work: Sweden, Uzbekistan and Japan. Social Pedagogy and Social Education Bridging Traditions and Innovations International Conference, Puebla, Mexico, 2018.2.22–24. 査読有
- Yasuhara A. Diversity of antigenic mutants of influenza A (H1N1) pdm09 virus escaped from human monoclonal antibodies. Keystone symposium “Antibodies as Drugs: Translating Molecules into Treatments”. Whistler, Canada, 2018.2.25–3.1. 査読有

#### 【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 内山瑛美子, 田中友規, 味野俊裕, 飯島勝矢, 高野渉, 中村仁彦. 高齢者のロコモティブシンドローム評価指標と実動作計測による身体機能評価の比較. ロボティクス・メカトロニクス講演会 2017, 郡山, 2017.5.10–13.
- 吉崎れいな, 舒利明, 山本江, 杉田直彦, 光石衛. カスタム人工膝関節全置換術のための筋骨格モデルに関する研究. ロボティクス・メカトロニクス講演会, 福島, 2017. 5.10–13.
- 長谷田真帆, 近藤尚己. かかりつけ医の有無で ADL の推移の仕方に差はあるか: JAGES 縦断調査より. 第 8 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 日本プライマリ・ケア連合学会, 高松, 2017.5.12–14. 査読有
- 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』は要介護認定リスクを高める: 柏スタディー. 第 1 回日本老年薬学会優秀演題候補セッション, 東京, 2017.5.14. 査読有

- ・ 中川慶之, 太田誠一, 中村真人, 伊藤大知. スターポリマー型イオン架橋性ゲルを用いたインクジェットバイオプリンティングの検討. 日本膜学会 39 年会, 東京, 2017.5.26-27. 査読有
- ・ 高瀬麻以, 阿部浩子, 上坂英二, 工藤正美, 中村岳雪, 丸山道生. 西東京市田無病院回復期リハビリテーション病棟入院患者における歩行機能改善群及び非改善群の特性比較. 第 9 回日本静脈経腸栄養学会 首都圏支部会学術集会, 横浜, 2017.5.27. 査読有
- ・ 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 地域在住高齢者における便秘とフレイルとの関連—千葉県柏市の高齢者大規模健康調査 (柏スタディ) より—. 第 30 回日本老年泌尿器科学会一般演題, 東京, 2017.6.9-10. 査読有
- ・ 阿部浩子, 高瀬麻以, 上坂英二, 丸山道生. 重症心身障害児 (者) の栄養アセスメント指標に関する検討, 第 40 回日本栄養アセスメント研究会, 福岡, 2017.6.9-10.
- ・ 五十嵐歩, 松本博成, 青木伸吾, 鈴木美穂, 油山敬子, 安井英人, 村田聡, 濱田貴之, 山本則子. 訪問介護サービスを利用する高齢者のコンビニエンスストア利用の実態. 第 59 回日本老年社会科学会, 名古屋, 名古屋国際会議場, 2017.6.14-16. 査読有
- ・ 田中友規, 高橋競, 平野浩彦, 菊谷武, 小原由紀, 古屋裕康, 辻哲夫, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 口腔機能低下の重複『オーラルフレイル』は要介護認定・総死亡リスクを高める—柏スタディより—. 第 30 回日本老年学会総会合同ポスター発表, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
- ・ 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 地域在住高齢者のソーシャルキャピタル低下にロコモティブシンドロームが及ぼす影響—柏スタディより—. 第 59 回日本老年医学会学術集会一般演題, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
- ・ Suthutvoravut U, Tanaka T, Takahashi K, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K. Association of food-related behaviors and frailty: from Kashiwa study. 第 59 回日本老年医学会学術集会一般演題, 名古屋, 2017.6.14-16. 査読有
- ・ 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. コグニティブフレイルは主観的 Well-being の低下と要介護認定リスクを高める—柏スタディより—. 第 59 回日本老年医学会学術集会優秀演題候補者セッション, 名古屋, 2017.6.15. 査読有
- ・ 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, Suthutvoravut Unyaporn, 飯島勝矢. 様々な身体活動や社会活動の重複実施はフレイルへのリスクを軽減する—柏データベースからの考察—. 第 59 回日本老年医学会学術集会一般演題, 名古屋, 2017.6.16. 査読有
- ・ 御子柴直子, 岡田宏子, 木澤義之. 人生の最終段階における医療にかかる相談員の研修会のプログラム評価～相談支援を受けた患者家族の体験に関する定性的評価～. 第 22 回日本緩和医療学会学術集会, 横浜, 2017.6.22-23. 査読有
- ・ 高瀬麻以, 阿部浩子, 上坂英二, 工藤正美, 中村岳雪, 丸山道生. 西東京市田無病院回復期リハビリテーション病棟入院患者の運動機能の変化と摂取タンパク質量に関するクラスタリング解析. 日本外科代謝栄養学会第 54 回学術集会, 新潟, 2017.7.6-7. 査読有

- ・ 山本なつ紀, 成瀬昂, 松本博成, 藤崎万裕, 永田智子. 「利用者の安全に関わる出来事」に対する訪問看護師の認識と判断. 日本地域看護学会第20回学術集会, 別府, 2017.8.5-6. 査読有
- ・ 中川慶之, 太田誠一, 伊藤大知. 酸化還元応答性鉄イオン架橋スターブロックコポリマーゲルの開発. 化学工学会東京大会2017, 東京, 2017.8.9-10. 査読有
- ・ 石井絢子, 五十嵐歩, 武村雪絵, 野口麻衣子, 山花令子, 國江慶子, 竹原君江, 市川奈央子, 横山麻美, 山本則子. 全国の脳神経外科病棟に勤務する看護補助者の個人特性と看護業務の実施状況の実態: 横断研究. 10340, 第21回日本看護管理学会学術集会, 横浜, 2017.8.19-20. 査読有
- ・ 谷口紗貴子, 伊藤公一. 海馬神経伝達に与えるバニリンの効果. 第12回遺伝子栄養学研究会学術集会, 北広島, 2017.8.25.
- ・ 中川慶之. バイオプリンティングへの応用を目指した新規イオン架橋性ゲルの開発. 材料化学システム工学討論会, 広島, 2017.8.29-30.
- ・ 須沢栞, 千野優斗, 井本佐保里, 大月敏雄. 学校の再開プロセスと建物形態福島第一原発事故における公立小中学校の再編プロセスに関する研究 その1. 日本建築学会大会学術講演会(中国), 広島, 2017.8.31-9.3.
- ・ 千野優斗, 須沢栞, 井本佐保里, 大月敏雄. 避難先学校における児童生徒数および施設整備手法の変化 福島第一原発事故における公立小中学校の再編プロセスに関する研究その2. 日本建築学会大会学術講演会(中国), 広島, 2017.8.31-9.3.
- ・ 馬場絢子. 介護期の親子関係における親イメージ: 介護関係移行反応尺度の開発. 日本家族心理学会第34回大会, 栃木, 2017.9.1-3. 査読有
- ・ 福井千絵, 目麻里子, 佐藤伊織, 上別府圭子. 認知症をもつ人の家族介護者と介護に関する意見の相違があった家族員の続柄と家族機能との関連. 第24回日本家族看護学会学術集会, 千葉, 2017.9.2-3. 査読有
- ・ 岡谷泰佐, 高畑智之, 下山勲. MEMS局所滑り覚センサを用いた二足歩行ロボット歩行中における滑りやすい路面と滑りにくい路面の判別. 第35回日本ロボット学会学術講演会, 2017.9.11-14.
- ・ 内山瑛美子, 味野俊裕, 田中友規, 飯島勝矢, 高野渉, 中村仁彦. 脳活動情報及び身体運動情報からの特徴量抽出による認知的フレイル評価に関する検討. 第35回日本ロボット学会学術講演会, 川越, 2017.9.12-14.
- ・ 藤原綾, 政安静子, 佐々木敏. 食品中糖類含有量データベース構築と日本人成人の糖類摂取量推定. 第64回日本栄養改善学会, 徳島, 2017.9.13-15. 査読有
- ・ 谷口紗貴子, 田邊築, 小倉基嗣, 山中大介, 伊藤公一. 高血圧自然発症ラットにおける海馬CA1シナプス機能の電気生理学的解析. 第160回日本獣医学会学術集会, 鹿児島, 2017.9.13-15.
- ・ 田邊築, 谷口紗貴子, 小倉基嗣, 山中大介, 伊藤公一. アダルトラットの記憶学習能における

- フェルラ酸長期投与の効果について. 第 160 回日本獣医学会学術集会, 鹿児島, 2017.9.13-15.
- ・ 金子和樹, 木下裕介, 梅田靖. 事例分析に基づく個人化設計の枠組みの提案. 日本機械学会 第 27 回設計工学・システム部門講演会, 下関, 2017.9.13-15.
  - ・ 上柳菜摘, 北村智美, 上羽瑠美, 岡田美紀, 荻野亜希子, 鈴木樹美, 森浩美. 嚥下調査票を用いた摂食嚥下障害予測評価と嚥下機能検査結果の一致率の比較検討. 第 23 回摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 千葉, 2017.9.15. 査読有
  - ・ 上柳菜摘, 北村智美, 上羽瑠美, 岡田美紀, 荻野亜希子, 鈴木樹美, 森浩美. 嚥下調査票を用いた摂食嚥下に関する患者情報収集の検討. 第 23 回摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 千葉, 2017.9.15. 査読有
  - ・ 小川景司, 八木洋憲. 政策的環境保全型農業の普及条件—滋賀県甲賀地域の水稲作における経営対応の実態分析—. 平成 29 年度日本農業経営学会研究大会, 福岡, 2017.9.16.
  - ・ 中川慶之, 太田誠一, 伊藤大知. イオン架橋性トリブロックコポリマーゲルの開発. 化学工学会第 49 回秋季大会, 名古屋, 2017.9.20-22. 査読有
  - ・ Yoshinaga H, Kabeya N, Ushio H, Haga Y, Satoh S. Effects of dietary amino acids-imbalance lysine-deficient diet on lipid metabolism in fish. 日本水産学会創立 85 周年国際シンポジウム, 東京, 2017.9.22-24.
  - ・ Moriizumi H, Nakamura T, Takekawa M. Functional analysis of feedback-phosphorylation of MKK4 by MAPKs. 第 76 回日本癌学会学術総会, 横浜, 2017.9.28-30. 査読有
  - ・ 麦山亮太. 雇用の安定性にみる離職経験後のキャリア形成: 2015 年 SSM 調査データを用いて. 第 64 回数理社会学会大会, 札幌, 2017.9.
  - ・ 麦山亮太. 失業率と離婚率の関係とその趨勢: 1950-2015 年都道府県パネルデータを用いた分析. 第 27 回日本家族社会学会大会, 京都, 2017.9.
  - ・ 豊永耕平, 麦山亮太. 学歴の経済的便益はコーホートによって異なるか?: SSM2005, 2015, JGSS2012 を用いた分析. 第 64 回数理社会学会大会, 札幌, 2017.9.
  - ・ 内山瑛美子, 孫輔卿, 今枝秀二郎, 田中友規, 松本博成, 森田光治良, Suthutvoravut Unyaporn, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 大腿骨近位部骨折により入院した患者への聞き取り調査による転倒実態調査. 日本転倒予防学会第 4 回学術集会一般演題, 岩手, 2017.10.7-8. 査読有
  - ・ Suthutvoravut Unyaporn, 孫輔卿, 田中友規, 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 松本博成, 森田光治良, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 転倒に伴う大腿骨近位部骨折により入院した高齢患者の特徴: 服用薬物・合併症・ロコモティブシンドロームの観点から. 日本転倒予防学会第 4 回学術集会一般演題, 岩手, 2017.10.7-8. 査読有
  - ・ 今枝秀二郎, 内山瑛美子, 孫輔卿, 田中友規, 松本博成, 森田光治良, Suthutvoravut Unyaporn, 松原全宏, 西野亜希子, 秋下雅弘, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方

- 潤一郎. 地域や自宅における在宅高齢者の転倒事例に基づく建築的な転倒予防対策. 日本転倒予防学会第4回学術集会一般演題, 岩手, 2017.10.7-8. [査読有](#)
- [内山瑛美子](#), [孫輔卿](#), [今枝秀二郎](#), [田中友規](#), [松本博成](#), [森田光治良](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [松原全宏](#), [西野亜希子](#), [秋下雅弘](#), [大月敏雄](#), [西出和彦](#), [田中敏明](#), [飯島勝矢](#), [大方潤一郎](#). 大腿骨近位部骨折により入院した患者への聞き取り調査による転倒実態調査. 日本転倒予防学会第4回学術集会, 盛岡, 2017.10.8. [査読有](#)
  - [今枝秀二郎](#), [孫輔卿](#), [内山瑛美子](#), [松本博成](#), [田中友規](#), [谷口紗貴子](#), [金ギョンミン](#), [高田遼介](#), [三浦貴大](#), [西野亜希子](#), [西出和彦](#), [大月敏雄](#), [田中敏明](#), [飯島勝矢](#), [大方潤一郎](#). 地域や自宅における在宅高齢者の転倒事例に基づく建築的な転倒予防対策. 日本転倒予防学会第4回学術集会, 盛岡, 2017.10.8. [査読有](#)
  - [Suthutvoravut Unyaporn](#), [孫輔卿](#), [田中友規](#), [今枝秀二郎](#), [内山瑛美子](#), [松本博成](#), [森田光治良](#), [松原全宏](#), [西野亜希子](#), [秋下雅弘](#), [大月敏雄](#), [西出和彦](#), [田中敏明](#), [飯島勝矢](#). 転倒に伴う大腿骨近位部骨折により入院した高齢患者の特徴: 服用薬物・合併症・ロコモティブシンドロームの観点から. 日本転倒予防学会第4回学術集会, 盛岡, 2017.10.8. [査読有](#)
  - [田中友規](#), [高橋競](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [藤崎万裕](#), [吉澤裕世](#), [秋下雅弘](#), [飯島勝矢](#). 身体的フレイルに社会的フレイルが重複して初めて総死亡リスクが高まる—柏スタディより—. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会. 京都, 2017.10.14-15. [査読有](#)
  - [Suthutvoravut Unyaporn](#), [田中友規](#), [高橋競](#), [藤崎万裕](#), [吉澤裕世](#), [秋下雅弘](#), [飯島勝矢](#). 地域高齢者における孤食とフレイルの関連: 柏スタディー. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会. 京都, 2017.10.14-15. [査読有](#)
  - [吉澤裕世](#), [田中友規](#), [高橋競](#), [藤崎万裕](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [飯島勝矢](#). 生活圏域における地域活動が地域レベル及び個人レベルのフレイルに及ぼす影響. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会. 京都, 2017.10.14-15. [査読有](#)
  - [高橋競](#), [田中友規](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [吉澤裕世](#), [藤崎万裕](#), [飯島勝矢](#). ロコモティブシンドローム予防を目的とした自主グループ活動参加の効果. 第4回日本サルコペニア・フレイル学会. 京都, 2017.10.14-15. [査読有](#)
  - [Emiko Uchiyama](#). Feature extraction method to construct frailty evaluation system. 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017, 名古屋, 2017.10.20.
  - [岡谷泰佑](#), [中井亮仁](#), [高畑智之](#), [下山勲](#). 接触面の静止摩擦係数と3軸力を同時計測可能なMEMS触覚センサ. 第34回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2017.10.30-11.1. [査読有](#)
  - [長谷田真帆](#), [近藤尚己](#), [高木大資](#), [近藤克則](#). 自治体職員のソーシャル・キャピタルと施策化能力の向上: JAGES担当者縦断調査. 第76回日本公衆衛生学会, 日本公衆衛生学会, 鹿児島, 2017.10.31-11.2. [査読有](#)
  - [田中友規](#), [高橋競](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [藤崎万裕](#), [吉澤裕世](#), [秋下雅弘](#), [飯島勝矢](#).



異性間交流が多い高齢女性はサルコペニア有症率が低い—柏スタディより—, 第24回日本未病システム学会学術総会一般演題, 横浜, 2017.11.4-5. [査読有](#)

- [Suthutvoravut Unyaporn](#), 同居家族がいるのにも関わらず孤食の地域高齢者は日常的な孤独感を感じやすい—柏スタディ—. 第24回日本未病システム学会学術総会, 横浜, 2017.11.4-5. [査読有](#)
- [小川景司](#), 環境支払いへの地域と農業経営の対応. 水田経営と新規需要米の展望に関する研究会, 東京, 2017.11.8.
- [Yang N, An Q, Kogami H, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H, Shimoda S, Yamasaki H, Itkonen M, Shibata-Alnajjar F, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H Miyai I](#). Clarification of Muscle Synergy Structure During Standing-up Motion of Healthy Young, Elderly and Post-Stroke Patients. 計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会, 浜松, 2017.11.25-27.
- [麦山亮太](#), 職業キャリアの影響にみる高齢期の所得・資産の不平等: 2015年SSM調査データを用いて. 第90回日本社会学会大会, 東京, 2017.11.
- [角川由香, 成瀬昂, 永田智子](#). 外来患者への在宅療養支援の実態に関する全国調査—退院支援部署による外来患者への支援に焦点を当てて—. 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017.12.16-17. [査読有](#)
- [金圭源, 原辰徳, Ho Quang Bach, 太田順](#). ゴール指向要求分析を加えた価値星座モデルによる価値共創プロセスの詳細化. 日本機械学会 第27回設計工学・システム部門講演会講演論文集, 講演番号1407, 下関, 2017.
- [坂井愛理](#). 訪問ケアにおける病いの理由づけ実践——訪問マッサージを事例として. 第43回日本保健医療社会学会大会, 2017.
- [坂井愛理](#). 専門家による患者の生活誌を使用した病いの理由づけ実践——訪問マッサージを事例として. 第90回日本社会学会大会, 2017.
- [角川由香, 成瀬昂, 永田智子](#). 急性期病院に所属する退院支援看護師が行った退院後支援の実態—支援の実施時期と頻度に焦点をあてて—. 第6回公衆衛生看護学会学術集会, 2018.1.6-7. [査読有](#)
- [山下遥介, 吉田和憲, 木下裕介, 梅田靖](#). 機械学習の溶着不良品判別への適用. 2018年度精密工学会春季大会学術講演会, 東京, 2018.1.15-17.
- [長谷田真帆, 近藤尚己, 高木大資, 近藤克則](#). 地域診断データ活用と組織連携に関する市町村への支援と高齢者の死亡リスク: JAGES準実験研究. 第28回日本疫学会学術総会, 日本疫学会, 福島, 2018.2.1-3. [査読有](#)
- [近藤尚己, 長谷田真帆, 高木大資, 近藤克則](#). 市町村職員への地域診断データ活用と組織連携支援に関する準実験研究: 高齢者の外出と活動参加への効果. 第28回日本疫学会学術総会, 日本疫学会, 福島, 2018.2.1-3. [査読有](#)

- ・ 兩宮愛理, 近藤尚己, 齊藤雅茂, 高木大資, 齋藤順子, 長谷田真帆, 谷友香子, 近藤克則. 地域レベルの social capital と要介護度改善の関連は, social capital の種類及び個人の社会特性により異なる. 第 28 回日本疫学会学術総会, 日本疫学会, 福島, 2018.2.1-3. 査読有
- ・ 菊池宏幸, 尾瀬功, 桑原恵介, 清原康介, 原梓, 柿崎真沙子, 秋山有佳, 大西一成, 黒谷佳代, 長谷田真帆, 天笠志保. 若手疫学者におけるキャリア形成上の課題と解決策に関する探索的研究～WCE2017 でのワークショップを通じて～. 第 28 回日本疫学会学術総会, 日本疫学会, 福島, 2018.2.1-3. 査読有
- ・ 森泉寿土, 中村貴紀, 武川陸寛. 癌抑制遺伝子 MKK4 のフィードバック・リン酸化の機能解析. MMDS, 医科学研究所, 新領域創成科学研究科合同ワークショップ (第 1 回), 大阪, 2018.2.3.
- ・ 森泉寿土, 中村貴紀, 武川陸寛. 癌抑制遺伝子 MKK4 のフィードバック・リン酸化の機能解析. 新学術領域 数理シグナル 第二回 公開シンポジウム, 東京, 2018.2.10.
- ・ 田中友規, 高橋競, 飯島勝矢. ピンチ力と第 1-2 指間厚を用いた簡易サルコペニア評価法の開発—柏スタディより—. 第 33 回日本静脈経腸栄養学会学術集会シンポジウム, 横浜, 2018.2.21-23. 査読有
- ・ 高瀬麻以, 阿部浩子, 上坂英二, 工藤正美, 丸山道生. 回復期リハビリテーション病棟入院患者の血清 Albumin 値と運動機能の変化に関するクラスタリング解析. 第 33 回 日本静脈経腸栄養学会学術集会, 横浜, 2018.2.22-23. 査読有
- ・ 須沢栞, 大月敏雄, 新井信幸, 井本佐保里. 2017 年度日本建築学会関東支部研究発表会, 東京, 2018.3.2-3.
- ・ 馬場絢子. 介護期の母親イメージ模索プロセス: 母娘関係における娘の発達に着目して. 第 7 回超異分野学会本大会, 東京, 2018.3.3-4.
- ・ 小川景司. 環境直接支払による環境保全型農業の普及要因. 高志地区大規模稲作経営研究会, 福井, 2018.3.7.
- ・ 中川慶之, 太田誠一, 中村真人, 伊藤大知. イオン架橋性スターブロックコポリマーゲルの 3D インクジェットプリンティングの検討. 化学工学会第 83 年会, 大阪, 2018.3.13-15. 査読有
- ・ 山口豪太, 久米健大, 三村秀和. 銅電析による高精度電鍍法の開発. 2018 年度精密工学会春季大会学術講演会, 中央大学, 2018.3.13-15.
- ・ 内山瑛美子, 味野俊裕, 田中友規, 飯島勝矢, 高野渉, 中村仁彦. フレイルのマルチモーダル情報に基づく段階評価法の研究. 第 23 回ロボティクスシンポジウム, 焼津, 2018.3.14-15. 査読有
- ・ 味野俊裕, 池上洋介, 山田文香, 内山瑛美子, 中村仁彦. 介在ニューロンを含む脊髄神経系と有限要素筋モデルによる上腕反射系のモデリング. 第 23 回ロボティクスシンポジウム, 焼津, 2018.3.14-15. 査読有

- Sun W, Moro A, Iwataki S, Komatsu R, Fujii H, Yamashita A, Asama H. Simultaneous Tele-visualization of Robot and Surrounding Environment Using Body-mounted Fisheye Cameras. 第23回ロボティクスシンポジウム, 焼津, 2018.3.14-15. [査読有](#)
- 江間見亜利, 國井尚人, 松尾健, 篠崎隆志, 川合謙介, 高橋宏知. Automatic seizure detection in scalp EEG by using convolutional neural network. 医用・生体工学研究会, 東京, 2018.3.20. [査読有](#)
- 高橋美保, 黒田美保, 田川薫, 中山奈緒子, 齋藤さらさ, 野村佳申, 馬場絢子, Alexander Krieg. 成人の発達障害傾向を測定する多面的評価尺度の開発：多職種連携支援につなげるために. 日本発達心理学会第29回大会, 仙台, 2018.3.23-25.
- 豊永耕平, 麦山亮太. 管理職獲得にみる学歴間格差の生成メカニズム. 第65回数理社会学会大会, 東京, 2018.3.
- 麦山亮太. 転職経験からみる階層生成過程：管理職獲得への影響に着目して. 第65回数理社会学会大会, 東京, 2018.3.
- 打越文弥, 麦山亮太. 産業構造の変化からみる日本の性別職域分離の趨勢：国勢調査集計データを用いた計量分析. 第65回数理社会学会大会, 東京, 2018.3.
- 金兌恩, 中野航綺, 岡田宏子, 長谷田真帆, 堀抜文香, 角川由香, 福井千絵, 横内陳正, 須沢葉, 金圭源, 藤田晃大, 山口豪太, 松田涼, 麦山亮太, 須藤誠, 馬場絢子, 王天天, 山根清. 要介護高齢者の居住地選択要因：施設入居者を対象として. これからのジェロントロジーを考える：新しい福祉国家像の実現に向けて. 東京, 2018.3.
- 金兌恩, 中野航綺, 岡田宏子, 長谷田真帆, 堀抜文香, 角川由香, 福井千絵, 横内陳正, 須沢葉, 金圭源, 藤田晃大, 山口豪太, 松田涼, 麦山亮太, 須藤誠, 馬場絢子, 王天天, 山根清. 要介護高齢者の居住地選択要因：施設入居者を対象として. これからのジェロントロジーを考える：新しい福祉国家像の実現に向けて. 東京, 2018.3.
- 高田遼介, 西出和彦. 大牟田市の地域交流施設における高齢利用者の活動継続のあり方に関する研究. 東京大学復興デザインフォーラム 2018, 2018.3.
- 坂井愛理. 訪問マッサージにおける『嘆き』の理解可能性」エスノメソドロジー. 会話分析研究会, 2017年度春の研究例会, 2018.

## 4. コース生受賞歴

### ■ 高瀬麻以

1. 「第9回日本静脈経腸栄養学会首都圏支部会学術集会 最優秀賞」(高瀬麻以, 阿部浩子, 上坂英二, 工藤正美, 中村岳雪, 丸山道生. 西東京市田無病院回復期リハビリテーション病棟入院患者における歩行機能改善群及び非改善群の特性比較) 2017.5.

### ■ Rogie Royce Carandang

1. 「Novo Nordisk International Talent Programme Award」(Rogie Royce Carandang, IARU Global Summer Program, Interdisciplinary Aspects of Healthy Ageing, University of Copenhagen) 2017.7.

### ■ Suthutvoravut Unyaporn

1. 「第1回日本老年薬学会最優秀演題賞」(田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』は要介護認定リスクを高める) 2017.5.
2. 「第59回日本老年医学会学術集会優秀演題賞」(田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. コグニティブフレイルは主観的 Well-being の低下と要介護認定リスクを高める—柏スタディーより—) 2017.6.

### ■ 田中友規

1. 「第1回日本老年薬学会最優秀演題賞」(田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』は要介護認定リスクを高める) 2017.5.
2. 「第59回日本老年医学会学術集会優秀演題賞」(田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. コグニティブフレイルは主観的 Well-being の低下と要介護認定リスクを高める—柏スタディーより—) 2017.6.
3. 「第30回日本老年学会総会合同ポスターノミネート賞」(田中友規, 高橋競, 平野浩彦, 菊谷武, 小原由紀, 古屋裕康, 辻哲夫, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 口腔機能低下の重複『オーラルフレイル』は要介護認定・総死亡リスクを高める—柏スタディーより—) 2017.6.
4. 「第20回秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞」(一流競技者の健康・体力追跡調査—第13回東京オリンピック記念体力測定研究班 (研究班長・川原貢), 飯島勝矢, 高橋競, 田中友規, 含む) 2017.3

### ■ 中川慶之

1. 「化学工学会東京大会学生賞 最優秀学生賞」(中川慶之, 酸化還元応答性鉄イオン架橋ス

ターブロックコポリマーゲルの開発) 2017.8.

■ 内山瑛美子

1. 「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017 Academia Future Leader Award」(内山瑛美子. Feature extraction method to construct frailty evaluation system) 2017.10.

■ 藤田晃大

1. 「東京大学大学院都市工学専攻 2018 年度修士論文優秀賞」 2018.3.

■ 石井絢子

1. 「The 21st East Asian Forum of Nursing Scholars: The Best Presentation Award」(Ishii A, Igarashi A, Morita K, Yasunaga H, Takemura Y, Yamamoto-Mitani N. The effects of nursing assistants on patient/nurse outcomes in Japanese neurosurgical wards: A nationwide survey.) 2018.1

■ 中川慶之

1. 「工学系研究科長賞」(中川慶之. バイオプリンティングへの応用を目指した新規イオン架橋性ゲルの開発) 2018.3.

■ 王天天

1. 「Young Geographer Award」(WANG Tiantian, The Formation of Suburban Residential Area in Chinese Cities from a Life-course Perspective: A Case Study of Huilongguan Complex, Beijing. Association of American Geographers <AAG> 2017 Annual Meeting, Boston, USA) 2017.4.
2. 「中国地理学会優秀論文賞」(WANG Tiantian, Social Mobility and the Formation of Suburban Residential Area in Chinese Cities: A Case Study of Beijing. 12th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography, Jeju Island, Korea) 2017.8.

## 4. 広報活動



# これからの ジェロントロジーを考える

— 新しい福祉国家像の実現に向けて —

このシンポジウムでは、東京大学高齢社会総合研究機構 (IOG) 及び、博士課程教育リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS) の教育・研究成果をもとに、これからのジェロントロジー (高齢社会総合研究学) のあり方を考えます。

**日時**  
平成30年 **3月3日(土)**  
10時30分～17時30分  
(受付:10時より)

**会場**  
東京大学浅野キャンパス  
武田先端知ビル5F・武田ホール

入場無料

## 事前登録

Eメール:  
**glafs-event@iog.u-tokyo.ac.jp**

FAX:  
**04-7136-6677**

お申し込みの際、お名前・ご所属・ご連絡先 (電話番号、メールアドレス)・希望時間帯 (午前のみ・午後のみ・全てに出席) をご記入ください。

申込期限:  
平成30年 **2月28日(水)**まで

お問い合わせは、上記のEメールアドレスまたはFAXまでご連絡ください。

## 【プログラム】

午前

10:30-12:30  
**GLAFS 共同研究成果報告会**  
(研究テーマ)

- 要介護高齢者の居住地選択要因
- 住み続けられる住環境の提案
- 住民主体のコミュニティ活動のデザイン
- 高齢者支援技術のニーズ・現状・調査

午後

13:45-14:00  
**IOG・GLAFS 活動紹介**

14:00-15:00  
**基調講演**

「超高齢社会における福祉国家のあり方」  
神野 直彦 (東京大学名誉教授/日本社会事業大学学長)

15:20-17:20

**パネルディスカッション**

「これからのジェロントロジーを考える  
— 新しい福祉国家像の実現に向けて —」

パネリスト

- 神野 直彦 (東京大学名誉教授/日本社会事業大学学長)
- 熊田 孝恒 (京都大学教授/GLAFS プログラムオフィサー)
- 山本 則子 (東京大学教授/GLAFS プログラム教員)
- 上村 泰裕 (名古屋大学准教授)
- コーディネーター  
大方 潤一郎 (東京大学教授/IOG 機構長)

プログラムの詳細は、ホームページをご覧ください。  
<http://www.iog.u-tokyo.ac.jp>  
もしくは <http://www.glafts.u-tokyo.ac.jp>

## 【主催】

東京大学高齢社会総合研究機構 (IOG)  
博士課程教育リーディング・プログラム  
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS)

APRU Ageing in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists  
若手老年学研究者のためのワークショップ

[主催]  
東京大学高齢社会総合研究機構  
一般社団法人高齢社会共創センター

## Action Research for Age-Friendly Community

### 高齢者に優しいコミュニティをつくるアクションリサーチ

超高齢社会、長寿時代の課題解決に取り組むために、実践的な研究手法で社会を変える。  
世界各地で進む取り組みを学び合おう。

日時：November 9 9:30 ~ 12:00 (開場 9:00)

場所：Auditorium, Engineering Building No. 11, Hongo campus, University of Tokyo  
東京大学本郷キャンパス工学部 11 号館講堂



#### *Measuring and Evaluating Age-friendly Cities and Communities*

Megumi Rosenberg DrPH  
Technical Officer  
World Health Organization Centre for Health Development (WHO Kobe Centre)  
ローゼンバーグ恵美  
テクニカルオフィサー  
WHO 健康開発総合研究センター (WHO 神戸センター)



#### *Recommendation of Action Research for Promoting Age-Friendly Communities*

Takeo Ogawa, Ph.D.  
President, (NPO) Asian Aging Business Center  
Emeritus Professor, Kyushu University and Yamaguchi University  
小川全夫  
特定非営利活動法人アジア・エイジング・ビジネスセンター理事長  
九州大学名誉教授 / 山口大学名誉教授

[言語] 英語 (通訳はつきません)

[参加費] 無料

[問い合わせ先]

事前登録の必要はありません。

東京大学高齢社会総合研究機構

(担当: 田中) a.tanaka@iog.u-tokyo.ac.jp





2018年度開講

# 超高齢社会を支える ジェロントロジー概論

(高齢社会総合研究学)



ジェロントロジーとは、高齢者や高齢社会の諸課題を解決するために生まれた学際的学問です。医学、看護学、理学、工学、法学、経済学、社会学、心理学、倫理学、教育学などの幅広い領域を包括します。2030年には3人に1人が65歳以上という超高齢社会を迎える日本では、専門分化した学問だけでは対応が難しい複雑な問題が生じてきています。ジェロントロジーを学ぶことは、将来どの専門領域に進む上でも非常に有用です。



学部横断型教育プログラム  
ジェロントロジープログラム構成  
(学部3・4年生対象)

選択科目 約50科目のうち8単位



必修科目 4単位

必修科目1  
「高齢者の体と心：老いとつきあう」

必修科目2  
「高齢社会のリ・デザイン」

▼ 計12単位分を履修

履修単位の付与 (各学部)



修了証の付与 (教育運営委員会)

※ 修了証の発行には、卒業年の4月(10月入学の方は10月)までに、UTASにて申請する必要があります。

総長室直轄の高齢社会総合研究機構では、ジェロントロジーに関する学際的教育基盤構築の一環として、2008年度より学部横断型教育プログラム「ジェロントロジー」を国内で初めて設置し、高齢者や高齢社会の諸問題に関する学際的な知識を有する学生の育成を行っています。あらゆる分野を目指す学生の参加を歓迎します。

## 必修科目シラバス

夏学期 高齢社会総合研究学概論Ⅰ 高齢者の体と心：老いとつきあう

学 部 工学部  
時 間 水曜日6限 18:45-20:30  
場 所 工学部11号館講堂  
単 位 数 2単位  
責任教員 大方潤一郎 (大学院工学系研究科都市工学専攻 高齢社会総合研究機構・機構長)

月/日	担当名	所属	テーマ
4/18	秋山 弘子	高齢社会総合研究機構	ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学
4/25	飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構	なぜ老いる？ならば上手に老いるには？
5/2	孫 輔郎	高齢社会総合研究機構	老化と生物学
5/9	秋下 雅弘	医学系研究科	疾病・障害とヘルスプロモーション
5/16	高山 緑(ゲスト)	慶応義塾大学	知的機能の変化と適応
5/23	阿部 啓子	農学系生命科学研究科	栄養とエイジング
5/30	上野 千鶴子(ゲスト)	NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)	ケアの当事者学
6/6	伊福部 達	高齢社会総合研究機構	身体機能を補う福祉工学機器
6/13	牧野 篤	教育学研究科	シニアの学ぶ、働く、遊ぶ
6/20	戸枝 陽基(ゲスト)	社会福祉法人むそう	身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス
6/27	前田 信彦(ゲスト)	立命館大学	高齢者のライフスタイルの変化
7/4	金田 薫子	人文社会学系研究科	人生の最終段階のケア
7/11	山本 則子	医学系研究科	高齢者と看護学

冬学期 高齢社会総合研究学概論Ⅱ 高齢社会のリ・デザイン

学 部 工学部  
時 間 水曜日6限 18:45-20:30  
場 所 工学部11号館講堂  
単 位 数 2単位  
責任教員 大方潤一郎 (大学院工学系研究科都市工学専攻 高齢社会総合研究機構・機構長)

月/日	担当名	所属	テーマ
9/26	大方 潤一郎	工学系研究科 / 高齢社会総合研究機構	活力ある超高齢社会の構想と共創
10/3	辻 哲夫	高齢社会総合研究機構	21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える
10/10	大月 敏雄	工学系研究科	高齢期の住まい方
10/17	濱口 桂一郎(ゲスト)	独立行政法人 労働政策研究・研修機構	年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用
10/24	岩本 康志(ゲスト)	国立国会図書館	人口減少社会における年金と社会保障財政
10/31	鎌田 実	新領域創成科学研究科	高齢者の移動を変える
11/7	村山 洋史	高齢社会総合研究機構	高齢期の健康づくり：公衆衛生学の視点から
11/21	後藤 純	高齢社会総合研究機構	地域包括ケアシステムの地域実装(1)
11/28	関 ふ佐子(ゲスト)	横浜国立大学	自己決定と本人保護
12/5	柴田 聡子(ゲスト)	NPO 法人 案	小規模多機能型居宅介護
12/12	廣瀬 通孝	情報理工学系研究科	シニア×ICT
12/19	白波瀬 佳和子	人文社会学系研究科	高齢化の人口学
1/9	関野 章吉(ゲスト)	SOMPO ケアメッセージ株式会社	地域包括ケアシステムの地域実装(2)

## 開講科目 夏学期

### 特論II 超高齢社会の住まい・まちづくり

内 容 超高齢社会に対応した地域社会の  
物的・社会的な生活環境について、  
多面的な講義を行う

開 講 日 4/10 - 5/29 毎週火曜 6・7限 (18:45 - 22:25)

場 所 工学部 14号館 141室

キーワード まちづくり 交通・移動 バリアフリー  
ユニバーサルデザイン 近居  
高齢期の住まい 地域施設配置

### 特論IV 高齢社会のケア・サポート・システム

内 容 要介護状態でも住み慣れた地域で暮らし続けられる  
医療・介護を中心とした高齢社会における  
ケア・サポート・システムについて学ぶ

開 講 日 5/31 - 7/19 毎週木曜 5・6限 (16:50 - 20:30)

場 所 工学部 8号館 722号室

キーワード ケア・サポート・システム 地域包括ケア  
認知症ケア 多職種連携 地域アセスメント  
在宅医療 訪問看護

### 特論III 人生100年時代のライフコース論

内 容 人生100年時代の到来にあたり、  
「生きる」「老いる」「死ぬ」の実態と課題を、  
心理学、哲学、教育学、社会学の  
幅広い観点から議論する

開 講 日 4/10 - 7/10 毎週火曜 4限 (14:55 - 16:40)

場 所 工学部 8号館 722号室

キーワード 現象学 エンドオブライフ・ケア 社会関係  
格差社会 認知症ケア  
サクセスフルエイジング 生涯学習

### 特論VIII 高齢社会の国際比較

内 容 超高齢社会における人口構造・社会構造・  
社会政策に関して、国際比較の方法と、  
社会的なアプローチを学ぶ

開 講 日 4/18 - 7/18 毎週水曜 3限 (13:00 - 14:45)

場 所 文学部法文 2号館 2番大教室

キーワード 欧米諸国・東アジア・東南アジアの高齢社会  
高齢者ケア・高齢者就労・介護者の国際比較

冬学期の  
開講予定科目

特論I 福祉社会を支える制度体系 (月曜 6限)  
特論VI 高齢者法 (金曜 2限)  
特論IX 高齢者の食と健康(維持) (火曜 5・6限)  
特論X ジェロントロジー (金曜 5・6限)



2018年度

# ジェロントロジー特論 開講

## 高齢社会総合研究学

東京大学では、高齢社会総合研究機構 (IOG) をハブ組織とし、9研究科・30専攻が連携して、  
リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS) を推進しているところです。  
本プログラムが開講する高齢社会問題に関する分野横断的な大学院講義 (高齢社会総合研究学 概論 I・II、特論 I~X) は、  
リーディングプログラムのコース生に限らず、東京大学の全学の大学院生が受講できる科目となっております。  
この問題に関心のある学生諸君は、是非、これらの科目を受講されることをお勧めいたします。

※場所は全て、本郷キャンパス ※各科目の単位数は2単位

**IOG** 東京大学 高齢社会総合研究機構  
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

お問 合 せ : [edu@iog.u-tokyo.ac.jp](mailto:edu@iog.u-tokyo.ac.jp) TEL/FAX 03-5841-1662  
ホームページ : <http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp>

平成29(2017)年度  
東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム  
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」  
コース生(入学・編入)追加募集・募集要項

### 1. プログラムの概要

#### (1) 本プログラムの教育研究上の目的

本プログラムは、修士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行い、各研究科・専攻における教育を通じて「**高度な専門的研究能力**」を育成するとともに、本プログラム固有の教育カリキュラムを通じて、高齢社会問題に関する「**洞察力**」と、現実に社会を変える「**実践力**」を育成し、もって、日本や世界各地の現地の現場において、**活力ある超高齢社会**を実現する原動力を主導する**世界レベルの博士人材**を育成することを目的としています。

#### (2) 養成する人材像

活力ある超高齢社会を共創する能力、すなわち、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的知識と、特定分野における専門的研究能力に加え、分野横断的専門家チームを率いて課題解決に取り組む能力を備えた、博士レベルの人材。

#### (3) 本プログラムの履修要件と学位

本プログラムを履修する学生(以下、コース生と呼ぶ)は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供とする高齢社会総合研究科に関する共通科目について20単位(講義10単位・演習10単位)以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位(講義10単位・演習8単位)以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授与する博士の学位(注)に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記されます。なお、原則として、博士前期課程(修士課程)において4年制博士課程(注)として2年次年度末までに12単位(講義6単位・演習6単位)以上を取得する必要があるります。

### 2. 申請資格

本コース生に応募できる者は、2017年4月に下記の専攻の修士課程1年次・2年次または博士課程1年次に在籍する者で、高齢社会の諸問題の解決に資する研究により博士の学位を取得しようとする者に限られます。

- 工学系研究科:** 社会基盤工学専攻、建築工学専攻、都市工学専攻、機械工学専攻、  
精密工学専攻、化学システム工学専攻、先端工学専攻  
**人文社会系研究科:** 社会文化研究専攻  
**教育学研究科:** 総合教育学専攻、学校教育高度化専攻  
**法学政治学研究科:** 総合法政専攻  
**総合文化研究科:** 広域科学専攻  
**農学生命科学研究科:** 生産・環境生物工学専攻、応用生命化学専攻、大規模生命科学専攻、  
農業・資源経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、獣医学専攻  
**医学系研究科:** 社会医学専攻、生体・環境・加齢医学専攻、外科学専攻、国際医療科学専攻、健康科学・看護学専攻  
**新領域創成科学研究科:** 先端エネルギー工学専攻、メデイカル情報生命専攻、人間環境学専攻、  
社会文化環境学専攻、国際協力学専攻  
**情報理工学系研究科:** 知能機械情報学専攻

## 【添付資料】

# 2017年度 学生募集要項

### 3. 選抜方法

コース生の選抜は、申請書類(申請者情報、研究計画、参加履歴と将来構想に関するエッセイ、指導教員等の意見書)と面接(注1)を総合的に判断して行います。

なお、今年の応募により選抜されたコース生のうち修士課程または医学系等の4年生博士課程に入学する者については、平成30(2018)年3月に資格試験(QE-I)を行い、2年次以降、引き続き本プログラム履修が許可される学生を選抜します。3年制の博士課程(博士後期課程)に入学する者、すなわち本コースの博士後期課程への編入者については、平成30(2018)年3月に博士論文審査(QE-S)を行い、本コースの4年次への進級が許可される学生を選抜します。

(注1) 面接は4月12日(水)17:00~14日(金)14:00の間2日で行予定です。面接の日時は応募者の都合に合わせて設定します。

### 4. 募集人員

今回の募集人員は、修士課程・博士課程ともに若干名。

### 5. 申請手続

#### (1) 申請方法

- ア、申請方法 申請書類を下記の宛に郵送または直接持参すること。  
イ、受付期間 平成29(2017)年4月3日(月)から4月12日(水)16:00まで(必着)。  
ウ、受付窓口 東京都文京区本郷7丁目3番1号・工学部8号館7階13  
東京大学高齢社会総合研究機構  
リーディングプログラム GLAFS 担当  
問、合わせ先 [info@glafs.u-tokyo.ac.jp](mailto:info@glafs.u-tokyo.ac.jp)

#### (2) 申請書類等

- ア、履修申請書 所定の用紙に所要事項を記入したものを。  
イ、教員の意見書 所定の用紙に指導教員または専攻のプログラム担当教員が記載し、密封したものを。

### 6. 選抜結果発表及び採用手続

- (1) 選抜結果の発表は、平成29(2017)年4月14日(金)15:00に高齢社会総合研究機構掲示板上に掲示するとともに、申請者全員に対し、選抜の結果をメールで連絡します。  
(2) 採用手続詳細は、平成29(2017)年4月14日(金)15:00から、高齢社会総合研究機構で配布を限ります。採用予定者は、採用手続要領に基づき、平成29(2017)年4月21日(金)15:00までに必要な採用手続(採用手続書類の提出)を行ってください。所定の期間内に採用手続を行わない場合は、採用予定を消滅したものと扱われます。

### 7. 奨励金の支給

QE-Iに合格し、博士後期課程の意思を明確に表明した博士前期課程(修士課程)2年次のコース生には月額6万円~15万円の学習奨励金、博士後期課程のコース生には月額5万円~20万円の学習奨励金を、**学業成績等**に応じ、支給します。なお、学習奨励金の支給を希望するコース生は、原則として、日本学術振興会特別研究員(DC1・DC2)に応募していただきます。

なお、奨励金を支給した場合は、日本学生支援機構奨励学金等の受給やアルバイトはできません。ただし、進学奨励金制度として、TAこれに準ずる研究補助者としての業務や、医師資格等を持つコース生が臨床実習に従事することは認められます。また、奨励金を支給した場合は、雑所得として所得税の確定申告が必要となります。年間所得に達し、健康保険等の扶養家族から外れることがあるので留意してください。本プログラムを履修する場合でも、奨励金の受給を辞退することができます。また、本人の意思により奨励金の減額を申し出ることができます。学習奨励金の支給額については、本プログラムの予算削減等の、やむを得ない事情により、上記の額に大幅に減少することがあります。

\*本プログラム終了後、すなわち2020年4月以降の学習奨励金の支給についても、現在おなじみの条件で継続する予定です。

### 8. 注意事項

- (1) 受付期間中に必要書類が不足しない申請は、受理しない。  
(2) 申請手続完了後は、どのような事情があっても、書類の変更は認めない。  
(3) 事情により、申請手続等について変更となる場合は、変更があった場合は、改めて通知する。  
(4) 申請に当たって制約のない名、住所等の他の個人情報については、①履修者選抜(申請処理、選抜支援)、②採用者発表、③採用手続業務を行うために利用する。また、他の個人情報、採用者のみ①学籍関係(学籍、修学等)、②学生支援関係(就職支援、授業料免除申請等)に関する業務を行うために利用する。  
(5) 申請書における記載内容について虚偽の記載をした者は、採用後においても適当な処分を受けることがある。

### 9. 説明会

- (1) 募集に関する説明会を下記日程で行う。  
第1回説明会 4月6日(水) 18:00~19:00 工学部8号館02号室(GLAFS7ライブラリ)  
第2回説明会 4月10日(月) 18:00~19:00 工学部8号館02号室(GLAFS7ライブラリ)

### 10. その他

2017年度開講式を下記日程で行う。  
申請予定者はオブザーバーとして出席可とする。

2017年度開講式 4月8日(土)13:00~17:00 工学部11号館講堂  
※参加希望者は、件名に「4/8 開講式」と明記の上、メールにて連絡すること。  
申込先 [info@glafs.u-tokyo.ac.jp](mailto:info@glafs.u-tokyo.ac.jp)

平成29(2017)年4月3日

発行者：東京大学 高齢社会総合研究機構

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

発行日：2018 年 4 月 20 日

D T P：理想社

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo



Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

## 2017 Project report

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

東京大学 高齢社会総合研究機構

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo